（岡山製本）

大正三年七月七日印刷
大正三年七月十日發行

有朋堂文庫
江戸名所圖繪四
（非賣品）

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

ワ

江戸名所圖會　内容細目　終

——（ ）中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは添畫——

ラ

リ

―( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫―

――（）中の一・二・三・四は冊數・〔〕を附したるは挿畫――

——( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは插畫——

ム

メ

( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫

——( )中の一・二・三・四は卷數・〔 〕を附したるは挿畫——

――( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫――

——（ ）中の一・二・三・四は冊數、〔 〕を附したるは傍書——

ホ

——( )中の一・二・三・四は冊數・「〔を附したるは挿畫——

——( )中の一・二・三・四は册數・〔 〕を附したるは準置——

フ

――( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫――

ヒ

ヌ

ネ

——（ ）中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫——

――( )の中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫――

―――（ ）中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫―――

——( )中の一・二・三・四は册數・〔 〕を附したるは挿畫——

ツ

――（ ）中の一・二・三・四は冊数・〔 〕を附したるは挿畫――

——( )の中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫——

——()中ノ一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫——

――( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫.――

ソ

タ

――( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫――

——（中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫——

——（）中の一・二・三・四は冊數・〔〕を附したるは挿畫——

——（ ）中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫——

ス

——（ ）中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫——

()中の一・二・三・四は冊數・( )を附したるは挿畫

──（ ）中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫──

（ ）中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫

（中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫）

サ

——( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫——

———( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは插畫———

——（ ）中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは插畫——

——— ( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫 ———

――( )中の一・二・三・四は册數・〔 〕を附したるは挿畫――

——( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは插畫——

——( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは揷畫——

――( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫――

——（ ）中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫——

オ、ヲ

——(　)中の一・二・三・四は冊數・〔　〕を附したるは挿畫——

エ、ヱ

( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫

ウ

——( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは補遺——

イ、井

——( )中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは插畫——

（ ）中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは挿畫

江戸名所圖會

内容細目

本文の見出しとして掲出せられたる題目及び插畫の全部に加ふるに、本文中に出でたる主要の名所舊蹟俗稱異名を以てし、發音に從つて五十音順に排列す。

ア

——（ ）中の一・二・三・四は冊數・〔 〕を附したるは插畫——

江戸名所圖會 内容細目

をなし、道を開く。堅田の浦より船にのりて、湖東額田井の庄に蟄居す。其後天正年中再興有りて尊像を横川に還坐あらしめ、今に四季講堂に安置し奉る。靈像は伊勢國安濃津西來寺にする奉る。元三大師緣起に曰く、寬永十七年慈眼大師、將軍家御令嗣御誕生の御禱のため、くだして當山に安置し、丹誠し給ふに、八月三日いと平に生れさせ給ふとなり。すべて師出胎の嘉辰、登山入寂に至るまで、三日を期日とせり。御誕生はひとへに尊像の靈驗に侍る。慈眼大師遺言し給ふは、本山の例にまかせて勢州より來らせ給ふ眞影、當山坊々三十日がほど巡番に執事奉るべし、大權の聖像と竝ばんはそのおそれなきにしもあらねど、我頑像もあとにしたがひて共に大樹の御武運を守り、國土豐饒をめぐまんとぞ。下略　今も此例に違はず、晦日順番の寺院へ遷坐あるなり。十月は例年御本坊なり。玄冬に至り雪のふる頃此山王山に登りて眺むれば、吉祥閣へ積れるありさま海內一の絕景なり。

いとど又かぎりも見えずむさし野やあまぎる雪の明ほのの空　御製

——（終）——

かゝる氣色は、また一風の勝地なり。

東叡山寛永寺　人皇百九代後水尾天皇寛永年中草創、比叡山延暦寺をうつされ、御大城の鬼門を守る。靈場として天下泰平の御祈願所たり。

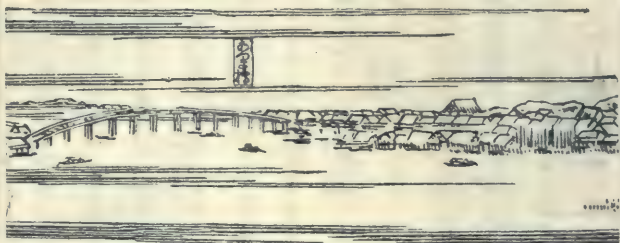
兩大師　慈惠大師　本土江州淺井郡、父は木津氏母は物部氏なり。延喜十二壬申年九月三日生る。諱良源、寛和元乙酉年正月三日入寂、于時七十七。

慈眼大師　本土奥州會津郡、高田鄕義澄の末子といふ。人俗氏の事をとふに、氏姓も行年もわすれたり、一たび空門に入りぬれば、しりてよしなしとてのたまはずとなり。諱天海、寛永二十癸未年十月二日入寂、緣起の年代を考ふるに凡そ三百七十年餘におよべり。

慈惠大師の靈像 民部法眼筆 慈眼大師の靈像 法印探幽筆 元龜のころ山門逆徒のために襲れしに、阿闍梨公の寫させたまふ眞影、竝に民部法眼が摸寫せしと兩像を、時の修事福成坊みづから負ひ奉り、香芳谷を經て落行きしに、敵軍道をさゝへて通さず矢を放つ。福成坊は元三大師の靈像を守奉りたり。速に通すべしといふ。此手の大將木下藤吉郎之を聞き、兜をぬぎて拜

るは稲荷大明神往古より鎮坐ありしとなり。大永年中の兵亂に破壞す。其後慶長の頃御大城御再興の時、別當空源昌運力を盡し造立す。年を經て古への壯觀に復す。表門鳥居の内左のかたに、茶の木の稲荷と稱するあり。俗說に當山に白狐あり、あやまつて茶の木にて目を突きたる故に茶をいむといへり。此神の氏子正月三ヶ日今以て茶をのまず、又眼をわづらふもの一七日二七日茶をたちて願ひぬれば、すみやかに驗ありといふ。山上雪氣色最もよし。

忍ヶ岡

古城なりといへり。大永四年甲申正月、上杉朝興の家老太田源六郎舍弟源三郎反逆して小田原に通じ相圖を定む。北條氏綱一万五千餘兵を卒いて武藏野の城におしよする。城主朝興八千餘兵を卒いて、品川迄おし出で相戰ふ。つひにうち負けて引きかへす。氏綱續いて城におし詰める、朝興こらへかね、其夜のうちに河越の城に落つる。氏綱翌日城に入りて忍ヶ岡の城には遠山四郎左衛門をこめ置くとなり。この忍ヶ岡は今の上野なりといふ。又武藏野にしのぶが岡といふ所ありともいふ。しかれども忍ヶ岡は古き名所なればいづれか是ならん。ある人の曰く、むさし野の出城ならば上野の地にてもあらんか。不忍の池へ雪の降り

隅田川の雪

と有るぞまことなりける。近世畸人傳にも隱家の茂睡とありて、江戸御家士にて隱遁せる人なり云々といひ、歌道に古學を稱するは、此人近世の魁にして、秦の陳渉にひすべしといへるは、その人をしれるさまにて、元祿十七年二月廿四日その菴に寂すといへるはたがへり。二書ともそのつたへのたがへるなるべし。紫一本に、尼了然のかきあつめたる多くの歌のなか、茂睡法師とあるもこの人にて、そのなかに歌六首みえたり、此山の碑もいとふるきゆゑに、半をれたるを好事の人別に又石を添へて修補せり。このあたりより隅田河を望めば、雪飄々として鵞毛に似たり。

むかし此門前にて米饅頭を鬻ぐ、名物なり。當時のはやり小唄に、

　金龍山で同道しよ、もどりかひもしよか、よねまんぢう。

とうたうたりと。此時代は天和より享保の頃までなり。

市ヶ谷八幡宮　別當稻嶺山東圓寺、神體は馬上甲冑の尊形、文明年中太田道灌持資、江城の乾に相州鶴岡八幡を勸請し、武城擁護の基として東圓寺を建て別當とし、山を稻嶺と號く

待乳山　又眞土山　聖天宮を安置す、金龍山本龍院靈驗あらたにして、諸人信心なす。此山の森、むかしは沖よりの船入津のめあてなりといふ。是は深川本所の邊、海なるときの目當なるよし。待乳山も武藏、駿河、大和に同名あれば、古歌ありといへども引きがたし。茂睡が歌はたしかに山上に碑あり。

あはれとは夕こえてゆく人も見よまつちの山に殘すことの葉

戸田恭光入道茂睡は江戸の人にて、戸田茂右衞門と稱し、後本鄕梨子坂邊に住みて梨の本と號しぬ。父は駿河殿の家老にて、渡邊堅物忠といひし人の六男なり。父の忠は戸田與五右衞門忠勝が次男なりければ、父の實家の稱を冒せしなるべし。著述あまたあり、寶永三年四月十四日に終し人なり。然るに隣女悟言には隱家の茂助として、元祿の頃にや江戸淺草の市人に茂介といふもの有りけり云々。ちりの世とおもふ心のつもりてはと云ふ歌を出したり。そのことも歌も少したがへり。

ちりの世をいとふ心のつもりては我かくれがの山とこそなれ

牛御前

法華千部供養碑

長三尺三寸計り　巾壹尺六寸五分程　厚貳寸餘

碑陰銘曰
奉造立釋迦像一
軀貞觀十七丁未
天三月日
法華千部
明王院

三圍稻荷社　同所南の方此境內、隅田川のながれは堤に隔てられて見えずといへども、社の左右みな耕地なれば、枯田に玉屑の積れるありさま、實に豐年の貢ものとみえたり。

見れば、雪の景色いはんかたなし。

いざゆかむ雪見にころぶところまで　はせを

牛御前王子權現の社　同所南の方にあり、別當は最勝寺と號す。本所の總鎭守にして、祭禮は隔年九月十三日北本所石原新町の旅所へ神幸ありて、同じく十五日歸輿あり。祭神素盞烏尊、牛御前と稱す。慈覺大師勸請せり。清和帝第七皇子王子權現と稱せり、共に二坐なり。相傳ふ、清和天皇の御宇貞觀二年庚辰秋九月、慈覺大師東國弘法の頃、素盞烏尊位官の老翁と現し、此地に跡を垂れ、永く國家を守護せんと告げ給ふ。仍て大師一社に奉じ、上足の良本阿闍梨を留めて是を守らしむ、すなはち良本彫像の大日如來を本地佛とす。又五十七代陽成院の御宇、清和帝第七の皇子當國に遷されさせ給ひ、天慶元年丁酉九月十五日この地にて薨じ給ふ。よつて開山良本阿闍梨こゝに葬り奉り、牛御前の相殿に勸請なし奉るといへり。其後靈告ありて云はく、素盞烏尊第二の御子にて、假に清和帝の皇子と生を替へさせたまふと、云々。

千鳥
家隆

洲崎　海潮山増福院辨財天を安置す。開基は知足院隆光大僧正、字は榮春河邊氏なり。當院は海岸にて東は房總の遠山浪をひたし、南は羽根田支那川。北は筑波根のかすかに見えて佳景の地なり。境内貨食屋軒をつらぬ。遊客寒風をいとはずして、この樓などに集りて千鳥を聞く。中河行德もよし。

○雪

愛宕山　芝にあり、この山上より雪中に見おろせば、格藩につもれる雪、綿をもつて家居をつくれるに似たり。遙に望めば安房上總の山々片片たるうちに見ゆ。本尊は行基の作にして勝軍地藏なり。毎月廿四日緣日たり。六月廿四日は四萬六千日と號して參詣殊に群集す。此日境内にて青き鬼灯を鬻ぐ、小兒に呑するときは蟲の病の根を切ると云ひならはせり。

高輪　この海岸の酒樓より海上を望む時は、雪の紛紛たるありさま、他に比する處なし。

長命寺　隅田河の堤曲行の角にあり、境内に芭蕉の碑あり。この邊に佇みて左右をかへり

龍岩寺　青山にあり、大門を入りて正面本堂なり。これを左のかたへつきて曲れば後園にあり、見る人に安からしめんがために圓坐松の下をおのづから下りて、一段下の庭へ行くなり。こゝに止りて見れば枝葉天を覆ふが如し。又是に似たる松、王子の貨食店扇屋の庭にあり。松の名木を數へ擧ぐるときは數樹にしていとまあらず、よつて往古より名木と唱へ來る處の一二樹と、中興作れる處の兩種をあぐるのみ。

○枯野

從雜司谷至堀之內路　枯野は何處と定むるにあらず、その所々にして風景あり。隅田河は東の勝地にして四時の詠ある處なればいふもさらなり、圖にあらはす處は雜司ヶ谷より堀の內へ廻る道なり。こゝは山間の耕地にて淸水の流れなどありてしづけき地なり。

○千鳥

枯野

穴八幡社　高田戸塚村別當光松山放生寺に光り松といふあり、むかしは繁茂りたる山なりしが、里人伐りつくして、たゞ一もとの松のみのこれり。寛文十三年にあたりて御弓組の與力此處にて弓の稽古ありしなり。弓矢の神なれば、八幡宮を勸請せんと催すをりしも、山鳩三羽日毎に來る故に、二本の松を神木とあがめ、華表をたつる。同十八年周防國山口八幡の氏人良昌僧都は毛利家の人にして、榎本何某たり。遁世なし回國行脚として當國に來り、雜司谷御藥園の主にやどす。その後中野寶泉寺に入りて法印秀雄の會下にありしを、まねきて社僧とす。おなじ秋草菴をむすばんと地をならすに、掘崩したる山の底にちひさき穴あり、口せまく奥ふかし、方九尺にあまる、その中に長三寸ばかりの佛像石上に座し給へり。良昌これを尊む、よつて此處を穴八幡といふ。その穴今にあり。當山の腰より淸き水したゝりいづる。是石淸水の名をおふしるしなりとぞ。

西歸山常光寺　龜戸六阿彌陀六番目來迎松とて堂の前にあり。中古火災のとき本尊此木にとびうつり給ふゆゑ名づくとなり。龍燈の松といへるは本堂のうしろにあり。

とかたし、汝力をくはふべしと、答へていふ、水中の事いかで凡人の力に及ばんや、又いふ、近日夕陽あかくかゞやく日あり、其時君去津の渚に兵船をうかべ、鉾劍をさかしまに水中にひたし、太鼓鐘をもつて龍神を驚かすべしと、その日を期してをしへの如くす。海上高波しきりにして、船こと〴〵く汀によす、時にひとつの白狐寶器をくはへ泛びいでて兵船に投入れ、陸に至つて以前の美女と現ず。その寶器を以て稻荷大明神と崇むとなり。末社にいなりの神あり、こゝにいふ寶器は、劍か鏡か珠玉なるか知らず。當處楠の枝葉を煎じ腹すれば諸病を治すといひつたへて、庵主に枯枝を乞ひ求むる人あり。はなはだ匂ひ深く、その香樟腦なり、樟と楠と一類二物にして、樟は香つよく木心黑赤なり。樟腦を煎ずとあり、則ち此神木は樟なり。一品はいぬくすといふ、香よわく色も黑赤ならず。又楠の石になりたるあり。木理節其儘にありて、石よりも重く石よりも堅し、之を敲くに金聲を發す。

○松

魂止給、海上守ニ護船ニ玉とあり。よつて海上船中の守護神となすなり。日本紀景行天皇四十年十月、日本武尊相摸國に進みて上總に至らんと船にめしけるに、海中にて暴風起り渡りがたく、御船危かりしとき、尊の妾に弟橘姫といふあり、穗積氏忍山宿禰が女なり。尊に云つていはく、風起り波はげしくて御船を沈めんとす、これ海神の心なり、ねがはくは妾が身をもつて主命に贖ひて海に入らん、と自ら海中に入るに、暴風忽ちやみて船岸につく事を得たり。

著岸の地は上總國君去津なりといふ、よつて君去津と書くといへり。この處に吾妻大明神あり、これ卽ち橘姫の靈社なり。

橘姫は本土相州なり。大磯梅澤の入口にあり、上の宮といふ、橘姫の御體の流れよりしをまつるといふ。また當社は稻荷の神といふ說もあり、庵主云ふ。むかし下總國相馬へ一人の美女來つて曰く、我は是弟橘姫の靈なり、そのかみ一つの寶器を海底にしづむ、これをとり得んことを欲して三百年來白狐と變じ、海中に入る事數あり、龍神深く惜みてとるこ

吾妻森楠

く咲き出づるをよしとして、神佛の緣日にもち出でて鬻ぐ。

○寒梅　山茶花　枇杷　茶の花

向島の邊　風流人の別業、あるひは隱士の庭中にあり、しかれども此地に限れるにあらず。生垣の中に交り、または園中に一樹もあるのみにして多樹なきゆゑに、確とところを定めて出さず。堀の内、靑山の邊、又根岸あたりにもあり。

○連理楠

吾妻森　小村井龜戸の四五丁北に有り、吾妻大權現石の宮殿なり。當所は橘姫の廟なりといふ。鎭坐は景行天皇七十六年乙卯といひ傳ふ。凡そ二千歲に及ぶ、東武第一の古跡なり。上古の事里諺のみにしてそのしるしばかりありしを、天文の頃小田原北條氏政の臣遠山左衛門、鈴木隼人、井出大學などいふ人ふたゝび起立せしとなり。橘姫ノ神靈、東海鹽ノ八百會ニ陽

巻之四

○寒菊

平河山法恩寺　本所柳島にあり。此梵刹のうしろのかた農家にて、多く季候の草花を作れり。中にも冬にいたりて寒菊を作る頃は、諸草みな枯れたる中に、黄金いろなる田園を見渡すこといとめづらし。此地にも限らず、諸地千住處々にて作れるなり。當院は太田道灌の息男源六郎早世す、法名を法恩といふ。菩提のためにとて、父道灌一字の精舎を建立して法恩寺と號けしとなり。昔は御城中平河口にあり。そののち柳塘にうつり、元祿年中此地へうつさる。毎年六月二日より法華千部の執行あり。

○水仙

押上植木屋　此地に限らず、染井、三崎、巣鴨、四ツ谷、目黑邊處々にてつくり、花少も早

見物をゆるさず、しかりといへども、遊客庭中に入るといへども、敢てまた咎むることもなし。たゞ掃除のとゞかざるをはづると見えたり。明和安永の頃は、楓とだにいへば人々正燈寺と心得たるほどに盛なりしとぞ。

みわたせばあまの香久山うねび山あらそひ立てる春霞かな

すみれ

古郷の野邊みにくればむかしわが妹とすみれの花咲きにけり

山里へほとゝぎすきゝにまかりて

卯の花を手毎に折りてかへらまし山時鳥ききしるしに

古寺鐘

よしの山入りにし人はおとせねどゆふべの鐘にありかをぞしる

夏日東海道中望富士山

ふじの根の麓をいでて行く雲はあしがら山のみねにかくれり

目黒　泰叡山龍泉寺、當山境内楓樹多し。毎月廿八日は不動尊の縁日なれど、とりわけ正五九月は前夜より參詣多し。

東陽山正燈寺　龍泉寺町、當寺もみぢの名所にして、高雄の苗をうゝる、近き頃はみだりに

た別莊なり。常に音曲を禁ず一町ほど入りて表門あり、門外には馬とゞめあり、岸に大木の古松有り。行者代官等此側に住宅せり。又御殿山の下より畠の中道ありて門あり、これを御成御門といふ。また居木橋の上に門あり、西門とよふ。惡津橋を過ぎて門あり、南門といふ。目黑桐谷より品川南馬場への道へ出づるなり。

縣居翁の墳墓　塔頭少林院の後の山にあり、翁は遠江國敷智郡伊場村の岡部の新宮の禰宜定信の二男なり。諱は眞淵、縣居は號なり。享保十八年京にのほりて古學を學び、寬延三年江戸にくだりて八丁堀に居住し、後濱町に家をうつし、延享三年田安に召出され、寶曆十年致仕して明和六年十月晦日、齡七十三にして身まかりぬ。玄珠院眞淵義龍居士と法號す。近代名譽の歌よみにて、此大人の德をしたふ人多し。毎年九月晦日には江戸に名だたる歌人少林院に集會して、歌よみて手向とするなり。

翁のよまれし歌の中二三首を擧ぐ。

春日望山といふことを

御製
秋の

東海寺
楓樹

あり、月牌として廿貫文寄附すとあり。平時頼の石塔あり。最明寺殿覺了房道崇大禪定門弘長三癸亥年十一月廿二日二階堂出羽守の石塔あり。むかし當寺門前は鎌倉街道の關所にて、賴朝卿より北條家までは執權の中一人關所守護として、大森村に屋形を建て居住せしとなり、故に當寺の檀那なりとぞ。

萬松山東海寺　當山境內廣くして大樹の楓樹數多あり。開山澤菴和尙の道德はいふもさらなり。諸道に通達して凡人ならざることは世もつて知る處なり。廟所は大なる石のむまれのまなるをかさね置きて、銘文もしるさず、是和尙の遺言なりと、また茶道に達して一首の歌あり。

茶は好め道具はすくなかけ茶碗ひとつありてもことたりにけり

今糠漬の大根を澤庵漬といへるも、この和尙の工夫にて漬けはじめられしとなり。當寺は輪番にて每年八月交代なり。大門は步行新宿にあり。黑門といふ是なり。御成道なり、左右竝木ありて門あり、これよりうちを私に長者町と呼び來りぬ。町竝にはあらず家々は隱者ま

ひ繁茂せり。そのころの童の唄に

　品川浦は名所かな。海晏寺前のさがり松、御代もさかえてめでたさよ。

と謳しとなり。後の西の山に松を植ゑ、楓樹千本を植ゑて、蓬萊山と號す。北方に蓬萊亭あり。南に坐禪堂、西に長さ三町餘の泉水をかまへ、龍淵と號し、其上に梶原の墓あり。南にあたりて梶原屋敷あり。又明神の森あり、西南に山王の社、弘法大師の作、石地藏權現の御手洗池延命水といふ。橋あり兩溪橋といふ。橋下に蛇の淵といふあり。建久の頃里の女身を捨て蛇になりたるを、二世古山和尚引導して、天上を得るといふ。そののち淵なし橋の前後貴人の墓所石塔數多あり。東方に蛇腹紅葉、千貫紅葉、西に花もみぢ、淺黃紅葉、菲梅もみぢ、猩々紅葉といふあり。北に彌陀堂、坊舍、僧房、竹林軒あり。佛殿の前に四方八面に榮えたる牡丹あり、千貫牡丹とも、八幡影現の牡丹ともいふ、總門の内に賴朝松あり。千貫松とも、龍燈松ともいふ。門内に天照白山稻荷三社あり。佛殿南方に觀音堂と拜殿、南に普門閣を建て、供奉の人數八十字房舍を建つるとなり。弘安五年北條時宗願主にて堂塔造立入佛供養

天皇建長三年亥冬當寺門前の海中より、大なる鮫漁夫の網にかゝりて上りしが、其腹中より正觀世音出現し給ふ故に、鎌倉へ訴しに、時頼朝臣希代の事とし、これ則ち天下安全の瑞なるべしと、そのほとりに堂塔を建てられ、かの觀音を安置して、山號は觀音の淨土に準へて補陀洛山と號し、四海安平の義によりて、海晏寺とせらる。瑞林院、瑞應院、廣正院、東悅院の四字の院を造營せられしに、同六年の春諸堂全く成就し、入佛あり。同七年供養を遂げ、則ち鮫のあがりし處を鮫濱といひ、又鮫洲崎といひしなり。住持は右四ヶ院の戒臘次第たるべき定にて、道隆和尙を開祖とし、古山和尙を二世とす。時頼の定に鎌倉高野と相定るうへは、信仰の面々月牌を備へ石塔を建つべし、また重罪の輩たりとも、海晏寺へ欠入るものは免許すべきとなり。山庫僧供は東西南北方十里頭陀すべし、毎年秋一度の免許なり。五ヶ院の寺務は百八十貫 本菴 百 貫四ヶ院二十貫文宛の定たり。境内南北十二町、東西十町なり。時頼天竺靈鷲山の境に準ぜらる。又松千本欅千本を植ゑられ、右の洲崎には八幡三社を建て、又海月菴、明月菴、圓通閣、松影堂、水月堂を建て、右の松往還の路上に枝葉おほ

瀧野川
光榮

當山は山伏持の寺にして、眞言宗なりといへり。中山草創のみぎり、日蓮上人宗法を論じ山伏法華の奥儀に伏し、日蓮上人の弟子となり。寺を法華の道場に改むとぞ。また眞言の密法を日蓮上人にさづけしとなり。そのゆゑに當山と中山とは、法華の祈禱を專に修するなりといへり。

秋葉大權現　向島にあり。境内廣くして池あり、池の廻に茶店貨食屋等あり。楓は所々にあり。なかにも裏門の方へよりて、數十本あり。染出すころは人々きそひて見物す。

瀧野川　流れ淸らかにして川は曲行なり。一步ごとにながめの替る地なり。川ばた岩窟のうちに辨財天を安置す。風景小く金龜山に似たるところあり。楓の色さかりの頃は、この川水にうつりて、龍田川もかくやとばかりあやしまる。

まだきより散るかとぞみる紅葉ばのうつりて落つる山の瀧つせ　前内大臣

おちたきつ瀧のしらいと染めかへておるや錦の秋のもみぢば　爲敦朝臣

補陀洛山海晏寺　品川鮫洲にあり。當山は江府第一の楓の名所なり。寺記に、云く後深草

菊を養ひ造りて、十月八日より會式なれば、その參詣の群集をまつなり。六老僧の寺院にも、おなじ時境内または庭中へ菊を植ゑ、日覆障子をかけ渡して、手際のほどをみするもあり。又日蓮上人の、諸人を濟度なし給ふところ、または上人御難のところなどを作物とす、よりて詣し人々は堂前に充滿して、歸路をわする。

○紅葉

眞間　眞間山弘法寺、下總國葛飾郡、江戸より三里餘、本堂の前に楓あり。高さ四五丈餘、たぐひなき名木なりといへり。手古奈明神は石階の東のかたへ行くところなり。むかし一人の美女あり、身まづしく藻をかき水汲などしけれども、形貌の美なること宮中の官女にもはぢず、見る人懸想す。女思ひあつかひ身を投げうせぬ。人々あはれにおもひて、靈を神に祭るとなり。

かつしかの眞間の入江にうち靡く玉藻かりけんてこなし思ほゆ　赤人

ぐさの蟲ありて、人まつ蟲のなきいづればふりいでてなく鈴蟲に、馬追蟲、轡蟲のかしましきあり。おのおのその音いろを聞かんとて、袂すゞしき秋風の夕暮より、人々こゝにあつまれり。また麻布廣尾の原、牛島もよし。

○菊

巣鴨　植木屋所々にあり。文化のはじめの頃、菊にて作物を工夫せしなり。植木屋ならでも作りたるなり、中にも木綿屋何某といへる豪家は、常に後園に菊を作りて、見物をゆるせしなり。しかるに作物二三ヶ年が間盛にして、九十軒餘に及べり。その工のこまやかなること、實に奇といふべし。あらましをいふに、獅子の子落し、布袋の唐子遊び、汐汲の人形、九尾の狐、文覺上人の荒行、富士見西行などいろいろの花と葉をもつて、工あげたり。かゝることも後には口碑に殘るのみなれば此に十が二三をしるす。

雜司ヶ谷　鬼子母神の境內貨食屋の奧庭、あるひは茶店植木屋はいふもさらなり、みなよく

考索舊跡有年。近者認之。請我老公書其古歌一首以勒碑。樹之於多麻郡猪方村。而後古蹟砿然與貞石共立世。夫微顯闡幽春秋之志。董威其蓋學此乎。況老公之信貽證于後世。而有餘也。而以爲表乎。

文化十四年丁丑臘月

品川　此地は高輪の邊よりして、都て海上の見晴なれば、月の出はいつにてもよし。また七月廿六夜には雅俗うちまぢりて、月の出の遲きゆゑに、さま〲に興じて、月の登れるを待つなり。その賑はへることゝ、ひとかたならず。この夜は處々に月待あり。湯島天神の臺、九段坂のうへ、日暮里、諏訪明神の境内、その他なほありといへども、品驛をもつて當夜の第一とす。

○蟲

道灌山　日暮里より王子への道筋、飛鳥山の續なり。昔太田道灌出城の跡なりと云ふ、くさ

傍へ此地の文人碑を建んことをおもひて、白川樂翁君の御筆をねがひ奉りしに、古歌一首御筆を染られければ、頓に良工を撰みて彫せたり。

多麻河泊爾左良須
弖豆久利佐良佐良
爾奈仁曾許能兒能
己許太可奈之伎

玉川碑陰記

白河廣瀬典撰
同藩大塚桂書

水名玉川。天下凡六。在武州爲其一。而水道屢移。問而莫得。平井董威

金龍のうかぶに似たり、人々船を泛べ流にさかのぼり、詩を賦し歌を詠み、あるひは妓を携へ絃歌を催しおもひ〳〵に遊興をつくせり。

武藏野　むさし野は江府の西北五六里ばかり秩父山の方なり。文人墨客旅心に出立て、一夜の草枕に月を詠む。武藏野ははてしもなく廣きことゆゑに、此處と定めたるところもなければ、知己をたづねて、ともに詩を作り、あるひは旅店をもとめて歌をよみなどして、風流つくることとなし。

行く末は空もひとつのむさし野に草のはらよりいづる月影　攝政太政大臣

むさしのは月の入るべき山もなし尾花が末にかゝるしら雲　大納言通方

むさし野は猶行く末も秋萩の花すり衣かぎりしられず　詠人しらず

玉川　江府より西の方六七里にして、中河原是正の邊をよしとす。此處は分倍河原とて、正慶亨祿の古戰場なり。月の水にうつれるは一入なりとて、遊客この河原に集り、思ひ〳〵の興を添へて月を詠む。名物は此河の鮎なり。相摸川などより佳品なり、近きころ水神の社の

て、萩の花さかりには、錦をつらねたり。いまは殊更數千叢になりて、貴賤群をなして歩行をはこぶ、俗よんで萩寺といふ。名物萩の箸萩の楊枝あり。

此餘寺院社頭に、萩を植たる所多しと雖も床机を設けて詠むるたよりなきは、是をのせず。

淺草淸水寺半島長命寺などのたぐひなり。

淺草人丸明神境内　當社の前にから堀の池ありて、よき所々に萩を植ゑたり。此處は春秋ともに詠あり。池の傍に菴ありて、日をトて乞ふときは、座敷をかすゆゑに、風流の人々こゝにて和歌連歌等の會を催す。

○月

三派　三派の月見んとて、延寶天和の頃人々船にておほく出たるよし、安宅丸の御船をかけられしこともあるよし、このみつまたは隅田川の上の三派ならんか。

淺草川　隅田川の下流金龍山の麓をいふ。淸明の夜は、月の輝滔々たる水に浸りて、あたかも

たなばたに今宵やかさん秋萩の花ずり衣色あせぬ間に
天の河かはべのをばなかたよりになびくもほしの心をやとる
たなばたの袂おぼえて秋風のふきうらかへす庭のくず原
たなばたの袖のにしきもかくこそと見るめもあやに匂ふなでしこ
今宵しもたなばたの手にあへよとて誰たちぬへる藤ばかまそも
棚機のおもかげみせて澤水にすがたをうつすをみなへしかな
ほし合のなごりをそれとしのべとや露にしほれし朝がほの花

○萩

慈雲山龍眼寺　本所龜戸川の通天滿宮の裏門の先にあり。當寺に殖髮聖德太子の像を安置なす。推古天皇の勅願によつて、大和國大安寺の本尊なりしを、故あつて當寺にをさむ。明和三年よりして太子堂建立の爲とて、庭に萩を多く植ゑたり、もとより池水清らかにし

巻之三

○牽牛花

下谷御徒町邊　朝顔は往昔より珍賞するといへども、異花奇葉の出來たりしは、文化丙寅の災後に、下谷邊空地の多くありけるに、植木屋朝顔を作りて種々異樣の花を咲かせたり。おひおひひろまり、文政はじめの頃は、下谷淺草深川邊所々にても專らつくり、朝顔屋敷など號けて見物群集せしなり。

○七草

百花園　向島花屋敷、秋草の中にも、七草と唱へて愛翫するをこの園中には、みなそろへて植ゑこみたり。七草は、平春海大人七夕へ手向られし歌あれば是を擧げて、その草のかずかずをいはず。

いへり。常胤魁先陣の願書、内陣にこめおき、つねに祈願なす、よつて先陣の高名數度におよべり、故に眞先の神號ありとぞ。神木の大榎あり、此木何れへもよすることならず、これ神意に背くなりと、由て社造立の時も其儘に置ける故に、拜殿の軒によこたはる。

文化年間此社のうしろの方より、老狐のいづることありて、おそなへ油揚等をほどこすに、おいで〳〵と呼べば出きたれり、終にひろまりて、眞崎のお出〳〵といひて、願望の爲に人人群參しける、はたして諸願成就せしなり。

このことはやりて、人みな船のちひさきをうれひおもふほどに、船も次第に大くなりて、七八間の樓船を造り、後にはふねの名を川一丸、關東丸、山一丸、大關丸、市丸、などと名づけて、山一丸は八九間、熊一丸は十間あり、市丸は十一間、これ等に主從數十人乘りて、辨當品々美をつくせり云々。さて慶長の頃、納涼船の權輿質素なることをしるべし。

上野黑門前　廣小路の中通り左右へ夕暮より茶店竝よく床机を居ゑ水など打めぐらして、諸人にあつさをしのがしむ。此地は川風なしといへども涼風きたるなり。

○荒和祓　名越祓

眞崎稻荷大明神　名越とは夏越の略にして、火剋金するを祓ふよし。公事根元、節折の式に、晦日の夜御贖物まゐるあらよにごよの御裝束云々。是卽ち御祓の具なり。荒節和節の祓といふべきを、略して荒和の祓といふにやと、ある人物語き。江戸にて御祓諸社に行ふといへども、この處と佃島へ、諸人群集す。當社は千葉介常胤、石濱城内の守護神なりと

空をこがすばかりにて、壯觀いふべくもあらず。酒うる船、肴うる船、菓うる船は、酒肴の盡きたらんとおもふ船のあたりを漕ぎあるき、また風流の遊客は隅田河の上のかたにふねをのほせ、簫篳篥などを吹きすさみて、なぐさむもあり。或は碁將棊に日を暮すもあり。文政四五の頃より屋根船にて鳴物何くれとなく打ならし、戯場の物眞似をなす。是を蔭芝居と號て夕暮よりうかみ出しが纔にして止みぬ。また吾妻橋のかみのかたに、鰻魚の蒲燒を鬻ぐふね目標のあんどうなどかけならべ、家居の如くなしたるありけるが、是も一二年にして止ぬ。また安永天明の頃は、大橋の先中洲の涼といへるは、いと興あることにして、船もいまよりは大なるありて、高尾丸、川一丸、吉野丸神田丸などとなへたる大樓船ありて、いとにぎはしとなん。往古慶長の頃夏の日の炎暑をくるしみ、もろ人納涼の爲にひらた船に屋根を作りかけさし、是を借りて淺草河を乘まはしける。是船遊びのはじめなりと、昔々物語に見えたり。同書に云ふ、明暦三年災後三四年が間船遊びたえてせず、萬治にいたりてまた彼涼船を造り出ししかば人また是をかりて、夏日のあつさを淩ぎ、且災後の艱苦を忘る。よりていよく

一帯長江
分國流船
舩歌舞載
時休遊入
醉着晩風
裏錯取纜
別爲武州
鶴齋

両国橋納涼

み、さてつき込たるを雙方よりはなびらをよせて、こよりにて結び、圖の如くさかしまにかけ置くべし。花びら幾重もかさなりたれば、漏ることとなし。又別に茶を薄くせんじ、さて蓮花のなかの茶を少し宛さして、喫する時は、匂ひたかく心淸々しなくりて精神を養ふ。

○納涼

兩國橋　納涼避暑の地、所々にありといへども、この兩國川をもつて東都第一とす。川幅百三十間餘水淸くして、流やすらかなり。東に筑波靑く聳え、西に不二白く立り、右は永代品川にすゝぎ、左は待乳山隅田堤も遙に見えて、橋の東西を元町廣小路と呼び、又五月廿八日よりは夜みせも殊ににぎはしくて、遊船もこれより次第に多くなれり。扨炎暑をしのがんとする輩は、此川上と川下に船をうかべ、あるひは橋の下に日をさけんため、船を繫ぎて、思ひ〳〵に遊興す。三味線小唄は、いふもさらなり。樓船には蹟を催し、玉屋鍵屋の花火は

かんばしく、又紅白の蓮花朝日に映ずる光景たとへんに物なし。又文政三四年の頃より此池の岸通西南の方、陸より幅八間のほりをほりめぐらし、その先に八間ばかりの堤を輪のごとく築きて、このつゝみのうへに茶店たちつゞき、貨食舗軒を並べ、梅櫻など植込ていと賑しくなれり。不忍池とは上野を忍ケ岡といへば、それに對しての名なるべし。

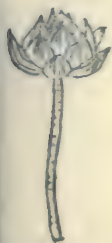
回國雜記

霜ののちあらはれにけり時雨をば忍びの岡の松もかひなし　道興准后

風土記云

篠輪津池貢鯉鮒鰻魚鴻雁鸛鶴鷺鴨等。周行十里許程。旱日水不涸。霖雨不爲害。祈旱雨入詣于茲所。祭瀨織津比咩也。

とあり

因にいふ、蓮茗といふを製するに、うてなのたしかなる花を、葉のまとりてよき茶を濃く煎じ煮たちたるを能きほどに花の中へつき込

深大寺　府中に在り。此地の螢は他に勝れて大きし。

○蓮

溜池　赤坂御門外いちめん溜池まで、花葉水面をふさぎて夥し。格物叢話に荷花重臺のもの、雙頭のものは以て瑞とす。又曉朝日に起き夜低て水に入るものあり、是を睡蓮と云り。爾雅荷は芙蕖なり。其莖は茄、其葉は荷、其花は菡萏、其實は蓮、其根は藕、其中は菂、凡草木の中一物にして、花葉根莖子を用るは蓮をもつて第一とすといへり。

増上寺地中辨天の池　赤羽根のかたへ出る御門のうちなり。

不忍池　東叡山の麓なり。見わたし三四丁、長さ五七丁程、源水は谷中千駄木の小川より流れいづる。中島に辨財天あり。江州竹生島をうつす。寛永の頃までは離島にて參詣の通路なかりしといへり。今は通路ありて、しかも島のめぐりは皆貨食屋なり。名物、蓮めし田樂等を鬻ぐ。花盛のころは、朝まだきより遊家開花を見んとて賑ふ。實に東雲の頃は、匂ひ殊に

○合歡木

綾瀬川　花又村の川筋、小菅御殿地の跡の邊、いにしへはおほかりしが、今はこゝかしこにあり。又大音寺前戸田侯別業東のかた藩外、又本所柳島妙見の土居、水道橋土居通所々にありといへども、たゞ往來にして一見するのみなれば、こゝに擧げず。

○螢

ほたる澤　螢川とも云ふ　谷中三崎宗林寺の地なり。他のとくらぶれば光甚しく、形も大なり。

姿見の橋　俤の橋とも云ふ　落合すがたみ橋より三丁ばかり川上の上水川と、雑司谷の細流との間なり。この川の上のところに一枚岩と唱へて水中に大巖あり。

王子下通　王子より根岸坂本へ通ふ飛鳥山の下をいふ。

江戸川の邊　小日向龍慶橋の川筋。

橘千蔭

綾瀬川
合歓木の花

長榮山本門寺　池上にあり。本堂左のかたに橘の大樹あり。花さき出るころは、石階を登るに、その匂ひ繽紛たり。抑も當寺は、日蓮上人入寂埋葬の地なり。歯骨は身延山にをさむるといへり。什物には、祖師直筆にて、自註なしかきいれ給ふ法華經其外自書多し。

祖師堂　長榮山　本門寺　此三ツの額は本阿彌光悦の筆なり。

○水鷄

標茅原　玉姫稲荷の邊此社は山城國稲荷山のいなりをうつししなり。王子村岸稲荷と神緣ありと云傳ふ。御玉姫稲荷といふも故ある事なり。正慶二年新田義貞朝臣鎌倉の高時を追討のみぎり、弘法大師直筆の像を、襟掛にし給ひしを、瑠璃の玉塔にこめて當所にをさめまつり給ふ故に、御玉ひめ稲荷と稱するよし。

佃島　さつきのころ船をうかめて、よもすがら聞く人あれども、雨のよくふる時節なればいとゞうかるべし。

その頃季候によりて、すこし過ぐることありといへども、諸國の種をうつし植し故に、花にときおそきあり、また二ばん三ばんと咲きつゞく故に久くたもつ。

蒲田和中散　梅林　品川の先なり。後園梅樹のもと一めんの池にして、杜若を植ゑたり。四月のせつより、咲きはじめて、十月の末までたえず。

○卯花

庚申塚　巣鴨、板橋宿へ出る道筋なり、農家あるひは植木屋におほし。

河崎　大師河原より鹽濱へ出る道筋農家にあり。家によりては一丁餘もあるべき垣根みなうつ木なれば、花のころは實に雲のつもれるがごとし。

咲きしよりつもる日數のあとみえてうの花垣ぞ雪になり行く　平春海

○橘

降り來るとあり。いづれなるべしと問ひしに、或人こたへて云ふ、おのれも此說日頃いぶかり思ひけるに、元祿六年に生たる隱士擧一堂之記を見るに左のごとき文あり。

晉其角。成年與門人同船而遊隅田川。今茲天下旱魃。而田面無水。門人等望雨乞之句。晉辭不止。故作句須臾雨降。世人感其俳德云々。

此記露ばかりもいつはりがましきことをかきたるものにあらず。こゝにおいて思へば元祿中の人既にこの事を傳へて、風流の話柄としたるを、擧一堂しるしおきたるなり。雨の降りしはいづれの日にもあれ、此事を語り傳ふるは、其角がほまれといふべしと、答へられたり。またかたはらなる人いへるは、夕だちやとよむは、讀則をしらざるなり、夕だてやといひてしかるべきむね申されき。又其角ユタカといふ三字を折句になして、ひそかに豐作の意をもつて祝したらんと語られき。

木下川藥師の池　龜戶のさきに在り、池中は一面紫にして、そのなかへ八橋をかけわたし、往來をなさしむ。さかりの頃は、文人墨客玆に遊ぶ、毎年四月十七日、神影を拜しむ。

號す。神像は弘法大師の作にして同大師の勸請なりといへり。文和年間三井寺の源慶僧都再興す。慶長の頃迄は今の地より南のかたにありしを、後此地に移せり。當社に英一蝶の畫ける牛若丸と辨慶半身の額あり。今内陣に掲たり。

五元集

牛島三圍の神前にて雨乞するものにかはりて、

ゆふだちや田をみめぐりの神ならば　其角

翌日雨ふる。

社僧云く元祿六年の夏大に旱魃す、しかるに、同年六月廿八日村民あつまりて、神前にむかひ請雨の祈願す。その日其角も當社に參詣せしに、伴ひし中に白雲といへる人ありて、其角に請雨の發句をすべきよしすゝめければ、農民にかはりて一句を連ね、當社の御神にたてまつりしに、感應やありけん、其日大雨たちまちに降りきたれり。其草は當社に傳てあり。

或人の說に、五元集に翌日雨ふるとあり。又其角連中とともに船へ歸らざるうちに、大雨

深山玄琳庭中　尾久の渡手前なり。江戸豪家の隱士のよし。庭中に一株百輪の牡丹あり。高さ五尺餘、めぐり六尺四方、花はそこ紅にて大輪なり。そのほかぼたん多し。

北澤邑　多摩郡下高井戸村の左り南の方なる、北澤村の村長の園中　盛の頃は、遊客きそひてあゆみをはこぶ。

花屋敷　向島菊塢の園中、百品の花あり。

○樗

根津權現の古社　今の社よりは東の方坂上に在り。樗の林太田道灌の植ゑられしと云傳ふ。

露はらふ風ぞ涼しき樗咲くそとものかげの夏の夕暮　　爲親朝臣

○杜若

三囲稻荷の社地　隅田堤の通小梅村の田の中にあり、（故に田中の稻荷とも云ふ。）別當三囲山眞珠院延命寺と

天文十五年仲秋の頃、武蔵野を見んとて、この年月思ひたちぬる事なれば、人々あまたうちつれ中略葛西の庄、浄興寺の長老年八十におよべるが、むかひにいでられ、寺門に立ちより一宿すべきよし申されければ、川を渡り、かの寺に行きて一宿するに、夜に入り風ひやゝかに吹きたり。松風入琴といふことを思ひいでて、

まつ風のふく聲きけばよもすがらしらべことなる音こそかはらね

富岡八幡宮　深川にあり。大榮山永代寺金剛神院、此園中牡丹盛の頃は、日覆障子をかけ渡し奇麗なり。神體菅神の御作、源頼政これを崇む。其後千葉の家にうつり、足利尊氏へつたはり夫より鎌倉基氏、持氏、同上杉家に敬禮し、太田道灌深く信ずとなり。其後寛永元年の頃、長盛法印靈夢の事ありて、永代島に宮所を建立あり。同八年にあたつて功成就す。同二十年八月十五日はじめて祭禮おこなはる。慶安四年のころ法務貫首におほせて宮寺となさる。同年の秋神前にて流鏑馬をはじむ、これ鶴岡法式をうつすなり。毎年三月廿一日より山開と號して庭をひらき諸人に見する。

本堂
白ひげ
富の松

木下川
薬師
仁王門

くときは離別の苦あり、これを聞くことを悪む、これ田家其鳴を候うて農事を起す、田長の名これによる歟。或説に、凡そ諸鳥皆三指只杜鵑のみ四指あり、その樹上に宿する時は二指は前に向ひ、二指後に向ふ。四手の田長は是をもて名づく。あるひは四手をもつて死出となすものは非なりといへり。

山鳥按ずるに、諸鳥みな三指只杜鵑のみ四指とあれども、みな四指にして、前に三指、後に一指あり。郭公は前も二指後も二指なり、かゝるあしの形なる鳥、杜鵑にはかぎらず、その餘にもあるかとおぼえたり。

○牡丹

木下川薬師別當庭中　龜戸の先に有り、青龍山淨興寺薬王院といふ。正字は龜毛川とかくよし、

北條氏康、武藏野紀行に

○郭公

蜥蜴ヶ池　高田禪英山寳泉寺の境内にあり。この池にいもり多し、寛永の頃御放鷹のとき、池の名を尋ねさせ給ふに、名もなきよしを言上せしに、以後はいもりが池とよぶべきよし鈞命ありしとなり。同寺毘沙門堂の小高き山のうへは、新樹空をおほひて涼しく、このあたりの森より時鳥鳴き初むるとなり。

初音の里　小石川白山御殿の舊地のほとり、指谷町へかけていふなり。此邊はつ音早し、こより鳴きそむるといふ。

幸稲荷の邊　芝切通の上なり。増上寺の梢青葉さす頃は、一聲も二聲に聞ゆるといへり。

駿河臺　御茶水の茂み、此處もはやくより鳴き初むるなり。ほとゝぎすを、冥途の鳥といへり、蜀王杜宇の古事にて名づくと、四手の田長又沓手鳥とも異名をいへり。華陽風俗録にいはく、杜鵑大きさ鵲の如し、羽黒し、その聲哀みて血を吻く、土人云く春に至りて其初聲を聞

何事を忍ぶが岡のいはつゝじいはで思ひの色に出ぬらん　　頼圓

護國寺石階の左右　　音羽町のさき、山號にて神齢山、本尊は馬腦石、如意輪觀音唐佛、元祿年中に本堂御建立あり。此地は御藥園なりしを、御建立の時、御藥園は白山にうつさる。本堂西の方の柱に木目猿の面に似たるあり、俗に是を猿はしらと號く。都て大江戸の丁數一丁目二丁目は、御大城の方を一丁目とさだむるに、音羽町は護國寺門前の方を一丁目と定む、故に順を追ひて目白のした、神田上水へ懸りたる橋は、九丁目の橋といふ。當寺本尊開帳のみぎりは、やんごとなき御方の御奉納ありし御道具ををがましむ。唐木唐石をもつて製したる品、和漢の古筆、金銀をちりばめたる御手道具、世に稀なる品あり。

大久保百人町　　四谷大久保武家地の園中すべてあり。就中組屋敷を北のかたへ出づる門より、二三軒てまへ、右のかた、飯島氏の園中に多し、殊に勝れたる映山紅の大樹あり、この花八十八夜の頃盛なり。

ともいふ。磐井の神社は神名帳に明らけし。當社の說いろ〳〵あり、尙他人の說をまつ。鈴ヶ森の磯を、荒藺ヶ崎といふ。いまの木原山なるべし。荒井宿村のうちなり。此山昔は往還にて、相州街道なり。この處宿場なることうたがひなし。むかし木原因幡といへる人久く領せしとなり。

白波の荒藺の崎の磯馴松かはらぬ色の人ぞつれなき　源家長朝臣

○躑躅　きりしま　さつき

染井植木屋　駒込通のさき、殿中松平甲州侯の御別館の脇を、左へ曲り行けば、數軒の植木屋あり。

穴稻荷の社地　上野御山内池の端のかたに門あり、その石階の邊にあり。此神靈驗いちじるし、信仰の輩多し、願あるものは神前にある處の白羽の矢をかりてかへり、願成就の時返し納め、また新なるを納む、このあたらしき矢は、門前の茶店にて鬻ぐ。

藤棚横町　小石川白山御殿跡大通、櫻井氏にあり。昔は一面の藤棚のよし、故に里俗藤棚横町といふ。今は古木より若葉は出れども花なし。

鈴ヶ森八幡宮　品川に在り境内所々に藤あり。一名盤井の神社、當社に鈴石といふあり。大さ二尺ばかりにして、色青赤し、他の石をもつて是をうつに、その音鈴の如し。

吾妻紀行

道行ぶりに見れば鈴の森にちかし、入りてやしろを拜す、此石轉ずれば石の中にその聲颯々たるゆゑ鈴石と號す。また烏石といふあり、いにしへは鷹石といへるよし。ゆゑあつて社地の西南の隅にあり。抑當社に沖の鳥居といひて、五七町沖中にありしと、是鎌倉鶴岡におなじ事なり。此處また境内にして、漁獵禁斷の處なり、此場を除きて網引するに、漁人甚わづらひあるにより、是をなげきて託しけるに、ゆるさしむとなり。石の鳥居の沖にありしは古の事にして柱のみ殘りしが、寶永の地震に折れたりとて、そのもとは水中にのこれりといへり。或說に笠島の神社の鳥居なりといふ。鈴ヶ森と笠島とは一社といふ。又笠島の社は絕たり

佃島　當所は、むかし攝津國、佃の漁獵の者拜領す。今に公に魚を奉る。とりわけ白魚を最上とす。もとはこの島安藤右京進殿御屋敷なりと、いま安藤家より米を給はれば漁人また魚をまゐらすと、彼の家抱の獵師の遺風なりと。藤を植ゑたるは右京進殿墓じるしなりとぞ。住吉を祭りたるは夫より後の事なりといへり。藤今は絕たり。六月晦日には住吉の荒和祓にあはんとて船にて參詣多し。

上野山王權現の社地　古へは多くありしよしなれども、今はたえて纔に一株を存せり。

圓光寺　東叡山のうしろ根岸にあり。庭中棚廿間餘にかけ渡したり。盛の比はそのもとに床机をすゑて、遊客酒くみかはして、いと興ずるなり。

外山　尾州侯の御屋敷の脇、大久保通へ出る道筋、御家人衆の構の內、大木のもみの木あり。此木にかゝれる藤枝々にまとへるありさま、見あぐるばかりにして紫雲の棚引が如し。

芋阪　谷中感應寺裏通　本村のうち、根岸坂本へ出る道に酒店あり。その軒近きにあり。

傳明寺　傳通院前通おたんす町の左のかたへ下る坂なり、是も俗よんで藤寺といふ。

亀戸天満宮

巻之二

○藤 これよりつゞきしまに至るまで春の末に出すべきなれど、丁數の厚薄によつてこの巻のはじめにいだす。

龜戸天滿宮の池邊 表門を入りて正面一の反橋、此池に 此池を心字の池と云ふ 添ひて左右藤棚あり。このしたに各茶店を構ふ。左は裏門のうち連歌堂まで、 連歌堂今なし 右は末社頓宮神の社の極まで眞盛の頃は、池に移りて紫の水を流せるがごとし。この頓宮神といへるは、老人夫婦の像なり。そのうしろに靑赤の鬼形立ちたり、各木像にして彩色をほどこす。くだんの大鬼形老夫を縛りたる躰なり。社前にその趣を記してあり。此爺菅相丞流されたまひし時、つらくあたりし故しばらるるとなり。また此嫗は麴飯の初穗を松の葉に載せて菅公へたてまつりしに、菅公感ぜさせ給ひ、こゝろざしを松の葉に載するとのたまひしより、末世の俗語となりて、今も聊の品を送るに、松の葉などと云ふなり。頓宮神といはるるのよし、他の書に見えず、たゞそのまゝをしるす。

ゆるぎ橋の邊 同七十五六日頃 品川東海寺うしろ、目黒への道すぢ居木橋、俗よんで震橋といふは非なり。

荒木田の原 千住と尾久のあひだの原、おびたゞしきすみれなり。前は川にのぞみて絶景の地なり、春は遊客酒肴をもたらしきたつて興ずること、日の西山に傾くをしらず。

○櫻草

巣鴨 庚申塚左右、此邊植木屋又は農家にても作れるなり、こは生業となすゆゑなり。

尾久の原 王子村と千住とのあひだ、今は尾久の原になし。尾久より一里ほど王子のかたへ行きて、野新田の渡といへるところに、俗よんで野新田の原といふにあり。花の頃はこの原一面の朱に染む如くにして、朝日の水に映ずるかごとし。また此川に登り來る白魚をとるに船にて網を引き、あるひは岸通にてすくひ網をもつて、人々きそひてこれをすなどる。櫻草の赤きに、白魚を添て、紅白の土產なりと遊客いと興じて携かへるなり。

尾久原
桜草

邊一面なり。

しもつふさ八幡 同　市川のむかふ中山のほとり、農家活業となす故各棚に作りて養ふ。

南新川 同　利根川の上、雷不動の脇、農家新平の園中二千坪余のうち一面。

○欵冬 又 山吹

下平井村 同七十日頃　聖天の境内是かしこにあり。咲出でてより盛久。

寶松山金性寺 同　本所押上、開山法印朝尊和尚、觀喜天をまつれり、靈驗いちじるしく人みな信心す。

三囲稲荷境地の回 同　境内の外は都て田なり。枝はみな田の中へ臨みて花咲けり。いと見事なり、今は是も門の左右石の玉垣となりて、山吹滅じたり。

○菫草

櫻おほし。留橋を南へわたりて國分寺の前通り、一里十二町ほどゆけば府中の驛、六所明神の前へ出る。此驛の旅店にとまりて翌日明神を拜し向ふが岡のほとり小山田の關跡、野保天神、所々參詣遊覽して甲州道中通り新宿へ歸りてもよし、委くは予があらはす金橋道標を見て知べし。

詩佛

野蝶山蜂行作媒　彎環路盡到溪隈
小金井畔知花老　一道清流浮雪來

橘千蔭

聞き渡る天の河原か咲く花の雲のなかゆく水のひとすぢ

平春海

春風に香をとめくればみなかみのうき立つ雲は花にやあるらん

○梨花

なまむぎ村　同七十日頃　東海道川崎驛のさき、大森のほとりより大師河原へ行く道六郷川崎の

縣麻呂

金井橋
満花

どに春日の社あり、その傍に酒店あり、中高井戸正庵村このほとり田畑少くして専ら杉を育て伐出す、是四谷丸太と唱ふる材木なり。吉祥寺村左側觀音堂、淡島大明神の祠あり。祭禮三月十四日といへり。別當月秀山井頭院、右側に八幡宮あり、當村鎭守なり。別當安養寺。左井頭辨財天への道あり。七丁ほど入り、西久保關前、是に千川上水堀割の樋の口あり。今は絶て埋れり。此邊總て尾州侯の御鷹場なり。關前新田、保谷新田このところにはまた蕎麥酒などを鬻ぐ店あり。爰より遠眼にさくらすこし見ゆる。新橋、この橋より兩岸に櫻つらなる。梶野橋關野橋より花に添て行く。右に慈眼山眞藏密院あり、門前通に茶店あり。小金井橋までのあはひに橋二ッあり、棚橋あるひは丸木橋にして農夫の通ひ路にかけし橋なり。小金井橋このはしのたもとにかしは屋勘兵衛といふ酒店あり。食事など望むに頓に整ふ。多くは此家に止宿せざれば花全くは見がたし、金井橋より西は眼もおよばず、兩岸花咲きつづきて白雲の中に遊ぶがごとし。貫橋、留橋、車田新田、兩岸果しなく皆櫻なり。爰より水かみ玉川の堰入までは五六里もあるよし、その間兩岸ともに余木交るといへども、

五町が間、野道の左右へ櫻を栽ゑけり。南には海をひかえて絶景の地なり。里人に尋ねしに、こゝは袖しが浦とこたへたり。この老翁が云へるばかりにては信じがたし、猶鑿穿すべし。深川八幡宮、むかし此處にありしを、寛永の頃、今の地に移しまつる。されども是に小社を建てゝ、其名殘を存すといふ。

金井橋　同七十日目　玉川上水の堤、この櫻は、元文年間依二台命一和州吉野山、および常州櫻川の種を栽ゑさせられけるが、いまは何れも大樹となりて、開花のとき、金橋のうへより是を望めば、岸を挾む櫻、繽紛として前後盡くるところをしらず、實に一奇觀たり。東都より行程七里半ほどあり。まづ四谷、内藤新宿より、成子、淀橋、中野、左に鍋屋横町、堀之内道あり、中新田、右高野への道あり。光圓寺村右に阿佐谷神明のみちあり、この村遙に行きてひだりへ分る、是を砂川道といふ、則ち小金井橋へのみち筋なり。直に行く道は青梅街道なり。關口田畑村、白幡、小崎、關口より此村まで人家なし漸此處に酒もちひをひさぐ店あり、向ふに大宮八幡宮の森みゆる。柳久保追分あり。右五日市左府中とあり。大宮前中は

ふを望めば、安房、上總の山々霞のうちにほのみえ、諸國の船も眞帆あげて入津する光景、いはんかたなし。

海賞山來福寺　同七十八日目頃　品川鮫洲大井村御林町なり。延命櫻といふをもつて、櫻中の佳品とす。むかし梶原が植ゑしといひ傳ふ。

二十八品の櫻

○有明　○楊貴妃　○彼岸　○愛染　○普賢　○虎の尾　○ひとより
○大手毬　○小手毬　○人丸　○山櫻　○遲櫻　○牡丹櫻　○大挑灯
○小挑灯　○志賀　○初櫻　○鹽がま　○八重　○夜の雪　○薄雪
○山楊貴妃　○車返　○大しだれ　○小しだれ　○墨染　○吉野　○延命

西光寺　同　同所世に大井の櫻と唱ふるは、此境内本堂の前の古木なり。今は老木となりたり。大井ととなふる井のあるは、西福寺の地中なり。

元八幡宮　同七十日目頃　砂村新田の東の海手なり。當社花表の額に、富賀岡八幡宮とあり。四

長く、匂ひ茴香に似て甚だ高し。柏木の右衛門櫻と名付けたる說には、武田右衛門といふ浪人あり、すぐれて此花を愛す、老木にて幹木の枝枯たり、右衛門歎きてあらたに若枝をつぎ、續木の妙手を得たる人なれば、枝葉榮えて、花もむかしの色香をなせり、右衛門が續木の櫻なれば、いつとなく右衛門櫻といふ。幸なるかな、所を柏木村といへば、源氏の柏木右衛門に因みて、名高き木とはなれり。

金王櫻　同　澁谷八幡宮境內にあり、別當東福寺久壽年中、源義朝、鎌倉龜ケ谷の館に植ゑられし憂忘櫻を、金王丸に賜ふ。領知澁谷にもて來り、鎭守八幡のみづがきのほとりに植ゑるとあり。

三緣山增上寺　同七十日目頃　芝切通より赤羽根への通路、近き頃開けし道筋左右に櫻樹夥しく植ゑたり。

御殿山　同　西品川、寬文の頃、吉野のさくらの苗を植ゑさせ給ふ。今古木となりて、花殊にうるはし。朽ちたる木の傍には、若木を植ゑ添へて、盛の頃は雲か雪かとうたがふ。向

王子權現境內　同　飛鳥山の麓、石神井川を渡りて、王子村にあり。別當禪夷山東光院、金輪寺社頭に櫻多し。毎年七月十三日祭禮あり。午の時過よりはじまりて、申の刻のはじめにをはる。俗是を鎗祭といふ。甲冑の法師四人太刀を七本はき、内二人白刃の薙刀を突きて出づる。それより花笠を冠れる法師集りて、びんざさら種々の學びあり。此祭の段どり、赤得水の書きしを、今も神樂堂の正面にかけり。また信心の輩思ひ〳〵に小さき鎗を拵へ、神前にさゝげ置きて祈念なし、又いたゞきて歸る。參詣の人々交易することあり。火難、賊難を除けるといふ。東都第一古雅の祭禮なり。

岸稻荷社　同　是を王子稻荷と唱ふ。金輪寺持なり。當社は關八州の統領といへり。この社より五六町を隔てて、裝束榎といへるあり。是にて八ヶ國の狐、衣裝を改め、毎年十二月晦日の夜、狐火を點ず。この火に隨ひて近民田畑のよしあしをうらなふ。刻限おなじからざるゆゑに、遠方の人々は、一夜とゞまらざれば見る事難し。

右衞門櫻　同七十五日目頃　四谷の末、柏木村延乘寺藥師堂の前にあり。花形大輪にして、しべ

長耀山感應寺　同　谷中にあり、境内に櫻樹多し。裏門へ行く方もつともよし。又風呂屋の前に淺黄櫻の古木あり、八重にて蒂青し。

慈雲山瑞林寺　同　同所大門のうち、左右の櫻、籬立にして大木なり。盛りのころ、見物もつともおほし。

根津權現境內　同　根津にあり、此御社は、寶永三丙戌年、御建立ありて、當所に移る。元御社は麻布長坂うへ、今世繼稻荷の社の處をいふ。はじめて御祭禮の時は、江戸市中より出でたるよし、其ころ幼兒の口ずさみに、

寶永祭は見事な事よ、誰も見にゆけ、ゆきなかゆく、ちとまた此世のうさばらし云々。

今も童幼の口碑に殘れり。

飛鳥山　同　淺香山とも。王子權現より南の方、芝山なり。八重一重の櫻數千株を植ゑさせられ、花盛の頃は、木の間に假の茶店をしつらひて、群集す。遙に東北をながむれば、足立郡の廣地眼下に見えて、荒川のながれ白布を引くごとく、佳景いふばかりなし。

炊殿橋、今神田橋のうちなり。神職の芝崎と名乗るも、此在名なり。

櫻馬場　昌平坂聖堂西の方横手の馬場なり。むかしは櫻楓の大木ありて名とするよし、今は柳のみなり。常に御旗本方弓馬騎射の稽古あり。

天澤山龍光寺　同七十日目頃　駒込土物店にあり、此境内に御所櫻といふあり。寛永の頃、依二台命一都よりとりよせたまひ、この梵刹に賜ふ。今本堂の前にあり、古木の大樹なり。

諏訪山吉祥寺　同七十五日目頃　駒込に有り、大門より本堂まで壹丁程のあひだ、左右櫻の竝木なり。當寺むかしは今の水道橋の外に有りしを、此地にうつさる。故に水道橋を、いにしへ吉祥寺橋と唱へしとなり。駒込に引移る事は、由緒あれども、寺傳に讓りて是にいはず。

白山神社　小石川指谷にあり。別當中井氏。此社地に旗ざくらといふ有り。永承六年、阿倍一統を征伐として、義家公奥州へ發向の街道なり。其時此櫻に旗を立てたまひ、八幡宮を勸請せんとの祈誓により、この名あり。花に旗のかたちあるといへり。

花溪山道榮寺　同七十日目頃　小日向服部坂のうへにあり。

鼻觀圓通有勝因　香風更送鐘聲轉

神田大明神社頭　同七十二三日頃　本宮のうしろに櫻あまたあり。又東のかた茶店よりのぞめば、淺草、本所、築地のほとりまで、眺望他にこえたり。祭る所の神、大巳貴命、平將門の靈二坐、內外神田の產土神にして、祭禮隔年九月十五日なり。東都の大祭なり。社傳に曰く、人皇四十五代聖武天皇天平二庚午鎭坐、往古は神田とて一國に二ヶ所の御田ありて、大神宮へ初穗の神供を納む。當國は豐島郡芝崎村にあり、大巳貴命は地主の神なれば、其處に多く此神を祀るなり。足立郡に神田村と云ふあり、其類ならんか。將門の靈を祭る事は、人皇六十一代朱雀帝の御宇、平將門むほんを企てしかば、天慶三庚子二月十四日、平貞盛、藤原秀鄕、是を征す。其頃將門の弟御厨三郎平將賴、武藏國多摩郡中野古戰場に、その猛氣とゞまり、人民をわづらはしむること年あり。延文の頃、一遍上人三代眞敎坊、當所遊行のとき、村民此事を歎く。その黨の長なれは、將門の靈を相殿に祭りて、神田大明神二坐とす。かたはらに草庵を立てて、芝崎道場と呼ぶ。これ神田山日輪寺なり。芝崎村はむかし大

知る事ながら、その要を摘んでいはん。抑人皇三十四代推古天皇の御宇、進中臣といふ人、あやまれることありて、こゝに左遷せらる。其臣檜熊、濱成、武成といふ三人の兄弟、主人の跡をしたひ來り、中臣に仕て漁を營む。推古帝三十六年戊子三月十八日、三人の兄弟宮戸川の沖に網をおろすに、あやしきものかゝれり。月かげに見れば觀音の佛體なり。則ち草をむすびて此像を安置す。その翌日近邊の草刈わらは、十人つれて、朝草をかりに出づる草陰より、光明かゞやきたり。驚き見るに、大悲の像あり。この處へ三人の者來りて、しかじかの事をかたる。おの〳〵奇異の思ひをなし、藜を柱としてかりの草堂をむすびて尊む。この處、今の一の權現なり。藜をもつて作れるあとなれば、藜堂といふべきを、今あやまつてあかん堂といふ。此外奇瑞の事は數擧ぐるにいとまあらず。山中ひろきがゆゑに、末社靈物多しといへども、是には說かず。

淺草寺中春不淺　百花如海人相趁

蕉窻

みえて、三谷通ひの若者等は、白馬、白鞘の刀、白革の袴、白くゝりの袖へり、すべて白きを風流とせしなり。小歌惣まくり（寛文二年板）に、所々より吉原への駄賃附あり。そのなかに、浅草見附より大門まで、並駄賃百三拾二文、馬子二人、こむろ節うたふ。白馬駄賃二百四拾文とあり。又その頃の小唄にも、

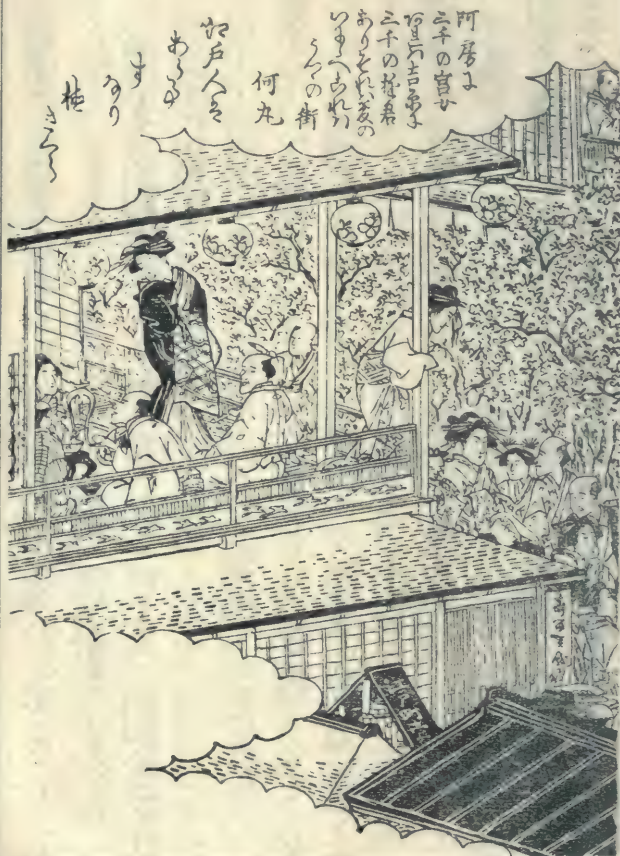
春の日の、いとゆふかけて、柳たをるはたれ〳〵ぞ、白き馬に、めしたるとのご

と唄ひけるよし、これ白鞘組の輩、もつぱら白きをむねとして、山谷通をせしなるべし。委きことは、予が丹前随筆に載せたり。今はなほ往古よりも、花の頃はいふもさらなり。四時晝夜ともに全盛なること、他の及ぶところにあらず。大門の外に制札あり。

一何者不寄馬乗物醫院之外一切可為無用候

附鎗長刀門口江皆可為停止者也

金龍山淺草寺　此境内、千本櫻とて、元文の頃寄附ありて、栽うるとなり。今はひとつ處にあらずといへども、奥山處々に櫻あり。當寺の觀世音の靈驗いちじるきことは、世の人みな

阿房は
三千の宮女
吉原は
三千の遊君
ありそれは秦の
いまへこれは
らくの街
何丸
江戸人を
あらそふ
ます
うつり
梅
きらく

隅田秋月　關屋落雁　潮入夕照　橋場夜雨
待乳山晴嵐　駒形歸帆　洲崎晩鐘　富士暮雪

水神社　木母寺の門前より左の方へ三丁ほど行けば森あり、ちかごろ風流の遊客、櫻を植ゑ添へて、堤と同時に花盛なり。

新吉原　山谷にあり。毎年三月朔日より、大門のうち中の町通り、左右を除けて中通りへ櫻數千本を植うる。常にはこれ往來の地なり。としごとの寒暖によつて、花遲ければ朔日より末に植込むこともあり。葉櫻になりても、人なほ群集す。此地慶長年中までは、麴町、鎌倉河岸、大橋（今の常盤橋なり。）柳町（道三河岸の通。）同十年の頃、柳町御用地になり、元誓願寺前にうつる。其後庄司甚右衞門といふもの、願によつて、元和三年三月、傾城町一ヶ所に仰付けられ、堺町の邊にて二丁四方の地を下さる。此地葭茅の沼なりければ、葭原とよぶべきを、吉の文字に書きかへたりとぞ。當地へ移りたるは、明暦三年なり。此頃は、みな遊里へ馬にてかよひけるなり。いま馬道といへるは、この餘波なり。寛文の頃までも、此姿をうしなはざりしと

あり。境内一の佳木なり梅若丸の墓は本堂のかたはらにあり。むかしの柳は枯れて、株のみのこれり。若木の柳を植ゑ添へたり。その柳のもとに小社あり、山王の社ととなへ、梅若丸をまつるといへり。當寺の什物多き中に、梅若丸の母、妙龜尼の畫像、是等を就中什寶とな す。梅若丸忌日三月十五日とし、ことに參詣群集す。梅若丸の說は、諸書に考へあれば、ここにもらしつ。

來て見れば植ゑし柳のしるしのみ春風渡る隅田河原に　一條關白康道

吹く風ものどけき花の都鳥治れる代のこととやとはまし　少將內侍

わたりする人もあはれやまさるらん隅田河原の春の曙　內大臣基家

羅山子

漾々溶々一葉身　河邊秋景只懷春
自從在五詠歌後　流水飛禽愁殺人

隅田河八景

おほきさなる、水の上にあそびつゝ魚をくふ。京にはみえぬ鳥なれば、みな人えしらず。渡守にとひければ、これなむ都鳥といふをきゝて、

名にしおはばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと　在原業平

道興准后　回國雜記

かくて隅田河のほとりにいたりて、みな〱歌よみて、披講などして、いにしへの塚のすがた、哀さ今のごとくにおぼえて、

古塚のかげ行く水のすみだ河聞きわたりてもぬるゝ袖かな

同行の中に、さどえを携へける人ありて、盃酌の興をもよほし侍りき。猶ゆき〱て、川上にいたり侍りて、都鳥たづね見んとて、人々さそひけるほどに、まかりてよめる。

こととはむ鳥だに見えよすみだ河都戀しと思ふ夕べに

思ふ人なき身なれども隅田河名もむつまじき都鳥かな

梅柳山隅田院木母寺　隅田村にあり、大門を入りて右の方に小池あり、この邊に大樹の櫻

○櫻

隅田川堤　同七十日目頃　隅田村　隅田（スダ）の文字のかきざま、古書にくさぐさあれども、こゝに引かず、

此花は、享保の頃、依二台命一植ゑし處の物にして、今も枝を折る事を禁ずるは、諸人の知る所なり。堤曲行にして、木母寺大門へ向ふ所、左右より、櫻の枝おひかさなりて、雲のうちにいるかと思ふばかりなり。この地は、櫻にかぎらず、四時ともにいとよき地なれば、都より下りたまふやんごとなきおほんかたも、ひとたびは御遊覽あるなり。

伊勢物語

むさしの國と、しもつふさの國との中に、いとおほきなる川あり。それをすみだ川といふ。その河のほとりにむれゐておもひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなと、わびあへるに、渡守、はや舟にのれ、日も暮れなむといふに、乘りて渡らんとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴と脚とあかき、鴫の

きそめて、彌生のすゑまで花あり。この末櫻の部には別にいださず。いま日ぐらしの里と唱への定りしは、修性院の庭中なる碑を見て知るべし。

たれとなく咲きそふ花のかげに來てげに日暮の里ぞ賑ふ　從一位資枝

木下侯庭中 同　麻布廣尾にあり。幹の太さふた抱半、南北へ廿一間壹尺餘、東西へ十九間餘たゞ小山に雪をあびたるがごとし。花の頃は見物をゆるされしが、近き頃止められたり。

慈眼山光林寺 同　麻布新堀ばた、當寺はもと市兵衞町の邊にありしとなり。この境内に大樹あり。しだれたる枝は地につきて瀧の落つるがごとし。此花の色、成子乘圓寺の花によく似たり。この光林寺の前、新堀のむかふを、すべて廣尾の原と唱へ、櫻の咲きいづる頃よりして、貴となく、賤となく、おもひ〳〵のわりご酒肴をもたらし來り、毛氈、花筵をしき、ここにまとゐし、かしこにたむろして、打興ずるありさま、天和の頃の光景を思ひいづるばかりなり。

牛天神 同　小石川別當龍門寺、この山中花多し。門前をながるゝは、神田へかゝる上水なり。

天明の頃は、佐野善左衛門殿の第宅なり。大樹にて、櫻やしきとも唱ふ。

成子乘圓寺 同　四谷新宿のさき、堀内道にあり。是又大樹なり。ちかきころ、大門の左の方なる明地へ、櫻の苗木を植込みたり。

無量山壽經寺傳通院 同　小石川安藤坂の上なり。此境内にあり。また大黑天の社地にも多くあり。

正念寺 同　駒込土物店新道なり。この梵刹は櫻多くある故、里俗是を櫻の觀音といふ。

寶珠山延命院 同　谷中日暮里妙隆寺へ行く道の角なり。

日暮里 同　谷中日暮の里は、江戸鹿子、江戸總鹿子、紫一本等に、谷中新堀と見えたり。且總鹿子の山の部に、新堀山と載せたるは、今俗の道灌山と唱ふるこれなり。また紫一本に、堀の部に、新堀としるして、所のもの今は日暮里といふ。かゝれば天和の頃、音訓かよはして日暮里と書けるにや。好事のものゝ所爲なるべし。後亦日暮里を日ぐらしの里と唱ふるほどに、終に舊の名をばよばずして、日ぐらしとのみとなふるもの多かり。此地彼岸櫻より咲

まり有り。此外につれだちたる女房の上着の小袖、男の羽織を、辨當かゝげたる細引にとほして、櫻の木にゆひつけて、かりの幕にして、毛氈、花むしろしきて、酒飲むなり。鳴物はならず。小歌、淨瑠璃、踊、仕舞もとゞむる事なし。本町通り町をはじめ、有德なるも、さもなきも、町かたにて、女房むすめ、正月の小袖と云ふは仕立てず、花見小袖とて、成るほど手をこめ、結構のだてなる物ずきにしたるを著て出づるなり。花よりなほ見事なり。花の頃は、空くもりて、おほくは晝過より雨ふる。しかれども傘をもさゝず、よき小袖をすきとぬらしてかへるを、遊山にも、また手がらにもする也。云々。

この文は天和中のありさまを今見るがごとし。

當時の婦女の小袖は、結構と雖も、絹紬をかぎりとす。今より見れば、其質素なる事甚し。

○彼岸櫻

花屋鋪　同五十日目　番町 厩谷杉田家のやしきをいひしなり。今 厩谷松平氏のやしきをいふ。

一糸櫻　同六十日目　慈眼堂の前通り、坊中、寒松院、等覺院、護國院

一イヌ櫻　同　彼岸櫻に似て、花形大きく異なり。中堂の西、寒松院の前より、谷中のかたへ行く道より左の方に、大樹一本あり。是當山の花の咲初なり。

一大佛の邊　同六十日目　一四軒寺　同　一車坂　同　一山王社頭　同　一清水觀音　同

清水觀音のうしろに、秋色櫻といへるあり。是は大般若と呼びしむかし、小網町菓子屋のむすめ、お秋といふもの、十三歳のとき、花見に來りて、

井のはたの櫻あぶなし酒の醉　　秋色

此句、宮の御聽に達し、御感ありしとなり。この少女秋色とよびて、後俳諧の點者となれり。寶井其角が點印を附屬す。

紫一本に、

東叡山黑門より仁王門までの竝木の櫻のしたに、花見衆なし。松山のうち、清水のうしろに幕をはしらかして、見る人おほし。幕のおほきときは、三百餘あり。すくなき時も、二百あ

楊貴妃

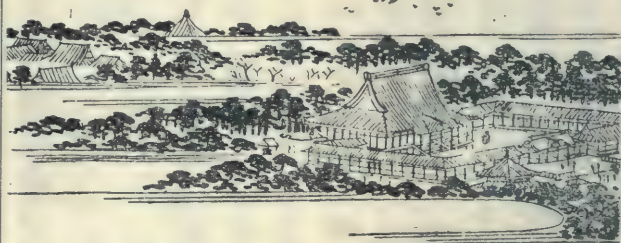
虎ノ尾

浅黄

都

犬桜

上野
東叡山
彼岸
水上
薄桜
山桜
三吉野

○桃

桃園 同六十七八日目　四谷中野村、依二台命一植うる。昔は多くありしが、今は過半枯れて無し。

御藥園 同　九段坂の上、東むき御堀ばた通御かこひのうち、紅白の桃數百樹あり。

大師河原 同　大師より羽根田への通筋、ところ〴〵に桃あり。花の色は紅白ひとつならず。

吉川 同　日光道中越ケ谷のさき、田畑の畔、あるひは民家の構のうちに多し。

流山 同　下總松戸より二里ほどさき、野田の邊なり。此處は活業とするゆゑに、桃林いと多し。

○櫻

東叡山　上野　一山のさくら種々ありて、開花の遲速ありといへども、みなこゝに擧ぐる。當山は東都第一の花の名所にして、彼岸櫻より咲き出でて、一重、八重、追々に咲きつゞき、彌生の末まで花のたゆる事なし。

向島 同　秋葉權現の門前より東のかたへ十四五間もさきなる家に、二百種の異なる花をあつめ植ゑたり。

平井聖天 同　西葛西領下平井村、渡を渡りてむかふの河岸通り、いろ〱の椿多し。

妙龜山總泉寺 同　橋場にあり。この處を古名石濱といふ。昔賴朝卿、常胤、廣常に命じて、隅田川にうき橋をかけしめ、川をわたり、豐島の上、瀧の川板橋に陣をとるとあれば、その頃の橋場ならん歟。この寺の奧庭に椿あり。他にことなる大樹あり。千葉介常胤の石塔あり。弘治二丁巳年十一月八日卒とあり。宇津宮彌三郎の石塔もあり。弘安德治の年號なり。當院に藻屑物語といふ本あり。是は淺草西福寺の邊にありし頃、十六歲なる伊丹左京といふものと、十八歲なる舟川采女といへるものと、討果したることをしるしたる物語なり。

椿山 同　關口の通り、上小橋を渡り、右のかたへ上る坂の上一圓をいふ。今はたえたり。

上野下寺 同　東叡山中、屛風坂の手前、寺院のうしろ、下寺通りより見あぐれば、椿つらなりて、巨勢野もかくやと思ふばかりなり。

宇米茶屋 同 麻布三子坂にあり。一重の白梅なり。正月下旬（寒暖によるべし。）盛なり。ほかよりは遅し。古木なり。遊行他阿一海上人、この梅に題して歌あり。

この花の色は白かね名に高く千歳をこめてみのるとこうめ

麻布龍土組屋鋪 立春より六七十日目 梅樹家ごとの入口にあるもあり、または後園にあるもあり。

蒲田村 同 和名抄荏原郡加萬太 大森の右のかた、郊野に數多し。文政のはじめの頃、梅木堂和中散（川崎のかたへよりたるをいふ）この後園、ならびに往還の兩側へ梅樹五百本を植ゑ、見勢より北のかた、枝折戸をしつらひ、蒲田といへる二大字の額をかけたり。野梅をのこらずこゝにあつめ、一眼に見渡すなり。その外、園中種々の花あり。なほ花の部分のところ〴〵に出す。

杉田村 同廿七八日目 東海道中程谷宿より、金澤道の方へ一里ほど行けば、民家のはた一面なり。實は種小く、專ら江戸にて是を賞翫す。花の頃は東都の遊客旅立ちぬ。

○椿

百花園
園中四時の
萬葉集の草
又
隅田川

公明朝臣
臥龍梅

亀戸
梅屋舗

うつす。菅公左遷の時うめを詠じ給ふ歌、

古知布加波爾保比於與世與宇米乃波奈阿留志那之登底波婁那

和須厌楚

是によつて、梅とんで謫所の庭に生ずといふ。

御嶽社 同 同所にあり。この境内にも梅あり。此神は菅神の師、法性坊阿闍梨の靈神なり。卯の日に參詣あり。とりわけ正月の初卯日は、はつ卯と號けて、人々群集す。

百花園 同 寺島村のうちなり。白髭明神のわき、俗呼んで新梅屋敷といふ。白梅おほし。諸木藥草のたぐひ數多有り。季候の所々にいだす。園中に年中花たゆることなし。

駒込鰻繩手 同 本鄕通追分の手前、組やしき外がこひの内にあり。或說に、こはうなぎ繩手にあるべからず、むかし苗木をそだてしところなれば、苗木繩手なるべきかといふ。また往來曲行してあれば、鰻繩手といふか。

茅野天神境內 同 芝增上寺地中、松林院に安置する處の天滿宮の境內、梅あまたあり。

四月十七日神影を諸人にをがましむ。朝より人々參詣す。

鶯谷　谷中三崎法住寺の向ふ、寺院七ヶ寺ある谷なり。

鶯谷　小石川金剛寺坂の上の谷間なり。この鶯も音色他に勝れてよし。

○梅

梅屋鋪 立春より三十日目　本所龜戸天滿宮より三丁程ひがしのかた、淸香菴喜右衞門が庭中に臥龍梅と唱ふる名木あり、實に龍の臥したるが如く、枝はたれて地中にいりてまた地をはなれ、いづれを幹ともさだめがたし。にほひは蘭麝をあざむき、花は薄紅なり。園中梅樹多しといへども、殊に勝れたり。四月の頃にいたれば、實梅と號けて人々又ながむ。

吹きくれば香をなつかしみ梅の花ちらさぬ程の春風もがな　源　時綱

心あらばとはましものを梅が香は誰が里よりか匂ひきつらん　俊頼朝臣

龜戸天滿宮境內 同　龜戸村にあり。境內梅樹多きなかに、飛梅の稚木あり。筑紫よりこゝに

枝直

根岸の里
東叡山の北の麓にして

江戸名所花暦

巻之一

江戸　岡山鳥編輯

○鶯

根岸の里　東叡山の北の麓なり。元祿のころ、御門主より京都の鶯のよきをえらみて、おほく放させ給ふとなり。關東のうぐひすは訛ありといへども、此處は上方の卵ゆゑにか、なまりなしといひ傳ふ。

舌かろし京うぐひすの御所言葉　女臣　女

東光山良雲院西福寺　淺草新堀ばた、この後園に遊ぶ鶯は、三州より隨身の鶯にして、他よりは聲異なりと云傳ふ。當寺を松平西福寺といふ事は、往古三州松平村にありし時は、松平山といひしゆゑなりと。寺傳を尋ぬるに此事なし。近きころ新堀のかたに別門を開きて、

れば、たゞその地名を載するなり。

一櫻はさくらの頃、楓はもみぢのころ、順路をおしはかりて遊覽するときは、一日數ヶ處の花紅葉を見るに便ならしむ。

一江戸の地をはなるゝといへども、遊客のあゆみをはこべるところは、このうちに擧ぐるなり。

一雪月花を詠ずるの地所、此編にもるゝ事おほかるべし。なほ續編花暦注譚といへるにくはしく出すべし。

凡例

一時候は立春立夏立秋立冬より幾日と定むれども、その年の寒暖によつて遲速あるべし。

一地名二三ヶ所へ出づる事あり。そは山吹の處に木下川あり、又かきつばたの處に木下川あり。櫻の部に御殿山ありて、また紅葉の部にも出づるが如し。是四時開花の季候をもつて部わけせしゆゑなり。その外是にしたがふ。

一櫻馬場のさくら、佃島の藤の類、いまなしといへども、古きがゆゑにこれをいだす。いまあらたに櫻を植込むところありといへども、こゝろえて出さゞるあり。餘は是を推して知るべし。

一寺記社傳によりて、いさゝか其處のおもむきをいへるは、遊客の尋ぬるにたよりやすからしめんがため、または同名の地名あるが故なり。

一月雪の名所、鳥蟲の聞どころは、花暦にあづからざることながら、他所にすぐれしところな

花暦となんいふ。そも〳〵もろこしに、程羽文が花暦、翁榴庵が花暦百詠、張山來が花鳥春秋などあるも、みなかしこの月令によれば、こゝにはやくなきを、たどこの書なん、さかぬ梢に霞をわくるうれへもなく、なかぬ鳥に五月雨をしのぐいたつきもなかめるを、たとはゞかのおもひの津に舟のよりたらんこゝちして、椿園のおい人、やゝ冬ごもる花の垣內にしるす。

おもひの津に舟のよらんことは、いとかたからずや。花をたづぬとては、さかぬ梢のつほめるに、時のまだしきを知り、散りすぎたる枝のにほひなきに、をりのおくれたるを思ひ、紅葉をわけんとては、ちしほの色の下染の薄きをかこち、殘りなき木の下に、きのふの木枯をうらみなどすめるは、物のあはれしらんたよりともいふめれど、よもぎの野邊にかはづの聲すらんやうに、物のはえなき心地こそせめ。さればこゝに野山にあくがるゝ岡の山鳥といふ人あり、鶯の聲ほのかなる春のはじめより、まなびのまどの雪ふかき冬のとぢめまで、花鳥の色にも音にもいだしつべき、そのときどき〳〵を、をろゝのはつをの鏡にうつして、かいしるしたる

凡物益乎此損乎彼。得乎彼失乎此。此乃毀譽榮辱之不能免也。損益得失之不能不爭也。岡山鳥。著江戸花暦一函。四方四時之佳境燎然有目睫。夫不用一錢之費。而悅人之耳目者。雪月花鳥。世有貪之者。而無吝之者。飄々然毀譽得失之外。宜上之人。宜下之人。宜各置一函於座右。乃樂山樂水之興發。而忘榮辱損益之境。乃長生久視之津筏。厥在于此乎。

丙戌初冬　　学齋道人

秋之部（巻之三）

冬之部（巻之四）

江戸名所花暦目錄

春之部（卷之一）

夏之部（卷之二）

江戸名所花暦(一名江戸遊覧花暦、又は江戸花暦)四巻は岡山鳥なる者の編輯する所にして、江戸近郊の名境勝地を擧げ、春夏秋冬の花卉風月四十三條を詳說したるもの、圖また賞翫するに足る。今、天保八年正月發兌する所の原本によりて、之を江戸名所圖會の卷末に附刊し、以て讀者懷古雅遊の一資とす。圖の江戸名所圖會と重複する嫌あるもの若干を削除したる外、本書校訂上の用意は一に前者と異なる事なし——校訂者

江戸名所花暦

全

編輯　松濤軒齋藤長秋　印

校正　男　藤原縣麻呂　印

同　縣麻呂男　月岑幸成　印

畫圖　長谷川法橋雪旦　印

剞劂　東都　佐脇伊三郎

朝倉伊八

宮田六左衛門

元慶三年九月二十五日壬子授二下總國正五位下茂侶神正五位上一云々。

此社地は、海濱に臨みたる砂山にして、松樹繁茂す。西南の方低く、前に南總の驛路を見下し、後は岡續にして、成田の街道東北に繞る。富嶽の白雪、房總の翠巒、筑波の紫霞も、共に此地の眺望に入りて、風光最も秀美なり。例祭は六月一日に行ふ。（隔年正月年始の時、柳營に奉る所の根引の若松は、當社の地より採びとるを舊例とすといへり。）

江戸名所圖會終

茂侶神社
黎明に大江戸の
内洋を望む圖

とせしに天正十九年辛卯、台命に依て、船橋郷の中にて、新に社領を寄せしめ給ひ、慶長十三年戊申、伊奈備前守忠次を奉行として、宮社御造營あり。又此地に假に御殿を建てさせられ、時としてこゝに入御ましく、御崇敬最も厚く、御武運長久の御祈禱を命ぜらる。（始めは神官富氏の家を假の御旅館となし給ひしが、其後御殿を建て給ふにより、神官の家をば同所田中といへる地へ移されたりしが、貞享の頃、件の官營の御殿は神官富氏へ賜はりしにより、再び元の社地へ還り住みける故に、今船橋御殿と唱へ來るといふ。）寶暦十一年辛巳、勅許ありて、古往の例に任せ、毎歳鳳闕に御祓を奉る事とはなりぬ。

當社の祭祀多きが中にも、正月十六日の御神樂、二月卯日の五穀成就の神樂、殊に九月廿日は大祭にして、其式甚だ古雅なり。前の日は角力興行あり。此行事は天正十九年辛卯、東照大神君、當宮へ御參宮の時、上覽ありしとなり。（其余の行事はこれに洩せり。）

茂侶神社　意富日神社の攝社にして、同所より六丁ばかりを隔てゝ、東の岡にあり。祭神は木花開耶姫一座なり。故に淺間山の號あり。當社は、延喜式内の御神にして、葛飾郡二座の中なり。御手洗池あり。今は民家の地に入る。（或人云ふ、茂侶神社は、同郡小金領栗ケ澤村にありて、社司は友野氏、祭神は日本武尊なりと云々。）

三代實錄曰

神宮を合祭し奉りて二座とし、又左右に八幡、春日の兩神を勸請ありて三社とす。其新穀を奉りし地を、今も米ケ先村と名づくると云ふ。淸和天皇の貞觀十三年辛卯三月三日、勅願によりて、奉幣使下向ありて、關東一之宮の號を賜り、同十六年甲午四月十四日、再び勅使下向ありて、天下泰平、五穀成就の祈念を命ぜしむ。天喜三年乙未、源賴義朝臣、同義家朝臣、東征の時、寄願により、當宮を修造ありて、同年六月六日に遷宮なし奉り、種々の神寶を納めらる。又仁平元年辛未六月十一日、勅ありて、船橋六郷の地を御寄附の院宣を賜ひ、義朝に命ぜられ、當宮御再興ありて、神寶等を納めらる。六郷とは、所謂高根村、米ケ崎村、七熊村、下飯山滿村、金曾木村、夏見村等なり。御造營の下司は、千葉介常胤、美濃前司淸高、大澤平內兼家等なり。荒木田滿國奉幣使たり。基義、神主の時、賴朝卿より幕下に加るべき旨仰あれども、應ぜざりしかば、悉く神領を打とられ、剩へ基義腹切て失ぬ。此事は前の洗川の條下に詳なり。其後基義の舍弟權守基繼、仙洞へ其由を歎き奏上しければ、承久元年己卯四月十六日、實朝公へ詔を下し給ふ。故に千葉滿胤より、昔の如く六郷の神領悉く寄附あり。然るに天文以後、東國爭戰屢發りし頃、當宮の神領も大方打とられ、衰廢せん

意富日神社
九月廿日祭祀之圖

ちん。延喜式にも、初穂の事あり。文字荷前に作り、波津本と訓ず。江次第曰、荷前者四方國進御調荷前取奉故曰荷前。又三代實錄にも、新錢を神に奉り給ふ事をいふ條下に、所鑄作之早穗二十文云々。又倭姫世記に、先穗を波耶裒(ハヤホ)と訓ず。共に初穂と云ふに同じ。然る時は、初負有と云ふは初穂稻の訛にして、往古黎民新穀成就の賀宴を設け、其場に唄ひ舞ひたる習俗にして、則ち新嘗の遺風なるべし。

齋殿　同所大宮司の構に傍ひてあり。當宮のものいみ殿なり。　御饌殿　同所にならぶ。御供調進の齋場なり。

社記に曰く、景行天皇四十年、皇子日本武尊、東夷征伐の勅を奉り、發向し給ふ頃、此地に於て、伊勢大神宮へ、凶徒調伏の御祈誓ありければ、其時海上に光を現じ、一ツの船の中に神幣を採添へたる弱木に、一面の神鏡の懸れるあり。尊是を得給ひ、則ち大神宮の御正體として、夏見鄕に宮殿を建てて崇めまつり給ふ。其神鏡今なほ當宮の御正體と崇め奉りて現然たりと云ふ。又其時尊の命にしたがひ、海上の光りについて、神鏡を求出でたる者を嵩と呼び給ふとぞ。其子孫今も九日市場村に存せり。同時凶徒調伏の御矢を刺て奉りし者を矢刺とよび給ふ。其後齋海神村にありて、今は矢はぎとなづけて、共に當宮の神人とす。此御神、一時邑君に神がかりましまして、我は是伊勢國五鈴の川上より天降る神なり。今よりは、其神垣と等しく崇べしと云々。依て尊其由を帝に奏し給ひしかば、伊勢大神宮を朝日宮とあがめ、夫に對して當宮を夕日宮と稱し給ひ、天皇第四の皇子五百城入彦尊をして、船橋に下向なさしめられ、東國八千八村の縣主を兼ね、當宮の神官たらしむ。當宮神官富氏の始祖也。其年新嘗の祭を行はれ、後豐受皇大

千葉介滿胤神領寄附狀　承久元年己卯四月十六日、船橋六鄕の地を寄附する由記せり。其文に曰く、東限二[illegible]宮塚一南限レ海西限二洗川竝谷懸一北限二石拔路一とあり。其餘應長、應永、永享、永祿、文龜、元龜、等の古文書多し、姑く是を省きて記さず。

家集

建保六年十一月、素暹法師（于時風行）下總國にはべりし頃、のほるべきよしまうしつかはすとて、

戀しとも思はでいにし久方のあまてる神も空にしるらん　鎌倉右大臣

按ずるに、社記に、實朝公寄願の事あるを以て、此和歌を奉納なし給ひ、其時千葉何某將軍に代り奉りて、一七日の間當宮に參籠すとあれども、家集による時は、是を奉納の和歌とするは誤ならん。千葉何某とあるも、又吾妻鏡の註にして風行なる事しられたり。

常盤御宮　本殿の右、神輿山の麓にたゝせ給ふ。四方に瑞籬を繞らせり。東照大權現宮の御神影、及び大將軍秀忠公御木像、日本武尊の神像等を合せて安座なし奉る。元和年間、當宮の大宮司富中務大輔某重の息男伊勢守某治、天海大僧正と共に勸請なし奉るといへり。來由は其舊あるをもてこゝに載せず。毎歲四月十七日御祭禮にて、郡部ともに來りて拜す。同夜近里の童女集り、廣前において唄謠ひ踊り廻る事あり。尤も古雅なる習俗なり。是を初負脊（ハツホセ）となづくるといへり。天正九年辛卯、當社御參宮の時みそなはし給ふとなり。

按ずるに、初負脊は初穗稻なるべき歟。萬葉集葛飾早稻を贄すともとありて、早稻を和世と訓ず。此例によりて、稻を世と訓じたるならん。又にへすともとあるは、秋に至り、みのる所の新稻を神に新嘗奉り、其後公はさらにて、民の戶に至る迄、是を祝ふ事をいへるなり。今世俗、人より前に取分け置きて神佛に捧げまゐらせ或は至尊の人などに供するを、初穗取といふも、此新嘗よりおこる習俗なり。

其二

船橋
意富日神社

延喜式神名帳曰

下總國葛飾郡二座。茂侶神社。意富比神社。云々。

三代實錄曰

貞觀五年五月二十六日戊子。授下總國。從五位下意富比神。正五位下。

同書曰

同十三年四月三日己卯。授同神正五位上。

又同書曰

同十六年三月十四日癸酉授同神從四位下。

神寶　叢雲御劍　長一尺五寸あまりあり。來由ありといへども、疑き故あるによりて、こゝにもらしつ。

神息劍　長一尺ばかりあり。日蓮大士奉納ありしといふ。　木劍　是も同じ大士の納めらるゝ所とぞ。長一尺ばかり有り。柄は朽ちて其形全からず。

近衛帝宣旨　仁平元年辛未六月十一日、船橋六鄕の地を寄附し給ふ宣旨なり。

世佛光禪師開基の精舍なり。本尊釋迦如來は、行基大士の作、脇士は文殊、普賢等なり。昔は盛大の寺院なりしに、永祿年間、里見義弘が兵火に罹りて、灰燼となる。又此時、當寺の鯨鐘をも、國府臺の陣へ奪はれしが、謬つて利根川へ沈めたりとて、今其處を字して、鐘ヶ淵と呼べり。（國府臺の條下に詳なり。寶暦中、德嚴といへる禪僧、再び鐘を造るといふ。）

意富日神社（意富日、古は日を比に作る。天正以來台命によりて比を日に改めらるゝといへり。）船橋驛上總海道と成田海道との岐道、五日市場村に宮居す。世に船橋大神宮と稱す。延喜式内の御神にして、關東一之宮と崇む。神官大宮司富氏奉祀せり。

當社大宮司富氏の始祖は、景行天皇第四の皇子、五百城入彥尊なり。天皇尊をして船橋に下向なさしめ給ひ、東國八千八村の縣主を兼ね當宮の神官を司らしめ給ふ。然るに仁平の頃、荒木田滿國の舍弟、基國を養子とす。其後基繼の時、又嗣なきに依て、千葉滿胤の子基胤を養子とす。此時日月を以て家の紋とせしが、天正十九年辛卯、大神君當社御參詣の頃、神官富氏御紋の軍配團扇に根引の若松を添て獻つりしが、其後上意によりて、若松に軍配團扇を家の紋とす。隔年正月年始には、舊例に任せ、御祓大麻に根引の若松を添へて献上し奉り、登城するを永規とす。

本殿祭神　天照皇大神宮　豐受皇大神宮　二座

相殿　左　八幡大神宮　右　春日大明神

百味の飲食を供養せり。其詰衆の道俗は、各〻晝夜の間、六度づつ垢離して、淨衣を著し、白布を以て造る所の寶冠を頂き、三寶諸尊の御號を稱へて敬禮し、六根懺悔の文を唱ふ。又其間には、彌陀の稱號を唱へ、鉦太鼓を打鳴して、梵天の四方を右繞する事數回、晝夜に間断なし。相傳ふ、往古弘法大師、出羽國湯殿山を始て踏分け給ひし頃、同國山形の東南、天道村といふ地に於て、これを開闢し給ふを興基として、こは五穀成就の爲の行事なりと云ひならはせり。

遠ケ澪　船橋の沖にあり。俗釜ヶ淵と號く。土人の諺に云ふ、昔平將門の愛妾桔梗前、將門亡びて後は、流石に都へ歸らんも物うくて、船橋の里に暫しやすらひ、終に此海底に身を沈めたりしとなり。此海の漁幸ある時は、其漁る所の諸魚を御膳料として江戸へ奉る。昔大樹この地に至らせられし頃よりの例にして、今に廢せずといふ。又船橋大神宮へも捧げまゐらすとなり。故に此邊の海濱を御菜ヶ浦ゴサイガウラ一と名づくといふ。又船橋宮社說に、此海にて産する所のうろくずの中に、御紋鯛と稱するもの、稀に魚網にかゝる事あり。鯛の頭に御紋の形ありと云ふ。船橋宮神殿の御紋海波に映じ、自然にかゝる魚を産するにや。實に御神德四海に溢れ、海神も感應ありてやかくのごとくならんと云々。

大峯山慈雲寺　同所二丁あまり北の方、新田にあり。五山派の禪窟にして、鎌倉建長寺第一

船橋驛
天道念佛踊之圖

がら我うつくしと思ふ人の來んには、外の方に立せずして、内へ入れさせんとまでに思ふてふ心を、たとへていへるなり。

船橋　驛舍なり。海神村、及び九日市場村、五日市場村等の三邑の總名にして、古への神領の地なり。舊名を湊郷と云ふとぞ。相傳ふ、往古日本武尊東征の時、此地に至り給ひ、海上にして一面の神鏡を得給へり。其地を海神村と呼べり。依て其地に神鏡を遷し奉らる。然るに其頃は、水無月にて、旱打續き、官軍大に勞る。尊其御禱ありしかば、驗ありて、二三日の間大雨降り續き、官軍勢ひを得て、竟に凶徒を亡したり。其後湊郷の邊洪水にて、神鏡の宮所へ行き通ふべき便なかりしかば、船を浮めて橋となし給ふより、此地名發るといふ。東鑑に曰く、文治二年丙午三月十二日庚寅、左典厩の賢息首服を加へ給ふべきにより、關東御知行の國々の内、乃貢未濟の庄々家司等の注文を召し下して催促を加へ給ふべき由とある條下に、下總國船橋御厨院御領と云々。

天道念佛　船橋宮の内の東光寺、及び漁師町の不動院、夏見の藥王寺等の境内に於て執行せり。毎歳二月十六日に始り、同十八日に終る。昔は一七日の間執行せしが、今二夜三日とす。堂前に土を以て壇を築き、竹を以て柱を設け、これを梵天と稱し、其四方に四の門を開き、四十八柄の神幣を建て、注連を引きはゆる等、皆悉く諸の佛天に表したり。内に大日如來の像を安じて本尊とし、

より此所迄八丁許あり。御代川氏、昔は澪川に作る。澪は水の深き所をいへる訓義にて、日本武尊を導きまゐらせ、此所の海の澪をしらせ奉り、神鏡を得せしめまゐらせたりしものゝ後裔なり、其子孫今なほ連綿たり。

夏見厨　海神村の北の方にあり。今東夏見、西夏見と唱へて、二に分る。古へ伊勢御神の神領にして、意富日社の神主是を務めたりしとなり。

神鳳鈔曰

伊勢大神宮造替遷宮事曰食米處々注文

二所大神宮御領。諸國神戸御厨御薗神田名田等合。

下總國

夏見御厨　上分布三十段。口入三十段。一名船橋二百丁。

神鳳抄に、其餘下總國にて、相馬、遠山形、葛西、猿俣、萱田、神保等、共に合せて（原書一字闕損不明）箇所とす。意富日神社傳にいふ、萬葉集に

爾保杼里能可豆思加和世乎爾倍須登毛曾能可奈之伎乎刀爾多氏米也母

かくよめるは、古へ葛飾の早稲をもて神に新嘗奉りし事をいへるなりと。此和歌のこゝろは、此かつしかの早稲をもて神に新嘗奉りし後公はもとよりにて、民戸にてもはじめて刈りたる稲にて贄をして祭らせしなり。此日は門をさして、凡の人の入り来るを忌みはべる事な

意富日神社舊地

帳丁若麻績部諸人

爾波奈加能阿須波乃可美爾古志波佐之阿例波伊波波牟加倍理久麻弖爾

新千載

頼むぞよあすはの宮にさす柴のしばしが程もみねば戀しき　定為

名寄

今さらにいもかへさめやいちじるきあすはの宮に小柴さすとも　俊頼

わかるれどあすはの神はかへらなん手向をつとに小柴さしつつ　詠人しらず

石芋（いしいも） 當社の入口にあり。里諺に云く、往古弘法大師東國化度の時、日ぐれに及びて此所を通らせられ、とある家に入り給ひて一宿を乞ひ給ふに、其家に一人の老嫗ありて、是を許しまゐらせず。大師邪見の箕を救へ導き給はん方便にとて、その家の傍の芋を加持して石となし給ふとぞ。此故に其芋四時ともに腐れずして、年々に葉を生ずとなり。

意富日神社（おほひのじんじや）初鎮座地（はじめちんざのち） 船橋驛舎（ふなはしえきしや）の入口、海神村御代川氏（わたつみむらみよがはうぢ）某（それがし）が地にあり。日本武尊（やまとだけのみこと）、此海上にして八咫鏡（やたのかゞみ）を得給ひ、伊勢大神宮の御正體（みしやうたい）として、鎮座（ちんざ）ありし舊跡（きうせき）なりといふ。今意富日神社の地

あらずとて、度々の催促ありしかども、是に應ぜず。故に頼朝卿憤り甚しく、船橋六郷の地を、葛西三郎清重に賜ふ。清重此地に入らんとすれども、神人、及び六郷の農民等、三神の神輿を前に舁居ゑ、西栗原に支へて防ぎ戰ひ、其亂さらに止らざりければ、終に神官治部大輔基義、神輿の前にて、腹掻切りて空しくなりぬ。其時の戰に、神輿穢れたるを以て此川にて洗ひ清めけるよりして、血洗川とは呼びならはしけるとなり。或人云ふ、海神ニツヤミ二村の入口、往昔より少し東の方の山より發して、船橋街道を横ぎり、海にそゝぐ清水の小流は、頭を洗ひ淵と號す。是小河を太刀洗川と稱す。或一云ふ、源頼義の太刀洗水なりと。按ずるに、此川の事を云ふならん歟。又頼義此地に至る事をきかず。頼朝治承四年庚子十月、相州石橋の戰に敗れし後、當房上總を經て下總の國府に出で給ふ事あり。疑ふらくは、頼義と頼朝の誤ならん。

阿須波明神祠　西海神村にあり。禪宗大覺院奉祀す。婆竭羅龍王を祀ると云ふ。故に此地を海神とは稱せりといふ。耕田と道路とを隔てゝ、海汀に向ひて華表を建る。九月四日を祭祀の辰とす。此日芋を食すを舊例とす。故に土人芋祭と呼びならはせり。當社に小柴さすと云ふ事あり。旅だちせんとする人、首途に此阿須波の御神に小柴を奉りて、長途の安全を祈りまゐらすると云ふ、寄林叟村に、下總國阿須波宮とまうす社は、神の宮にて、小柴を立てゝ祈る事あるを云ふと云々。

萬葉集

同

勝間田の池の氷もとけしよりやすの浦とぞ鳰鳥もなく　好忠

同

霜がれの芦ばかりこそかつまたの池のしるしに立ち残りけれ　大貳

家集

勝間田の池に浮寢の床絶えてよそにぞすぐる鴨の群鳥　慈鎭

同

水なしと聞きてふりにし勝間田の池あらたむる五月雨の頃　西行

新撰六帖

かつまたのいけには何ぞつれなしの草のさてしもおひにける身よ　知家

洗川　栗原と船橋との間、街道を横ぎりて流るゝ小川を號く。血洗川とも稱せり。千葉滿胤、意富日（オホヒ）神社へ神領寄附の狀には、洗川とばかりあり。傳へ云ふ、右大將頼朝卿、征夷大將軍の宣旨を蒙られしのちは、其威勢實に草木も靡くばかりなり。されど意富日神社の神官のみ、累代天子勅宣にして、武門幕下に

かつまたの池の心はむなしくて氷も水も名のみなりけり　寂然

歌枕

年を經て何賴みけん勝間田の池に生ふてふつれなしの花　詠人しらず

夫木

かつまたの池も緣にみゆるかな岸の柳の色に任せて　顯仲

同

尋ね來てかつみるまゝに勝間田の花の陰こそ立ちうかりけれ　爲相

家集

かつまたの池にはいかに杜若水なしとてやにほはざるらん　慈鎭

同

下はよも氷もあらじ降りつもる雪のみ深きかつまたの池　家隆

夫木

こと

新田部親王

勝間田池
栗原本郷邑の地にあり或は
二本郷の溜池と
號く
万葉集

右或有人聞之曰。新田部親王。出遊于堵裡。御見勝間田之池。感緒御心之中。還自彼池。不忍憐愛。於時語婦人曰。今日遊行見勝間田池。水影濤々。蓮花灼々。可憐斷腸。不可得言爾。乃婦人作此戲歌。專輒吟詠也。

勝地吐懷編に、右和歌の註に、今日遊行勝間田池をみるとあれば、餘國に出てぬ事しるべし。又堵裡に出遊して勝間田の池を見給ふともあるは、萬葉集堵は都の字に通ひたり。然れば平城京にて、添下郡なるべしとあり。八雲御抄、範兼卿五代集、類字名所和歌集等、下總國とす。清輔抄美作とす。歌枕名寄もまた美作とす。考ふるに、良玉集に、初瀬へ參りけるに勝間田の池をみて、

朽ちにたるくはなかりせば勝間田の昔の池とたれかみてまし　道濟

とあるは奈良に其便ありと。云々。

千載

池もふり堤くづれて水もなしむべ勝間田に鳥も居ざらん　二條天皇大后宮肥後

後拾遺

鳥も居て幾世經ぬらん勝間田の池にはいひの跡だにもなし　範永

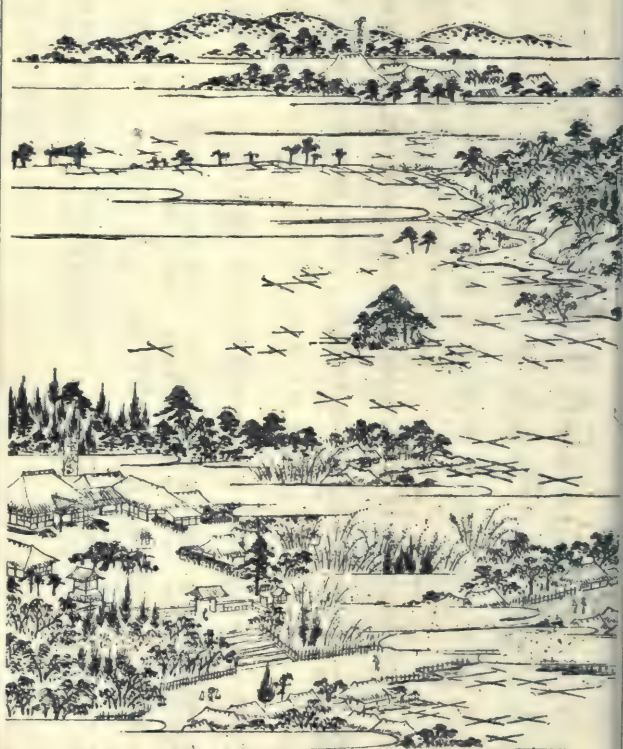
新拾遺

を乞ひたりし龍女を祀る所なり。

葛飾明神社　中山より東の方、栗原本郷の街道より、左へ四丁ばかり入りて、叢林の中にあり。葛飾の惣社と稱すれども、祭神詳ならず。同所眞言宗萬善寺別當たり。祭禮は九月十五日なり。社より東の方の林間、稻荷の小祠の傍に、葛の井と稱する井あり。當社の御手洗といふ。土人相傳へて、此井の水脈、龍宮界に通ずと云ふ。瘧疾を患ふる者、此井の水を飲みて驗ありといへり。

勝間田の池　同所船橋街道の道傍にあり。此所も栗原本郷村の内なる故に、土民本郷の溜池と唱ふ。池より東は寺内村と云ふ。池より西、小高き所に、熊野三所權現の宮居あり。萬善寺より兼帶奉祀す。祭禮は九月十五日なり。

萬葉集　　新田部親王

勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之

葛飾明神社
葛の井
萬善寺
栗原寶成寺
當寺の庭前に
椿の大樹あり

いふ。（中山什物の内、正和三年甲寅四月二十一日、日高師より千葉介貞胤へ遣られたりし手簡の文に云く、所々堂宮田地等之事（中畧）若宮御堂、中山坊、若宮別當職、ならびに彼岸田谷中（下畧）云々。又同什物に、正安三年日高師筆を染められたりし若宮持佛堂の本尊と稱する首題の懸幅あり。然れば其頃は別當職を別に附し置きて、崇敬尤も厚かりしとしられはべり。）

妙正池　中山より北の方、二十町ばかりを隔て、千束村といふにあり。（千束邑にある故に、千束の池とも號く。）傳へ云ふ、文應元年庚申、（年三十九）日蓮大士、富木常忍か設くる所の法華堂に入り給ひ、一百日の間妙法輪を轉じ、群生を敎へ導き給ひし頃、此所の池靈、婦女と化し、日々彼地に至りて大士の說法を聽受し、信心衆に越えたり。一時彼婦女來り、大士に向て云く、妾今尊者の法施を蒙り、一乘の眞因を得はべり、願くは大士手書の本尊、及び自の法號を賜はらん事を乞ふ。大士乃ち曼荼羅を筆し、又妙正といふ法號を授け給ふ。婦女喜んで去る。人怪んで跡に隨ひ至るに、此池邊にして其婦女の姿を見失ふ。然るに其本尊忽然として傍の櫻樹の枝にかゝりてあり。衆人奇とす。こゝに於て此池の靈なる事を知りて、妙正と號け、後一社に奉ずるといへり。（其婦女往返の道を曼荼羅小路と字し、或は蛇小路とも稱すといふ。）

妙正大明神祠　同所にあり。或は姥神とも稱せり。（疱瘡を患ふる者、祈念して驗ありと云ふ。）日蓮大士に見えて本尊

字を營み、大士をしてこゝに居らしむ。此時一百日の間、大に說法あり。又大士、自親一尊四菩薩の像を彫刻ありて、かしこに安置し、法華堂と號けらる。中山記に云く、當廟に一尊四大士の木像二刹十躯あり。其一は佛形、其一は菩薩形なり。皆大士の手刻と云々。此法華堂といふは、大士最初轉法輪の道場たり。今奥の院と稱す。時に曾谷教信、教信姓は平氏、次郎左衞門と稱す、法名は法蓮、日礎と唱ふ。當國曾谷に住す。後宅地をあらためて梵刹とし、曾谷山法蓮寺と號く。秋本太郎兵衞、藤氏より出づ。當國白井の人なり。子孫に至り、其地に一字を創建して、白井山秋本寺と號く。及び太田乘明等、來つて檀越となる。乘明は五郎左衞門尉と稱す。當國中山民部少輔康連の子なり、曾て富木氏の論導をもつて大士の宗化に歸し、一子を投じて出家せしむ。日高上人是也。後中老僧日高尊師、父乘明卒するの後、日蓮大士の命に應じ、日常上人の敎を受け、其家を改めて精舍とし、正中山本妙寺と號す。今の正中山の地是なり。亦先の法華堂を合せて一寺とし、正中山本妙法華經寺と號す。則ち日常上人を開山と稱し、日高師を第二世とす。然るに佛心院日珖師、當山十二世台命によりて寺法を更めしより已降、京攝より輪番して當山の貫主となれり。毎年三月十三日より、同十九日に至るの間、法華經千部讀誦、七月十五日、相撲興行す。十月十三日は日蓮大士の忌辰なるにより、大法會を設く。近國の道俗群參して大に賑へり。

若宮八幡宮　奥の院の地より一丁ばかり東の方、叢林の中にあり。富木氏の鎭守の神なりと

東土産

まゝの繼橋のわたり、中山の法華堂本妙寺に一宿して、あくる日一折などありしかど、發句ばかりを所望にまかせて、

杉の葉やあらしの後の夜半の月　　宗長

其夜あらしのはげしかりしばかりなり。今日はことに日も長閑にて、かつしかの浦春のごとし。云々。

寺寶立正安國論（諸山に藏むる所すべて四部なり。洛の本國寺、甲の身延山、ならびに富山と、眞間の弘法寺とに藏して、ともに宗祖大士の親筆なり。）同來由（文永五年戊辰、法鑒（日頂の事なり）にあたへられしと云傳ふ。或は日照等にあたふと。）稟權出界書（文永三年九月富木常忍、台徒了性と法義を論ず。了性竟に屈伏す。富木氏書を奉じて是を告ぐ。同十月朔日の返書にして、二十二通あり。）高祖日蓮大士眞骨（寶塔に收む。日忍師の添狀あり。其餘宗祖大士をはじめ、諸尊師の曼荼羅、及び其頃の武將ならびに千葉家の消息寄附狀の類、靈佛靈神の像等、尤多し。悉く記すに遑あらず。）

寺記に曰く、建長六年甲寅、日蓮大士總州に遊び、後鎌倉に歸らんとし給ふの日、中山の住人富木播磨守常忍も、又かしこに至らんとす。（富木は因幡國巨濃郡の地名なり。常忍初彼地にあり、故に富木と稱す。和名抄富城（トキ）に作り、今こゝに富木、或は土木とす。）其間船中にして大士に見え、聞法隨喜し、檀越となる。文永元年庚申、竟に宅地を轉じて一

眞書は寶庫に收む。世に錢四貫をもて造ると云ひ傳ふるもの是なり。

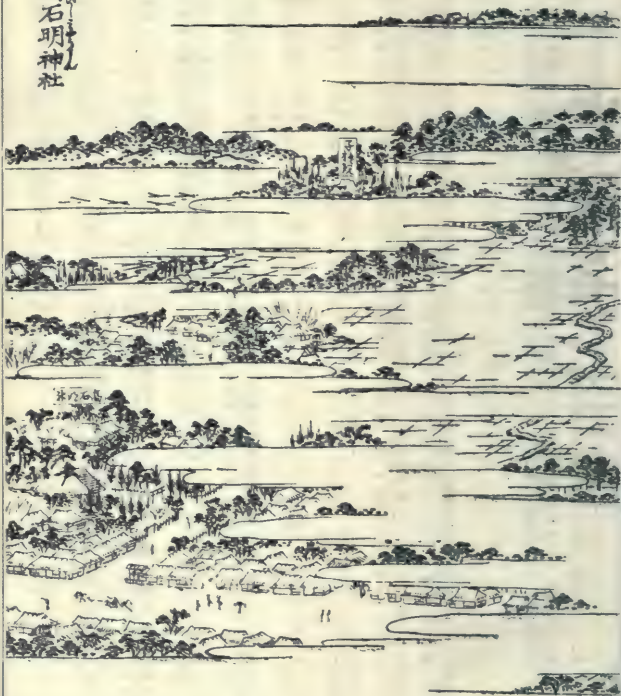
鬼子母神堂　同じ左に並ぶ。此鬼子母神堂は、鎌倉の某の宅なりしを移せりといふ。本尊鬼子母神の像は宗祖大士の作にして、往古大士常忍建立の法華堂に在せし頃、一尊四菩薩の像と共に彫刻ありしとなり。毎月十七日の夜近在より道俗參籠す。

經藏　祖師堂の前左の方にあり。　**龍淵橋**　堂前の流に架せり。　**常唱堂**　寮舍にならぶ。常に唱題怠る事なし。　**泣銀杏樹**　常唱堂の後に存す。眞間弘法寺の開山日頂上人の子なり、久しく父の勘氣を受けて恩顏を拜する事能はず、故に此樹の下に幾回も來りつゝ、哭きては歸られたりし故に、此號ありといひ傳へたり。　**五層塔**　同じ左にあり。釋迦多寶、ならびに當寺十八世日慈の像を安ず。當寺祖師堂創建の師なり。　**三十番神社**　同じ後の方小高き所にあり。當山の護法神にして、毎歲十一月八日火焚祭を修行す。　**寶庫**　方丈書院の奧の方にあり。宗祖大士の影像、其外佛經の類を藏む。　**支院三十六宇**　今破壞せしものありて、僅に十六宇存せり。　**仁王門の額**　正中山　日等上人筆　或はいふ、光悅の筆なりと。

中興開山日祐上人墓　總門より內、左のかた、小路を入りて二丁ばかり西の方、山の中にあり。當山第二世日高上人の墓もまた此所にあり。　**奧の院**　方丈の構の外、右の方の小路を入りて三丁ばかり東北の方にあり。文應元年、宗祖大士此境にあそばるゝ頃、富木常忍宅地に一宇をいとなみ、法華堂となづけ、大士をしてこゝに居らしむ。因て百日の間說法あり、即ち宗門最初轉法輪の道場、妙蓮山法華經寺の舊跡なり。日蓮上人傳に、屋形の後にまはり百間ばかりの堤を築き、其中にすこし高く土をかされ、室をしつらひ、聖人の御まうけにぞ立られけるとあるも、これをいへり。往古大士手刻の一尊四菩薩の靈像も、此地に安置ありしとなり。當寺第十二世の住侶日珖上人、此地を封じて法華一萬部の經塚を築き、古より寶藏に安置せし日法上人の作の宗祖大士の影像をうつしたてまつるといへり。

開山日常上人石塔　同所道を隔てて左の方にあり。石塔の上に草堂をいとなみ、傍に庵室を設けて僧を置き、是を守らしむ。日常上人を常忍修院と號す。因幡國富城の產にして、承久二年庚辰を以て生る。(本化傳に、富木五郎入道とあり)長じて播磨守常忍(ツネノブ)と名づく。後下總國中山邑に移住し、鎌倉に仕ふ。土民稱して富木殿といふ。日蓮大士の法化をたふとみ、大士の滅後、竟に薙染して日常と改む。正安元年三月二十日八十歲にして化すといへり。

高石明神社

其二

妙法華經寺

正中山本妙法華經寺

船橋街道の左側にあり。（此地を中山村といふ。）日蓮大士、最初轉法輪の道場にして、一本寺なり。開山は日常上人。中興は日祐尊師たり。

鎌倉大草紙に云ふ、千葉介貞胤、父の宗胤三井寺にて討死せし後、北國落迄は、官方にて新田義貞の御供たりしかども、こゝろならず尊氏の味方になりぬ。弟胤貞は官方にて千葉にありけるが、此人の子日祐上人は、法華の學匠にて、下總國中山の法華經寺の中興開山なり。是によりて、胤貞より中山の七堂建立ありて、五重の塔婆をも建てらる。其後胤貞上洛して吉野へ參り、西征將軍の宮の御下向の時、御供して九州へ下り、大隅守に補任し、肥前國をも知行しけり。日祐上人も九州に下向し、肥前國松王山を建立して、總州の中山を引き末代迄此所を中山と兩山一寺と號すとあり。

祖師堂　日蓮上人の像を安ず。（日法師の作なりと云ふ。）額（祖師堂）太虛庵光悅筆。祈禱堂（同所後の方にあり。）額（祈禱堂）筆者不知。法華堂（同左にならぶ、大士手刻の一尊四菩薩の像を安置す。此所は太田乘明の宅地なり。乘明日常上人の敎を受け、自らの宅地を轉じて佛宇とし、正中山本妙寺と號す。則ち此堂は其頃營建する所の儘にして、世俗云ふ、飛驒匠が作る所なりと。當時宗祖大士最初轉法法華說法の道場なり。）額（光明法花經寺）光悅筆（堂內外陣の家帶〔ナゲシ〕に掲ぐ。此堂の軒に宗祖大士より常忍へ贈らるゝ所の消息の寫しを、板に書て掲ぐ。其文に云く、）

錢四貫をもちて一圓浮提第一の法華堂造たりと靈山淨土に御まゐり候はん時は申あげさせ候へかし恐々

十月廿二日　日蓮判

進上　富城入道殿

御返事

神南方中島内坪付〔ツボツケ〕の事とあり。依て考ふれば、高石神村の名古き事しられたり。

安房須明神社

同所中山の北、池田といふより北の岡にあり。傳へ云ふ、里見越前守忠弘の息男里見長九郎弘次の墓なりといへり。今淡島明神とす。今猶塚の形を存せり。

北條五代記に、里見長九郎弘次十五歳、初陣なりしが、桃花馬〔ツキゲノウマ〕に乘り、母衣をかけ、弓を持ちて、たゞ一騎はるかに落ち行くを、相模國の住人松田左京亮康吉追かけ、組んで落ちたり。既に首を取らんとせしかど、容貌美麗にして、花の如き少年なりしかば、たすけばやと思ひしかど、味方雲霞の如く走せ來り、首をうばひとらんとす、力およばず首討落しければど、さすがにたけき康吉も、涙にくれて前後に迷ふ。かゝるうき目にあふ事は、弓箭に携るが故なりと發心して、歸國におよばず出家して、浮世と改名し、一筋に弘次の跡をとふと云々。

葛飾志云ふ、中昔かつしかの浦に鹽賣るをのこあり、或時此所を通りしに、道端に古き髑髏の眼窩に貫かれたるがありしを、何の心もなくて踏みたりしに、其行先に忽然として一人の壯子顯れ出て、鹽賣の男子にむかひ、悦べるおもゝちしていへるは、年頃痛づるに貫きまとはれ、苦み止む時なかりしが、今幸に是を踏みはなち給はりしゆゑに、此苦をまぬかる、此恩を謝せんとするに所なし、しかるに吾本國は安房國なり、其所縁今なほ存す、ねがはくは吾にしたがひ來るべしとて、鹽賣るをのこをいざなひ、須臾にして房州に至り、彼壯子が所縁の家に寓す。此時既に七月盂蘭盆會にして、家内に魂棚を設く。壯子鹽賣のをのこをして其棚の下に居らしめ、牌前に供する所の種々、皆ことごとく此をのこに與ふ。故に飢に臨む事なし。然るに、ある日家の内あらそひの事出來て、互にわめきあふ聲せり。依て棚の下よりうかがひみるに、件の壯子あるじがもてなしのとゞかざるをいかり、怒りまた其家の稚兒を圍爐裡の中へ蹴おとしぬ。父母おどろき悲む事限なし。鹽賣のをのこは、何故に稚兒をかくなさけなくはものせしと問ひたりしに、壯子答へて云く、吾は此家の祖なるをもて此家に來れり。されどあるじがもてなしのおろそかなるを憎むのあまり、かくのごとしと云々。其後鹽賣のをのこ家に歸らん事を乞ひたりしかば、則ちゆるしつ、以前のごとく須臾にして古郷に歸りければ、不測の思ひをなし、此地を封じて件の髑髏を小倉に納り、本國安房國なればとて、安房頭明神と稱へしとかや。これ安房國の里見長九郎弘次が髑髏なりしといへり。頭と須と音の通ふ故に、今は安房須明神と稱したりと云々。

按ずるに、葛飾志に載する所、浮説妖妄に似たれども、云ひ傳ふるにまかせて、もらす事あたはず、しばらくこれを記し加ふるのみ。

の祟ありとて是を禁む。故に垣を繞らしてあり。或は云ふ、むかし平親王將門、平貞盛が矢にあたり、秀郷が爲に討たれ、後六人の近臣と稱する輩、其首級を蔂ひ、此地に至りし頃、此森の中に入りて動かず、終に土偶人と顯れたりしが、其後雷雨に破壞せしより、此地を踏む者あれば、必ずたゝりありとて、大に驚怖するといへり。又或人いふ、此森の回帶〔メグリ〕は、ことぐく八幡の地にして、森の地ばかりは行德の持分なりと。此故に八幡村の中に入り會ふといへども、他の村の地なる故に、八幡の八幡しらずとは字せしと。さもあらん歟。

因に按ずるに、八幡はむかし莊の號なり。中山什寶の內、應永二十七年千葉介兼胤の證文に、下總國八幡庄本妙寺法華寺弘法寺三ケ所寺務職云々。同庄曾谷鄉〔ソダニノガウ〕田畠在家云々。かくの如く記せり、證とすべし。しかあれば、眞間のあたり、曾谷、ともに八幡の莊に屬せしとしられたり。

曾谷妙見尊

曾谷村長谷山安國寺に安置せり。當國千葉寺妙見尊と同木にして、其末木を以て彫刻すといふ。當寺境內に、王羲之宮あり。華表の額に、晉王公廟とあり。烏石葛辰の筆にして、傍に石碑を建つ。何の謂れなる事を知らず。

高石明神社

八幡より東の方、佐倉街道鬼越村深町の入口、道より左の岡にあり。別當は日蓮宗にして、泰福寺と號す。祭禮は九月九日なり。土人傳へ云ふ、當社は里見安房守義弘の弟、南總大多木城主正木內膳亮時總の墳墓なりといへり。正木內膳の事諸説あれども、繁を厭ひてこゝに略す。神體は劍を帶せし馬上軍神の像なりといふ。永享二年平胤貞より中山の中興日祐上人へ注進の狀に、八幡の庄內にて高石神村の地を寄附するとあり。又同年二月同胤貞日祐上人へ附する證文にも、下總國八幡庄高石

元亨元年辛酉十二月十七日

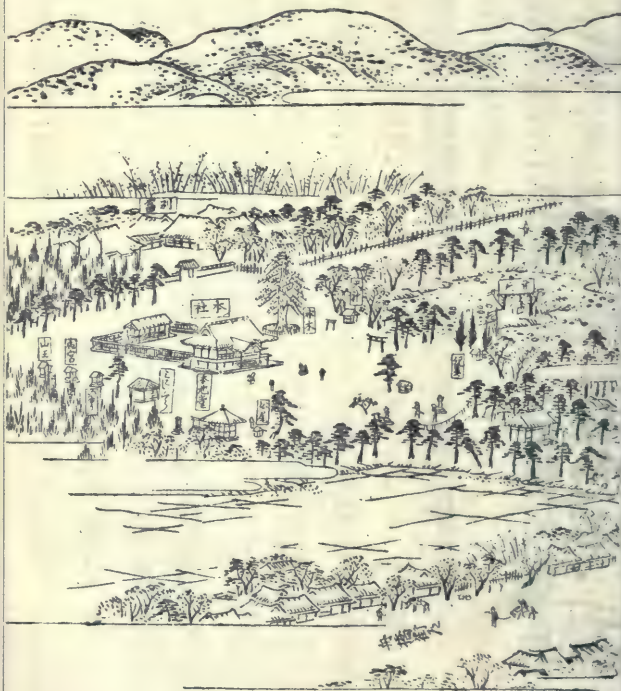
願主右衛門尉　丸子眞吉

別當　法印智圓

筒粥神事　毎歳正月十五日の朝、此神事あり。其年の豊凶をしるとて、參詣多し。　**放生會**　八月十五日に修行す。此日神輿渡せらる。又同日、津宮［ツク］といふ事あり、夕七時頃、當社の社人等集り、華表の前に檣の如く長き柱に白布を卷きたるを建て、上の方にて其白布を結び合せて足をかくる代とす。念願ある人、身輕になり、件の檣の上へ登り、四方を拜し、社の方を拜し、終りて下る。此行事は相州日向藥師にもありて、かしこにては推登［スキトウ］といへり。其趣相似たり。又其津宮柱［ツクバシラ］の下に樂屋をまうけ、神輿歸社におよぶ時、獅子、鹿、大鳥の形を擬ひて、此樂屋より出て、笛太鼓に合せて舞ふ事あり。同十四日より十八日迄の間、生姜の市あり。故に土俗生姜祭［シヤウガマチ］と唱ふ、マチは祭の略語なり。

當社は、宇多天皇の勅願にして、寛平年間、石清水正八幡宮を勸請せし宮居なり。遙の後、建久に至り、鎌倉將軍頼朝卿、再び朽傾の社壇を修營ありしより、封域廣くして壯麗たりしが、又星霜を歷て、今は老樹鬱蒼として、上久たる神垣となれり。

按ずるに、當社は國分寺に同じく一國一宮の八幡宮にして、往古府中に置かれしもの是なるべし。

八幡不知森　同所街道の右に傍ひて一ツの深林あり。方二十歩に過ぎず。往古八幡宮鎭座の地なりと云傳ふ。即ち森の中に石の小祠あり。里老云ふ、人謬ちて此中に入る時は、必ず神

本社
山王

八幡不知森

八幡

八幡宮

勝牡鹿之眞間之井見者立平之水挹家牟手兒名之所思

かつしかやままの井づつのかげばかりさらぬ思ひのあとを戀ひつつ　光明峯寺入道攝政

葛飾八幡宮　眞間より一里あまり東の方、八幡村にあり。（常陸並房總の海道にして、鳥居は道ばたにあり。）別當は天台宗にして、八幡山法漸寺と號す。本地堂には、阿彌陀如來を安置し、二王門には、表の左右に、金剛密迹の像、裏には、多聞、大黑の二天を置きたり。神前右の脇に銀杏の大樹あり、神木とす。（此樹のうつろの中に、常に小蛇栖めり。毎年八月十五日祭禮の時、音樂を奏す。其時數萬の小蛇枝上に顯れ出づ、衆人見てこれを奇なりとす。）

古鐘一口　（寛政年間、枯木の根を穿つとて是を得たり。其丈三尺七寸あまり。龍頭の側に應永二十一年午三月廿一日と彫付けてあり。）

按ずるに、應永は鐘の銘にしるす所の元亨元年よりは凡そ九十有餘年後の年號なり、もしくは應永の頃、亂世を恐れて土中へかくし埋めける時、其年號月日を刻するにや。

奉冶鑄銅鐘

大日本國東州下總第一鎭守葛飾八幡。是大菩薩。傳聞寛平宇多天皇勅願社壇。建久以來右大將軍崇敬殊勝。天長地久。前横巨海。後連遠村。京虫性動。鳧鐘曉聲。人戰眠覺。金啓夜響。永除煩惱。能證菩提。

梨園
真間より八幡へ行く道の間にあり
二月の花盛りは雪を
欺くに似たり
李太白の詩
に梨花白雪
香しと賦しゝも
諾なりし

湊之。奧津城爾。妹之臥勢流。遠代爾。有家類事乎。昨日霜。將見我其登毛、所念可聞。

反歌

勝牡鹿之眞間之井見者立平之水挹家牟手兒名之所思

下總國相聞往來歌　　作者未詳

可都思可能麻末能手兒奈乎麻許登可聞和禮爾余須等布麻末乃氐胡奈乎

眞間井　同所北の山際、鈴木院といふ草庵の傍にあり。手兒奈が汲ける井なりと云傳ふ。中古此井より靈龜出現せし故に、龜井ともいふとなり。此鈴木院と云ふは、北條家の臣にして、俗稱を鈴木修理と云ひけるよし。此人の造立故に鈴木と號す。又此庵の傍に、其祖先鈴木近江守の石塔あり。これも同じく修理と云ふ人造立せしなり。

按ずるに、寛文八年戊申、相州鎌倉鶴ケ岡修造の時の工匠を鈴木修理長常といふ、然る時は番匠の家ならん歟。鶴ケ岡棟牌にかく載せたれども、又別の人にや、なほ考ふべし。

萬葉集

過勝鹿眞間娘子墓時作歌　山部宿禰赤人

古昔。有家武人之。倭文幡乃。帶解替而。廬屋立。妻問爲家武。勝牡鹿乃。眞間之手兒名之。奥槨乎。此間登波聞杼。眞木葉哉。茂有良武。松之根也遠久寸。言耳毛。名耳毛吾者。不所忘。

反歌

吾毛見都人爾毛將告勝牡鹿之間間能手兒名之奥津城處

詠勝鹿眞間娘子歌　高橋連蟲麻呂

鷄鳴。吾妻乃國爾。古昔爾。有家留事登。至今。不絕言來。勝牡鹿乃。眞間乃手兒奈我。麻衣爾。青衿著。直佐麻乎。裳者織服而。髮谷母。搔者不梳。履乎谷。不看雖行。錦綾之。中丹裹有。齋兒毛。妹爾將及哉。望月之。滿有面輪二。如花。咲而立有者。夏蟲乃。入火之如。水門入爾。船己具如。歸香具禮。人乃言時。幾時毛。不生物乎。何爲跡歟。身乎田名知而。浪音乃。衆

ここに人を渡しはてんとせし程に我が身はもとのままの繼橋　日蓮

眞間手兒名舊蹟　同所繼橋より東の方、百歩ばかりにあり。手兒名が墓の跡なりといふ。後世祠を營みてこれを奉じ、手兒名明神と號す。婦人安産を禱り、小兒疱瘡を患ふる類ひ、立願して其奇特を得るといへり。祭日は九月九日なり。傳へ云ふ、文龜元年辛酉九月九日、此神、弘法寺の中興第七世日興上人に靈告あり、よつてこゝに崇め奉るといへり。春臺文集繼橋記に手兒名の事を載せたりといへども、其說里諺によるのみにして、證とするに足らず。

清輔奧義抄に云ふ、是は昔下總國勝鹿眞間野の井に水汲む下女なり。あさましき麻衣を著て、はだしにて水を汲む、其容貌妙にして、貴女には千倍せり。望月の如く、花の咲めるが如くにて、立てるを見て、人々相競ふ事、夏の蟲の火に入るが如く、湊入の船の如くなり。こゝに女思ひあつかひて、一生いくばくならぬよしを存じて、其身を湊に投ず。中畧。又かつしかのまのてこなともよめり。眞間の入江、眞間の繼橋、眞間の浦、眞間井、眞間の野などよめるこれ此所なり。云々。

萬葉集

していへり。或人いふ、古へは兩岸より板をもて中梁にて打ちかけたる故に、繼はしとはいふなりと。さもあるべきにや。

萬葉集

安能於登世受由可牟古馬母我可都思加乃麻未乃都藝波志夜麻受可欲波牟

新勅撰

勝鹿や昔のままの繼橋をわすれずわたる春がすみかな　慈圓

風雅集

五月雨に越え行く波はかつしかやかつみかくるる眞間の繼橋　雅經

同

かつしかのままの浦風吹きにけり夕波越ゆるよどのつぎはし　朝村

按ずるに、朝村の和歌に　よどのつぎはしとあるは、水の澱にかけたりといふ意にて、山城の淀とは異なり。

入重玄門倒修凡事の意を

續千載

くもりなき影もかはらず昔みしままの入江の秋の夜の月　　爲致

夫木抄

忘れじなままの入江のみをつくし朽ちなば袖のしるしとも見よ　　詠人しらず

同

かりそめのままの入江の玉がしはそことばかりの行くへだになし　　光俊

眞間於須比　仙覺律師の萬葉集抄云ふ、於須比にとはおそひになり、山のそひにといふ義なりと。又契沖阿闍梨の萬葉代匠記に、まゝおすひは駿河能宇美於思敝爾（スルガノウミオシヘニ）とあるにおなじく、礒邊なりといふ。本居宣長翁の考へにも、手古奈が礒邊にありしかば浪さへめでてさわぎしといふ意ならんとありて、礒邊といふにしたがはれたり。

万葉集

可豆思賀能麻萬能手兒奈家安里之可婆麻未乃於須比爾奈美毛
登杼呂爾

眞間繼橋　弘法寺の大門石階の下、南の方の小川に架す所のふたつの橋の、中なる小橋をさ

都良思母

夫木抄

かつしかの眞間の浦わの沖津洲にあけのそほ舟からろおすなり　俊頼

續後撰集

かつしかの浦間の波のうちつけに見そめし人の戀しきやなぞ　道隆

眞間濱　おなじあたりをいふなるべし。

夫木抄

汀なる芦のしをれ葉吹きさやぎ氷もよほすままの濱風　爲家

眞間入江　是も同じ邊なるべけれども、今は耕田となり、又は民家林藪に沿革して、古に違へり。

萬葉集　山邊宿禰赤人

勝牡鹿乃眞々乃入江爾打靡玉藻刈兼手兒名志所念

へたり。

樓門　石礎の上に聳ゆ。左右の金剛力士は佛工運慶の作なりといへり。全體黒色にして、他に異なり。樓上に掲ぐる額に、眞間山と題す。弘法大師の親筆なりといへり。

當寺、往古は眞言瑜伽の古刹なりしが、日蓮大士此地に遊化の頃、寺僧大に宗意を論じ、竟に大士の化導に歸依し、宗風を改轉するといへり。或人云ふ、西新井邑總持寺に安ずる所の弘法大師の靈像は、當寺改宗の頃、かしこに遷しまゐらせしと云ふ。日統抄に曰く、了性眞間の弘法寺に住す、或日日常と問答す、屈を請けて逃れたり、日常衆徒を化す、寺因て本化の道場とす云々。又先德記を考ふるに、關東河田谷天台宗の中に了性と云ふあり。本文に宗祖上人と問答せし住侶の名を註さず。おそらくは此了性が事なるべし。

當寺什寶多きが中にも、宗祖上人、及び諸徒の眞筆の曼荼羅、消息の類ひ數通あり。悉く擧ぐるに不遑。毎歳九月九日より十八日迄、法華經千部讀誦、十月十三日は、宗祖上人の忌日たるにより、御影供を修行せり。近在の道俗群參す。

眞間浦　同弘法寺の前の水田の地をいふ。勝鹿の浦といふも、此所のことを云ふなるべし。土人云ふ、昔は眞間の崖下まで浪打寄せたりとなり。故に此邊に、今も其舊跡とて、字に殘れるものあり。所謂大洲は初めて洲になりし所なり、立野といふは芦を刈りて陸地となりし所なり、芦畔(アシクロ)といふは萱野にして、水田を開發せし故とぞ。

萬葉集

可豆思加之麻萬能宇良未乎許具布禰能布奈妣等佐和久奈美多

其二

真間弘法寺

二王門

をしらず。故に一に要石とも號くといへり。土人此石橋は國府臺にある所の石棺の蓋なる由云傳ふ。

按ずるに、國分寺古伽藍の石材なるべし。

持國坂 國分寺より眞間へ行く方の坂をいふ。古へ此地に國分寺の四天王の內、持國天の堂舍ありし故に號とすといへり。

眞間山弘法寺 國分寺の南にあり。市河村に屬す。日蓮大士弘法の地にして、六門家と稱する所の其一員たり。日頂上人を以て開祖とす。本國院日頂尊師は、六老僧の中にして、伊豫阿闍梨と稱す。富木常忍〔トキツネノブ〕の子なり。文永四年丁卯日蓮上人に就て得度す。弘安五年壬午上足の第五となる。日蓮上人の滅後、守塔居を營扁して、本國院と號す。上人は山本坊〔ヤマモトバウ〕と稱す。正安元年己亥、父常忍寂すの後、哀をつくして、八月十二日こゝを出去り、終にかへらずとなり。依て示寂の年月其終焉の地をしらず。はじめ寺院をいづる日をもて忌日とすといへり。本堂には釋尊の像を安ず。富木常忍嘗て釋尊の木像を造り、當寺に奉安す。日蓮上人、日頂師をして點眼せしめ、賀の書を賜ふ。祖師堂は其右に竝ぶ。大門の內に宗祖上人の像を置く。此像は日法上人の作なり。支院十餘宇、各礎道の下に列す。門は松の列樹にして、六丁程あり。

楓樹 釋迦堂の前にあり、今は枯株となりて、其形を存するのみ。むかしはわたり四五丈にあまりしとなり。所謂眞間の楓と稱するもの是なり。

遍覽亭 方丈の構のうちにあり、額に遍覽亭と題す。黃檗千呆和尚の筆跡なり。此所は山崖に臨むが故に、西南を眺むれば葛飾の村落眼下にあり、江戶の大城、甲相の群山、雲にそびえ、霞に橫たはる。又こなたには房總の海水遠く開け、實に千里の風光を貯

鏡石
真間の弘法寺より
國分寺へ行方の
田畊石橋の傍に
溝の中にあり土人云
石根地中に入て
其際をしらず
依要石とも号く
るとあり

小田原北條家制札一通 奥に子正月十四日遠山左衛門奉之とありて、全舊領國分鄉と宛名を記したり。

古證文二通 二通とも天正十三年乙酉二月三日とありて、胤則と註し。花押を印す。一通の宛名は國分寺御門徒中、又一通は國分寺御同宿中とあり。其文中に十二坊の事あり、近き頃までも其十二坊存せしとみゆ。今はことごとく廢せり。

古笈一 尤も美を盡せり、古色愛すべし。銅物に奥州住權大僧都觀學院慶長六年と彫りてあり。

延喜式主税式曰

下總國公廨各四十萬束。國分寺料五萬束。藥師寺料三萬五千束。文殊會料二千束。藥分料一萬束。下略。

當寺、往古は伽藍巍々たりしかども、あまたの星霜を經て大に衰廢し、今は昔の萬が一を存するのみ。當時の礎石と稱するもの堂前にあり。今の寺境は、太田道灌の頃の陣屋の舊跡にて、古の寺境は乾の方にありて、今は畑となれり。

內膳山 國分寺より東の方、一丁計を隔てたる丘をいふ。往古里見義弘の舍弟正木內膳が陣營の地たりしといふ。

鏡石 弘法寺より國分寺へ行く方の田畔、石橋の際の水中にあり。此石根地中に入る事其際

按ずるに、上世の人の墓なるべし。里見長九郎及び正木内膳の墓とするは、何れも誤なるべし。

鐘ヶ淵　同所斷岸の下、利根川の水流を號く。傳云ふ、里見氏の陣鐘此淵に沈沒す、故に號とすと。其鐘今も此地の水底に存すといへり。或人云ふ、此鐘ヶ淵といふは、豐島刑部左衛門秀經が陣鐘の水中に落入しゆゑなりと。此鐘は船橋慈雲寺の鐘なりけるを、此地へ持來れるとなり。

國府城址　同所總寧寺より東の方をいふ。往古國府五郎某なる人の居城なりしが、慶長に至り沒收せらるゝとなり。

按ずるに、國府五郎は千葉介常胤の弟國府五郎胤道が事を云ふなるべし。其後裔の人此地に住し、慶長の頃迄居られたりしならん。同卷牛御前宮の條下にも國府五郎の事を擧げ置きたり、てらしあはせてみるべし。

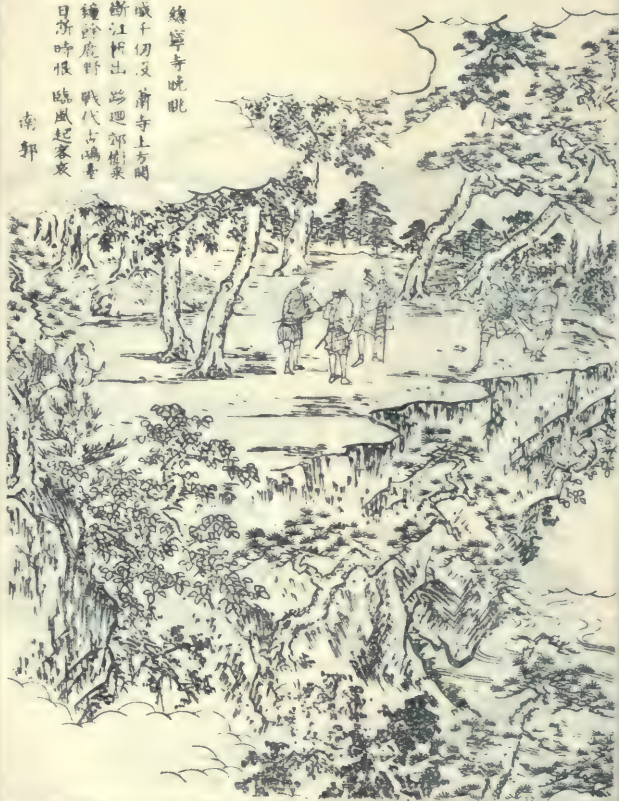
國分山金光明寺　同所東の方、國分寺村にあり。今は新義の眞言宗にして、京師三寶院に屬す。本尊藥師如來の像は、開山行基大士の作。脇士の十二神將は、運慶の彫像なり。宮内賓頭盧尊者は行基大士の作なりといふ。當寺は、聖武天皇の御願にして、每國に置かるゝ所の國分寺の一なり。中興開山を宥天法印と號す。本堂の額に、金光明寺の四字を畫せしは、智積院僧正運敞の筆なり。

樓門　樓上に古佛釋尊を安置す。開闢時世のものにして、尤も稀有なり。**釋迦堂**　本堂の右にあり。本尊は坐像にして、丈六あり。左右帝釋梵天王の像は、上古の物にして、甚奇古なり。其余古佛像多し。續日本紀に云く、聖武天皇普く天下をして釋迦牟尼佛の金像高一丈六尺者各一鋪を造り、并大般若經各一部寫さしむ云々。

國分寺

總寧寺晩眺
荒城千仞叉蕭寺上方開
山斷江將出路廻郊樹來
麓鐘餘鹿野戰代古鳴臺
落日漸時恨臨風起客哀
南郭

國府臺
斷岸之圖

鵜亭寺
羅漢井

に楯籠りける頃、太田持資兵を發して、此地に陣城を取立て、件の一揆を攻落しける程の究竟の要害なりければ、天文六年にも、（或は七年といふ）小弓（又作生實）御所足利左兵衛佐義明、兵を起し、小田原を攻めんとし、いまだ事ならざるに、洩て其聞ありければ、同年十月四日、北條氏綱、及び氏康、小田原を進發し、同五日鴻の臺の陣を攻る、戰ひ利なく、義明父子並に舍弟基頼共に討死す。又永祿七年には、太田新六郎（康資）兄弟の輩、小田原に背き、同苗美濃守資正入道三樂齋、及び里見安房守義弘等と、此地に屯しければ、小田原より討手として、遠山丹波守、同隼人佐をむかはしむ。故に太田兄弟、相圖相違して、武州岩附へ落行きけり。然るに北條氏康父子、小田原より馳向ひ、同年正月七日八日、大に戰ふ。依て義弘、三樂の輩、終に敗走す。（以上諸書に載する所の要を摘む。）

殿守臺舊址　同じ境内にあり、上に富士淺間の小祠ありて、白檀多し。

石櫃二坐　同所にあり、寺僧傳へ云ふ、古墳二雙の中、北によるものは里見越前守忠弘の息男同姓長九郎弘次といへる人の墓なりといふ。一ッは其主詳ならず。或は云ふ里見義弘の舍弟正木内膳の石棺なりと。中古土崩れたりとて、今は石棺の形地上にあらはる。其頃櫃の中より甲冑太刀の類、および金銀の鈴、陣太鼓、其余土偶人等を得たりとて、今其一二を存して、總寧寺に收藏せり。

其二
古戰場

國府臺
總寧寺

ふ。當寺往古は近江國にあり。天正三年乙亥、北條氏政、當國關宿の地に移す。されど屢洪水の患あるにより、寛文中、竟に此地に引くとなり。惣門の內、右に鹽竈六社明神の社あり。陸奥の摸なりといふ。太田道灌手植榎と稱するは、大門の通り、列樹の中、下馬の石碑に相對して、右の傍にあり。又客殿の脇に梅の老樹あり。是も道灌親ら栽うる所とぞ。當寺より京師道正庵の解毒丸を出せり。

國府臺 總寧寺の邊より、眞間の邊迄の岡を、すべてかく稱するなるべし。北條五代記に云ふ、古き文には、國府臺、小府代、鴻岱とも書きたり。今所の者にとへば高野臺と書くといふと見えたり。按ずるに、鴻臺は武州栗橋の西にありて、此地を云ふにあらず。和名類聚抄に、下總の國府は葛飾郡にありと記せり。依て考ふるに、國府の近き邊にある所の岳山なれば、國府臺とは號したりしなるべし。或人云ふ、下總國葛飾の府は、往古專ら葛西の地を本府とせし事にて、葛西昔は下總に屬せり。永正六年の宗長が紀行東土產にも、下總國葛西の府のうちを、半日ばかり葭あしをしのぎ、今井の津淨土門なりける淨興寺に立寄りてとあり、證とすべし。按ずるに前の新利根川の條下に擧げたる清輔奥義抄の文によるに、葛飾郡は大郡なれば、利根川と國府を中央に定めて、以東を葛東と呼び、以西を葛西とは唱へしなるべし。されど今は利根川をかぎりとし、葛西の邊ことごとく武藏國へ加へたまふ事とはなりしなり。

國府臺古戰場 總寧寺の境內、すべて其舊跡なり。文明十一年七月、北總の一揆、臼井の城

迦羅鳴起瀬　新利根川の水流なりといへども、今其地さだかならず。土人云く、柴俣の邊なりと。北條五代記に、氏康と里見義弘戰ひの條下に、武州江戸より、小田原方遠山丹波守富永三郎左衛門尉はせ参じ、からめきの川を前にへだてゝそなへたりとあり。同書にからめきの瀬ともあり。按ずるに、さらしな日記にかゞみの瀬とあるは、此川の事ならん歟。恐らくは後世の里俗あやまりつたへて、からめきと轉唱せしもしるべからず。

市河城址　其地今しるべからず。義經記云ふ、治承四年九月十一日、武藏と下總の境なるまつどの庄市河といふ所に著き給ふとあり。昔は松戸を庄と唱へしとおぼゆ。鎌倉大草紙に、上杉憲忠より、今度中務入道了心の子息實胤、自胤二人を取立て、下總國市川の城に楯籠り、康正二年正月、南圖書簗田出羽守、其外大勢指遣し、數度合戰して、同十九日終に城を攻落す。簗田河内守は、關宿より打て出で、武州足立郡を過半押領し、市川の城をとる。云々。猶前の第六巻石濱城の條下に詳なり。

根本橋　市河の渡口より、總寧寺へ行く間の小川に架す。此地を根本村といふより號とす。橋下を流るゝは、眞間の入江の舊跡より發する所の水流なり。

安國山總寧寺　市河の驛より北の方の丘、利根川の流に傍てあり。曹洞派の禪林にして、關東の僧錄司三箇寺の一員たり。所謂常陸富田大中寺、武藏越生龍隱寺、當寺は是なり。本尊は釋迦如來、開山は通幼和尚とい

利根川

此詠はいづれも常陸國へ流るゝ刀禰川に讀合せたる詠なれども、こゝの川もおなじ水流なれば、見出づるまゝにこゝにこれを加へはべるのみ。

更級日記

下つふさの國と武藏の境にてふとゐ川といふ、かゞみの瀨、まつさとの津にとまりて云云。

東鑑曰

治承四年庚子九月二十九日戊寅。中略江戸太郎重長。依レ令レ與二景親一。于レ今不參之間。試昨日雖レ被レ遣二御書一。猶追討可レ宜之趣有二沙汰一。被レ遣二中四郎惟重於葛西三郎淸重之許一。可レ見二太井要害一之由。僞而令レ誘二引重長一。可レ討進一之旨所レ被レ仰也。下略。

又曰

同年十月二日辛巳。武衞相二乘于常胤廣常等之舟檝一。濟二太井隅田兩河一。精兵及二三萬餘騎一。赴二武藏國一。云々。

此篠はいづくのさゝぞとねりらがこしにさがれるともをかのさゝ
　末
篠わけば袖こそやれめとね川の石はふむともいざかはらより

此篠わけばの和歌は、新勅撰第九、神樂の歌の中に橘仲遠詠として入られたり。按ずるに、本にとねりとありて末にとね川とうけたり。前の刀禰の考に據あるに似たり。

夫木抄
とね川の下はにごりてすみてありけるものをさねてくやしき　詠人しらず

芳雲集
　利根川歸帆
雲ひらくとねのかはとのみるがうちにこなたやとまり歸る舟人　實陰卿

北國記行
　利根川をはるかにみはべりて
ふりつみし雪の光やさそふらん浪よりあぐるあまのとね川　堯惠

總の間を南へ流れ、國府臺の下を行德の方へ曲流し、海水に歸せり。是を新利根川と稱す。

按ずるに、侍中群要に散位を刀禰とよめり。西宮抄に、大節には太夫を刀禰と稱すと云々。公事根源云ふ、大節に刀禰めせと仰するは、刀禰は六位を云ふとあれども、古へに刀禰といふは五位以上にもわたれる名目なり。又朝野群載に、檢非違使廳下刀禰職事と見え、また補任の事を擧げたり。李部王記に、百官主典以上を刀禰と稱すとあり。是はもろ〱の長上の官をいへるにて、主典以上はみな長上の官なり。延喜祝詞式に、倭國の六御縣能刀禰男女爾至萬氏下畧、かくあるは百姓などをいふならん　すべて湊のとね、里のとね、また庭訓往來に、淀河尻の刀禰ともありて里長防令などをも刀禰といへる事は、古今著聞集にも見えたり。播州日岡明神に、每歲正月初午日大頭(ダイトウ)といふ事を勤む。鄕刀禰(サトノトネ)と稱して、舊家三十六人の内より是をつとむ。各六位にて明神の洪奉職たり。其日射あり、又五節の式ありて、悉く刀禰の役なり。其餘山城の賀茂、および鞍馬の鄕の天神の神職等をも刀禰とよべり。後拾遺集雜神祇部藤原長能の歌の詞書にも、里のとね宣旨にて祭つかうまつるべきをとあり。刀禰とはすべて物の冠たるを稱揚する辭なる事なり。是等によりてあきらかなりと知るべし。されば此川も關東第一の洪河なる故に、關東の河の冠たる意をもて、刀禰とはなづけたりしなるべし。世俗筑後川を西國太郎といひ、此河を坂東太郎ととなへ、皇朝一双の大河と稱するも、其意同じかるべし。或人云ふ、利根川は上野國利根郡文殊嶽より發す、故に文殊の智慧利根の意をとると。是大なる附會の說なるべし。皇朝文字を借り用ふる事、往々其例あれば、刀禰を利根に作るともあやしむべからず。

萬葉集

刀禰河泊乃可波世毛思良受多多和多里奈美爾安布能須安敝流

伎美可母

神樂註祕抄

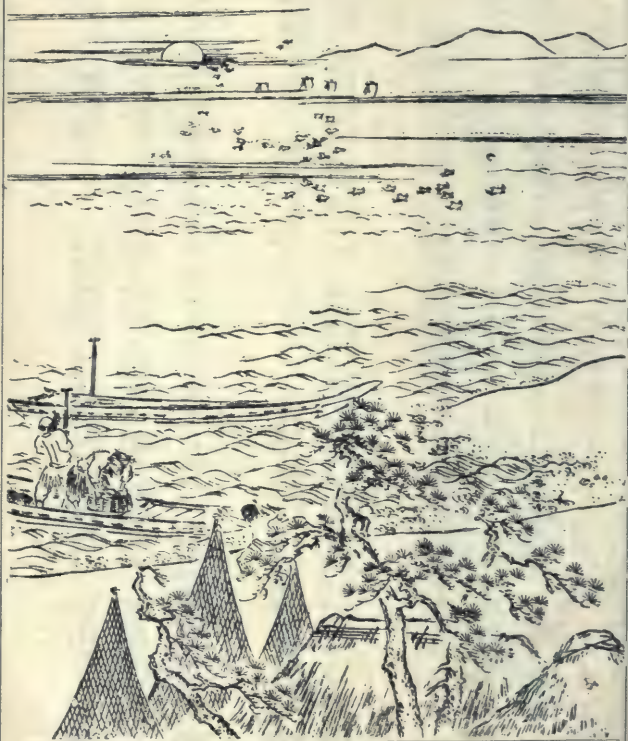
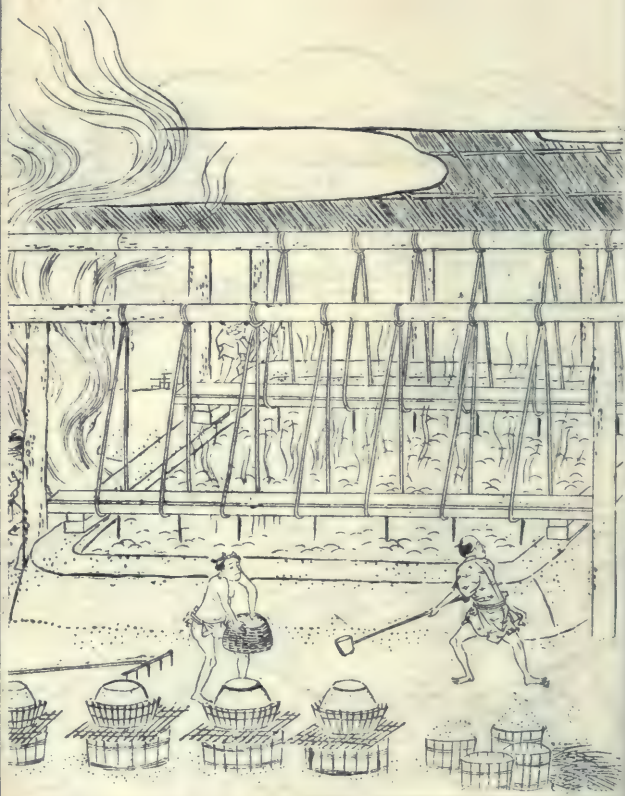
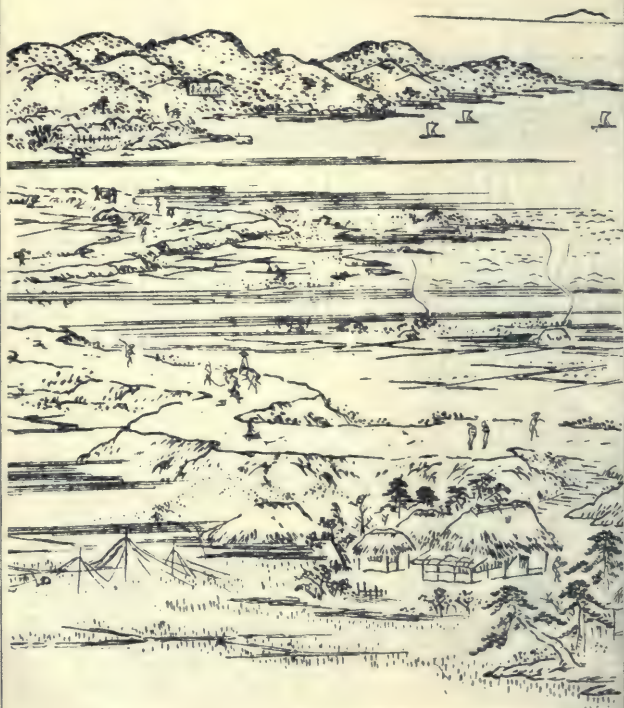
篠本

り、（奇特ありとて諸人渇仰す。）

長島湊　葛西、長島と一雙の地なり。（昔此地に長島殿と稱せし領主ありて此地に住せしとなり。梵音寺といへる觀音堂領の廢址あり。）相傳ふ、太田道灌の頃は、國府臺の湊に船を泊す。其後野州、奥州、常州、總州等の國々、高瀬舟の便利よきを用ふる事となりしより、行德へ運送する事とはなれりといふ。（永祿二年小田原北條家の分限帳に、太田新六郎所領の中に、葛西、長島、高城と云云。）

新利根川　（萬葉集刀禰に作り、活字板源平盛衰記利根に作れり。）舊名を太井河といふ。（此號更級日記および東鑑等の書に見えたり。又清輔奥義抄云ふ、下總國かつしかの郡の中に大河あり、ふと井といふ、河の東をば葛東の郡といひ、河の西をば葛西の郡といふとあり。證とすべし。私に云ふ、此河より西は葛西と稱して、今武藏國に屬す。又北條五代記國府臺合戰の條下には、からめき川といふよし見えたり。世俗坂東太郎と稱し、或は文卷川（フミマキガハ）又かつしかの河とも唱へたり。）行德を流るゝ故に、行德川とも號く。水源は上野國利根郡文殊嶽の幽谷より發し、高科川、吾妻川、烏川、碓井川、及び信州の國郡より出づる所の諸流合し、武州幡羅郡に至り一河となる。又上州渡瀬川も、利根に落合ひ、栗橋より分流して、一流は北總に入り、關宿、木颪等の地に傍ひて東流し、銚子に至り海に歸す。是を利根川と號く。（坂東太郎と字す。）一流は、武藏、下

行徳

行德
鹽竈之圖

久うして、其始をしらずといへり。然るに天正十八年、關東御入國の後、南總東金へ御遊獵の頃、此鹽濱を見そなはせられ、船橋御殿へ、鹽燒の賤の男を召し、製作の事を具に聞し召され、御感悅のあまり、御金若干を賜り、なほ末永く鹽竈の煙絶えず營みて、天が下の寶とすべき旨、鈞命ありしより以來、寬永の頃迄は、大樹東金御遊獵の砌は、御金など賜り、其後風浪の災ありし頃も、修理を加へ給はるといへり。事跡合考に云く、此地に鹽を燒く事は凡そ一千有餘年にあまれりと。又同書に天正十八年御入國の後、日あらず此行德の鹽濱への船路を開かせらるる由みゆ。今の小奈木川是なり。

此地の鹽鍋は、其製他に越え、堅强にして、保つ事久とぞ。東八州悉く是を用ひて食料の用とす。

甲宮　行德入口の繩手にあり。其來由今知るべからず。土人或は傳へて云ふ、國府臺合戰の時、某の大將の兜を祀ると。さもあらん歟。當社は行德八幡宮の別當兼帶奉祀す。

圓光大師鏡御影　行德の東の海濱高谷村淨土宗了極寺に安ず。圓光大師、鏡を照して自己の姿をうつし、畫き給ふ御影なりといへり。土俗鍋の御影とも稱せり。當寺に大僧正祐天和尙眞筆の塔婆あ

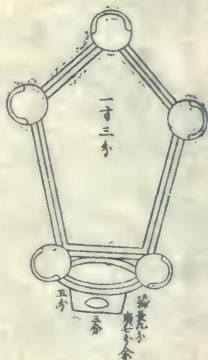
金剛院廢址　當寺より南の方にあり。御行屋敷と字せり。是則ち先にいへる處の金剛院の舊地なり。金剛院は、羽州羽黒山法漸寺に屬すといへり。其昔、行德有驗の山伏住みたりしにより、竟に此地名となるよし云傳ふ。

海巖山德願寺　本行德の驛中、一丁目の横小路、船橋間道の左側にあり。淨土宗にして、鴻巢の勝願寺に屬す。當寺往古は普光庵といへる草庵なりしが、慶長十五年庚戌、開山聰蓮社圓譽不殘上人、寺院を開創して阿彌陀如來の像を本尊とす。（丈三尺二寸あり。）佛工運慶の作なり。往古鎌倉二位の禪尼政子の命により是を造る。遙の後、天正十八年に至り、一品大夫人崇源院殿、鎌倉より移し給ひ、御持念ありしが、後大超上人に賜はり、又當寺第二世正蓮社行譽忠殘和尙、當寺に安置なし奉るとなり。（十七世晴譽上人、殊に道光普く四方に溢れ、信心の徒多かりしと也。）境内閻王の像は、運慶の彫造なり。坐像にして、八尺あり。（毎年正月七月の十六日には、參詣群集す。）當寺、十月は十夜法會にて最も賑はし。山門額海巖山の三大字は、緣山前大僧正雲臥上人の眞蹟なり。

鹽濱　同所海濱十八箇村に渉れりと云ふ。風光幽趣あり。土人云ふ、此鹽濱の權輿は、最も

行德
徳願寺

斤量五十二錢目餘

唐銅の如くにて、甚だ古色なり。惣長サ三寸二分、劍の裏延板、鈴大サ三寸回り、内に小石一ッ宛あり。鈴の口一寸八分、劍先より元まで二寸三分。

行德八幡宮　本行德三丁目、道より右側にあり。別當は、同所一丁目自性院兼帶す。此地の鎭守にして、毎歳八月十五日祭祀を行ふ。

神明宮　同所一丁目、街道の左側にあり。此地の鎭守とす。別當は眞言宗にして、自性院と號す。毎歳九月十六日を以て祭祀の辰とす。其祭る所は、伊勢内宮の土砂を遷して、内外兩皇大神宮を勸請し奉る。相傳ふ、當社、昔は川向ふ中洲と云ふ地にありしを、後此所へ遷すとなり。又此地を金海の森と號く。慶長十九年甲寅、金海法印といへる沙門、此地に一字の寺院を開創して、金剛院と號す。依て金海の森といふとぞ。金剛院今は廢せり。

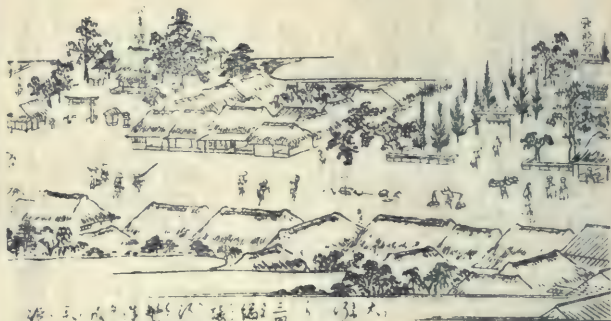
按ずるに、葛西志といへる書に、行德は金剛院の開山某行德の聞え高かりし故に地名とする由記せり。

を見んとて、人目を忍び、此相撲臺に來り、其墓所に詣る由記せども、今其墓の舊跡さだかならず。

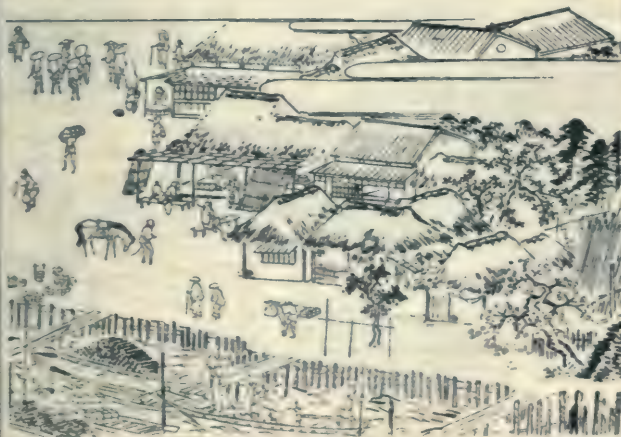
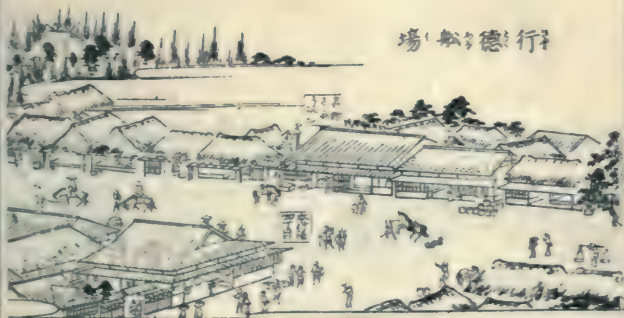
行徳船場　行徳四丁目の河岸なり。土人新河岸と唱ふ。旅舍ありて賑はへり。江戸小網町三丁目の河岸より此地迄、船路三里八町あり。此所は、すべて房、總、常陸等の國々への街道なり。

辨財天祠　同所四五丁下の方、湊村にあり。昔は潮除堤の松林の下にありしとなり。（其舊地を辨天山と號して、石の小祠あり）今は圓明院に移す。正徳年間、江戸青山梅窓院の順譽唯然和尚、此神の靈示により、享保三年戊戌、宮居を建立ありしといふ。祭る所は、藝州嚴島の御神に同じく、市杵島姫神にして、海神村の阿諏訪神は男神、當社は女神と稱す。神田あり、辨天免と唱ふ。

船靈宮　（靈像一軀、探信の筆なりといふ。古へ此地大船入津の湊なりし故に、此神を崇むるといへり。）

古鈴一口　湊村青暘山善照寺といへる淨刹に收藏せり。芝増上寺に屬す。開山は覺譽上人と號す。慈覺大師彫造の觀音湛慶の作の焔王、又法然上人鏡御影と稱するものあり。

行徳船場

松戸の里

半田稲荷社
東葛西領
金町にあり
来由ハ詳
拾遺に記す
へし

松戸津　常陸街道にして、驛舍あり。更級日記に、鏡の瀬松里の津にとまりてとあるは、此地の事をいふならん歟。義經記に、治承四年九月十一日武藏と下總の境なる松戸の庄市河といふ所に著き給ふとあり。むかしは松戸の庄の名にてありしならん歟。

按ずるに、さの一字を略して末津土〔マッド〕といふならん、此たぐひ地名に其例多し。既に下總國埴生郡を、土民中略して波不と唱ふるたぐひ是なり。

松戸堤　同所新利根川の堤をいふ。鴻臺戰記に、天文六年十月、北條氏綱小弓御所義明を攻むる頃、其月四日の夜、氏綱夜半にまぎれて淺草川を打越え、おほつの宿を夜深に通り過ぎ、松戸の堤にて軍議ありし事を載せたり。おほつの宿、いづれの地にや、今しるべからず。按ずるに、葛西に青戸村あり、土人青戸をあふとと唱ふ。又津と戸とは通音なれば、或は青戸を云ふならん。今戸八幡宮の社記に、今戸舊は今津といひしとあるも、同じ例なるべし。

相撲臺　松戸の驛より東の方の臺をいふ。其廣さ南北五百歩ばかり、東西四百歩にあまれり。鴻臺戰記、天文六年十月、國府臺合戰の條下に、松戸の川を打越え、御所陣の內よりも、椎津、村上、堀江、鹿島を始として、五十騎ばかり、相撲臺に打揚げ、敵の人數を見合すとあり。

小弓御曹子墓　鴻臺戰記、義明滅亡の條下に、乳母レンセイといひける女房、御曹子の亡屍

土中を掘りしに、金像の大悲の像一軀を獲たり。佛像背面に、弘長二年二月造といへる七字を刻せり。仍て直に深谷氏の家に移し、假に佛壇に安ず。相好端嚴、實に凡工の所造に出でざる所あり。然るに其前宵、深谷氏老翁嫗共に夢の應あるを以て、ますく奇なりとし、竟に此地を闢きて、草堂を營み、此靈像を遷し奉りけるとぞ。

按ずるに、世に夕顔觀音の像は、瓠瓜の中より出現し給ふ故に、此稱ありとも云ふ。或は云ふ、紫式部の念持佛なりともいひ傳へり。此地の縁起に載する所と異也。何の故に夕顔の稱あるにや、其よる所をしらず。

猿ヶ俣　新宿より北の方の邑名なり。

神鳳抄曰

下總國　葛西　猿俣御厨　百八十丁新御厨在レ之云々。

北條家永祿二年所領役帳に、窪寺大藏丞といふ人、葛西猿俣四十九貫文の地を領すとあり。葛西今武藏國に屬すといへども、古へは下總國なり。古書に出づる所みなかくの如し。

和銅寺廢址　同所にあり。佛生山と號したる眞言の古藍にして、和銅年間の草創なりしと云傳ふ。中古迄も、伽藍巍々たりしに、天文六年、國府臺合戰の時、兵火の爲に、灰燼となりて、寺僧も悉く追散されて、終に廢寺となりけるとて、今其號のみを傳ふ。

中川

夕顔觀音堂

新宿渡口
松戸街道

至りて、空しからぬを尊み、則ち本尊とすといへり。長二尺五寸、幅一尺五寸、厚サ五分許ある梨板なり。片面は、中央に首題、および左右に兩尊四菩薩、又病即消滅等の數字を刻し、其下に五月日とありて、大士の號、および花押を印せり。又片面は、帝釋天王の影像なり。右の御手に劔を持し、左の御手は開きて忿怒の相を顯し給ふ。是除病延壽の本尊、惡魔降伏の尊容なり。信敬の輩には、是を摺して與ふ。點畫あざやかにして、希代の本尊なり。往古攝の四天王寺に、初めて帝釋天降臨ありしも庚申の日なり。當寺の板本尊出現も、又庚申にあたる故に、其因縁にて、此日を縁日とすといへり。

夕顔觀音堂　新宿の渡口より、半道ばかり西北の方、中川の堤に傍ひて、飯塚村といふにあり。本尊聖觀世音は、金像にして、御丈五寸計ありと云ふ。されども深く内龕に祕して、拜する事をゆるさず。別に慈覺大師手刻の觀音の木像を以て、龕前に安ず。相傳ふ、此地は昔莊官關口氏某が采地なり。江戸砂子に、此地は村岡五郎平良文が墳墓の舊地なりとあれども、據なし。往古關口氏、此地に就りて、熊野權現、及び水神等の社を創す。此叢祠今なほ存す。其社前に、老松と榎樹の二樹の雙立するあり。春夏は枝葉憔悴、秋冬は翠色を增す。人以て奇なりとす。又此樹間、時として光を發し、或は龍燈の梢にかゝるを見るといふ。寛文八年戊申、關口氏此地の醫生深谷氏と共に相謀りて、此樹下を掘りしに、一二の佛具を得たり。深谷氏は紀州の產にして、喜兵衛と云ふ。其頃齡七旬過あり、年相似たり。神祠の傍に住す。弱冠より信心にして、日蓮の弘法に歸し、常に妙經唱題佛器ある事なし。是必ず古時此地に有名の寺院ありしならんと云ひて、竟に同年六月六日、謹でなほ此

按ずるに、氏康紀行に記せし淨興寺を、世人木下川の淨光寺に思ひあやまれる事既に久し。寺號は似たれども、文字興と光との違ひあり。氏康および宗長の紀行、共にふたつながら文字淨興に作るときは、當寺をさしていへる事尤も明らけし。殊に木下川の淨光寺は、慈覺大師開創の精舍にして、天台止觀の法燈赫々たり。しかるに當寺は記主禪師の開基にして、舊より淨業の佛刹たり。殊更庭前琴彈松と稱せる古株もあり。又東土産に述るが如く、當寺は西南の方遠くひらけて、芙蓉の峯に相對し、眺望する所宗長が句意にたがふ事なし。然る時は、此ふたつの紀行を明證とすべき歟。

天川山妙福寺　下鎌田村にありて、淨興寺の北二丁計を隔つ。淨土宗にして、上今井村金藏寺に屬す。中興開山は德譽岌公和尙と號す。本尊は阿彌陀如來なり。

親鸞上人御影堂　本堂の前左の方にあり。相傳ふ、昔親鸞上人東國遊化の頃此地を上ぎり給ふ時に、其年旱魃にて、里民の歎ひとかたならず、上人請雨の祈念ありしかば、數日の間雨降りて、百穀みのる。其後上人こゝに止り給ふ事三年、歸洛の頃、自身の肖像を造りてこゝに殘し置かるゝとなり。毎歳四月八日より同十日迄、佛龕を開きて、親鸞上人の御影を拜さしむ。因て道俗群集す。**鏡ケ池**　本堂の後にあり、上人自ら肖像を造りたまふ時、此池に面影をうつし給ふといふ。**袈裟懸松**　同じ傍にあり、舊樹は枯れて今若木を植ゑたり。**太子堂**　本堂の前右の方にありて、御影堂に相對せり。聖德太子の靈像を安ず。太子自ら作らせたまふと云傳へて、毎歳二月廿一日參詣あり。

帝釋天王　柴又村經榮山題經寺に安置す。江戸より二里半。當寺は寛永年間の草創なり。緣起に云く當寺第九世日敬師、在住の頃、堂宇大いに破壞す。師深く是を歎き、普く四方に行乞して、再興の志を勵し、終に其堂舍を造改めんとする時、梁上より此板本尊を得たり。舊當寺に高祖大士手刻の祈禱本尊と稱するものある由、云傳へし事の侍りしも、此時に

富士の根は遠からぬ雪の千里かな　　宗長

方丈の西にさしむかひ、雪くもりなく見えわたるばかりなり。云々。

按ずるに、此あづまのつとは、宗長の紀行なり。世に宗祇法師の紀行とするは誤なるべし。宗祇終焉記、および扶桑隱逸傳等の書に、宗祇法師は文龜二年七月つごもりに歿する由みえたり。此紀行の始に、永正六年文月十六日、思ひたちぬとあるをもて考ふるに、永正は宗祇終焉の後七年を經たる年號なり。依て宗祇にあらざるをしるべし。又按ずるに、江戸の館のふもとに一宿してとあるは、江戸城の事なるべし。其頃は太田持資讒害せられし後なれば、此城上杉の手に屬し、朝良、朝興などこゝにありし頃なるべし。

琴彈松　同境内堂前にあり。靈骨として繁茂せり。天文十五年、北條氏康當寺に宿られし頃、松風入琴といへるを題にて、和歌を詠ぜらる。是より後、琴ひき松と號するならん。

武藏野紀行

こゝに葛西の亞淨興寺の長老、年八十あまりにおよべるがむかひに出でられ、寺内に立ちより一宿すべきよしまうされければ、河をわたり、彼寺に行きて一宿するに、夜に入り風ひやゝかに吹きたり。松風入レ琴といふことをおもひ出て、

松風の吹く音きけばよもすがらしらべことなるねこそかはらね　　北條氏康

北條氏康

天文十五年の秋小田原の北條左京太夫氏康むさし野小鷹狩の時葛西の浄興寺に一夜のやどりをとゞめられ松風入琴といへる和哥を題ぞ詠せらる
しるす
武蔵野紀行に見えたり

松風の
吹こゑきけ

中興は増蓮社頓譽上人源淸和尙と號す。本尊は阿彌陀如來なり。

山に屬す。鎌倉光明寺の開山記主禪師良忠、當寺を草創す。

東土産

成人安房の淸澄を一見せよかしとさそひしに、いづこかさして思ふ世なれば、立かへりて、江戸の館の御もとに一宿して、角田川の河舟にて、下總國葛西の府のうちを、半日ばかり、よしあしをしのぐ折しも、霜枯は難波の浦にかよひて、かくれて住みし里々みえたり。鶯鴨みやこどり、堀江のこゝちして、今井といふ津より下りて、淨土門の寺淨興寺にて、迎へ馬人待つ程にすめるに、住持出でてものがたりの席に、發句所望ありしを、とかくすれば程ふるに、立ちながら、

今井
淨興寺
琴彈松
宗長

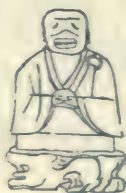
今井の津頭
柴屋軒宗長か永正六
年の紀行東土産に
隅田川の河舟にて
葛西の府のうち
を半日ばかり
下て浄土門の寺
浄興寺に立よりて
とあれはむかしより
此津の

二之江
妙勝寺

二の江より今井舟堀辺のあたりに産する海苔を世に葛西海苔と称す本草に所謂紫菜の類にして浅草海苔と異なり

東一之江
妙音寺

前池の中嶋にありて、寺記に、寶治元年丁未勸請すと云ふ。

賓頭盧尊者像　堂中に安置す。寺僧傳へて、佛工春日の作なりといへり。高さ一尺ばかりあり、荒木造りにして、其容貌甚異相なり。

本覺山妙勝寺　西二ノ江村古川の通りにあり。日蓮宗にして、中山の一䑓寺、葛西の觸頭なり。弘安年間、（或は德治二年丁未開創とも云ふ。）日尙上人の草創にして、宗祖大士の像は、日祐上人の作なり。

日祐上人は中山の第三祖なり。延元年間宗法盛なりし頃、一夜宗祖上人微妙の音聲にて讀經ましますと夢見、覺めて後自ら夢中感得の影像を摸造して、開眼供養し、日尙上人に附屬あり。則ち臺坐に其旨趣を註し置ける、此故に世俗讀經の高祖大士と稱せり。夫より後は、修飾を加ふる毎に中山に告ぐる事、今猶しかりといふ。中山累世貫主より贈らるゝ所の證状數通あり。

水神宮　日尙上人は當寺開創の主にして、平氏の末裔なりと云ふ。いかなる故にや、洞舟にて流され、其舟こゝの堀江の浦に漂着せり、此浦の漁人五郎何某たるもの、助け出して、其生來を聞きて、自ら漁家何某がもとに遷して、かしこに養ひまゐらす。遂に中山の日高上人を拜して、弟子の禮をまうけ、出家得度す。依て此地妙見山の傍に草菴をいとなみ、廣宣流布の志願なり。此水神宮は、日尙上人初め洞舟に乘じ、此海上に漂蕩ありし頃、深く水神に祈誓して、波浪の難を遁れし報恩のため、此本尊を彫刻し、日高上人の點眼を乞うて後、不退に一乘の法味をたてまつられしとなり。

龍燈山淨興寺　清泰院と號す。上今井村渡口より、二丁ばかり西北にあり。淨土宗にして、緣

眞光山善通寺　逆井渡口より、八九町東の方、東小松川村にあり。一向宗西本願寺に屬せり。本尊阿彌陀如來は、來迎の像なり。相傳ふ、往古千葉介太郎宗胤の守本尊にして、宗胤沒落の後、其家臣秋元刑部左衞門尉胤次と云ふ者、是を傳へて、歲月を歷たり。其後親鸞上人、胤次が家に止宿せられし頃、胤次上人の宗化に歸し、一室を營み、此本尊を安ず。然るに永正年間、兵火に罹りて、堂宇悉く焦土となりしかど、本尊は持退きて恙なしとなり。天下承平の時に至り、終に一宇を闢きて善通寺と號くといへり。秋元刑部左衞門の子孫、今も此村の中に四十有餘軒存して　いづれも當寺の門徒たりといふ。

阿彌陀如來畫像一幅　中將姬製する所といへり。惣地は藕（ハチス）の絲にして、御首のあたりは自らの毛髮をもて織りなすといへり。每年四月八日より同十日迄、此像を掛けて諸人に拜せしむ。往古難に逢ふといへども、威靈の事ありて失はずとなり。

十字名號一幅　親鸞上人の眞筆なり。昔上人胤次が家に宿り給ひし夜、此尊號を書きて與へられしとなり。今も傳へて當時に有り。

醫王山妙音寺　東一ノ江村にあり。眞言宗にして建久元年、秀榮上人開創する所の精舍なり。阿彌陀如來を本尊とす。當寺に安置の藥師如來は、立像にして、佛工春日の彫造なりと云傳ふ。往古館野安房守某なる人の念持佛にして、靈威の尊像なりと云ふ。辨財天の宮は、堂

葛西六郎墳墓
葛西上千葉村
普賢寺境内
にあり

りなり。土人相傳へて、石根地中に入る事其際をしらずといへり。石質弱にして、其色世間に稱する鞍馬石に似たり。此石、寒氣を帶ぶれば、こゝかしこ缺け損ず、されども春暖の氣を得る時は、又元の如しと云り。古は此石によりて近郷四五箇村の名とせしが、分郷となりしより後は、此村のみを立石とよべりとぞ。

熊野權現祠 同境内艮の隅にあり、今舊地を失ふ故に、鎭座の年歷等を詳にせずといふ。神躰は一箇の靈石にして、長二尺八寸ばかり、圍み本にて二尺ばかり、末にて六寸あまり、其形傘をつぼめたるがごとし。其餘武州練馬の石神井村石神井社、及び多摩郡阿佐ヶ谷神明等の神體の靈石、何れも其形相似たり。

按ずるに、神書に皇孫の降り給ふ時、諸部の神の佩かせる頭槌劍〔カウツチノツルギ〕などいへる事あり、此類ひのものならん。尤も天工のものにして、世に石劍と稱するもの是なり。

日照山普賢寺 上千葉村にあり。新義眞言宗にして、本尊藥師如來は、佛工春日の作なり。弘安年間、法空阿闍梨開基す。往古は寺院巍々として廣大なり。此邊に普賢寺村と號する地名あるも、當寺食邑の舊跡なる故にしかよべりとなり。境内に葛西六郎といへる人の墳墓あり。

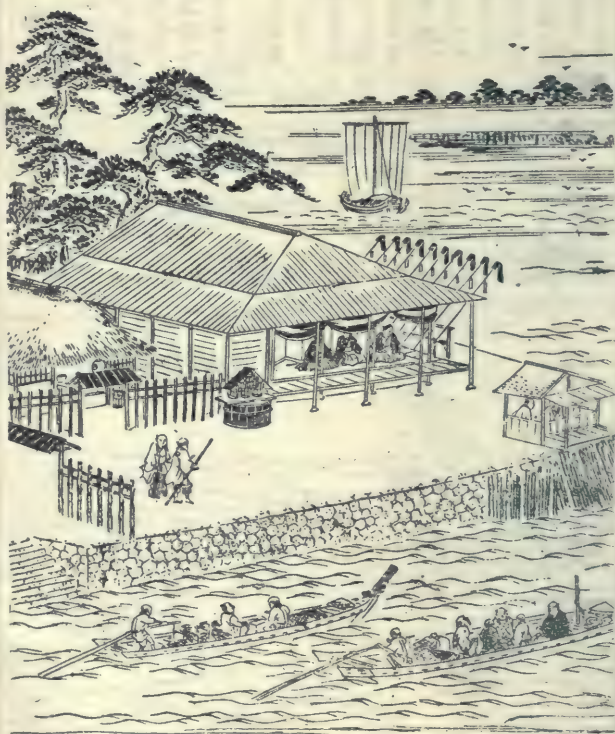
按ずるに、葛西三郎淸重の氏族なるべし。「東鑑に、建曆三年癸酉五月三日、和田左衞門尉義盛兵を起して、將軍家及び執權義時の亭をかこむといへる條下に、葛西六郎といへる名を出して、武藏國の住人と註せり、恐らくは此人ならん歟。當時過去帳に、建久元年三月廿日、葛西六郎常則卒す、榮照院常山大居士とあり。當世の法號の如し。尤も不審少なからず。

立石村
立石

立石
南蔵院
熊野祠
中川

平井
聖天宮

中川釣鱚

中川口

大願の衆徒は、甍を山中に竝べ、日夜の勤行怠慢なく、法燈月を越えて赫々たりしに、其後鬪爭國々に起り、天下大に亂れける頃、堂宇は破却し、寺領は沒收せられ、又は兵燹に罹りて焦土となり、殘り止る住僧もなく、唯本尊のみ草堂の中に在せしに、天正の末、四海昌平に歸し奉りし後、同十九年、住僧良完愁訴して、竟に藥師堂領の朱章を賜はりぬ。しかありしより已來、國家泰平の祈念怠る事なく、本尊の靈驗いよ〳〵著しとなり。

中川　隅田川と利根川の間に夾りて流るゝ故に、中川の號ありといへり。荒川の分流、熊谷の邊よりはじめて、遠く埼玉と足立との兩郡の合を流れ利根川の分流も、川俣よりはじまり、二水猿ヶ俣の邊にて合し、飯塚、大谷、龜有、新宿等の地に添ひて、青戸、奥戸、平井、木下川、及び小村井、逆井を經て海に入る。猿ヶ俣より末を中川と稱し、上を古利根川とよべり。往古水戸黄門光國卿水府入部の頃、此中川の水中にして一の壺を得たまひしより、年々宇治へ詰茶に登せられ、その器を中川と命ぜられたり。

中川やほふりこんでもおぼろ月　嵐雪

立石　立石村五方山南藏院といへる眞言宗の寺境にあり。地上へ顯れたる所、纔に壹尺ばか

に去れり、村里の道俗、天際を見送り、共に深信稽首す。其後慈覺大師、東國化導の時、武州に到り、暫く淺草寺の觀音堂に留り給ふ。一日白髪の翁來りて、大師に告げて云く、此所より東北に靈地あり、藥師の靈像を安ずと。いひ畢て後其行方を失ふ。大師東北を望むに、忽然として瑞雲起り、中に青龍現ず。依て奇異の思をなし、潛に寺を出でて、其元に至るに、果して藥師佛の靈像あり。此時村人等集り來り、前の唱翁が言を告げ、大師をして其人なりと稱し、終に合郡官吏、及び富民等、財を傾けて寺院を建立せんとす。則ち弟子慶寬に此地を附屬ありしかば、慶寬營構の志を勵し、貞觀二年の春に至り、諸堂落成す。こゝに於て、慈覺大師を開山と稱し、往古の瑞に因て、山を青龍と號す。朝廷其瑞應を聞き給ひ、田園百畝を賜ひ、永く寺供に充つ。其後惠心僧都、二脇士、及び十二神將等の像を彫刻ありて、佛前に安ぜらる。又慶寬十二大願を表して、十二の衆徒を置き、十二院を合せて淨光寺と號くるとなり。

當時は草創より己降、九百四十有餘年を經たる古刹にして、本尊は光を一天に耀し、十二

浄光寺縁起に詳なり

木下川薬師如来の

淨光寺二十一世住持沙門　義　純　謹　書

本尊縁起に曰く、延暦年間、傳教大師、東國化益の爲、叡山に於て藥師佛を彫刻す。漸く半なる頃、一夜此尊像、大師の夢に告げて曰く、汝が念ふ所の如く、我東國の衆生を利益せんとす、明旦便あり、我正に行くべしと。大師驚き夢覺ぬ。然るに明旦、下野國大慈寺の廣智、其頃叡山にありしが、此日歸らんとし、先大師に別を告げんと來り謁す。こゝに於て、大師佛意を悟り、靈夢の瑞を語り、竟に其像腰を彫刻せずして、錦綉をもて是を纏ひ、廣智に附屬す。（此故に今佛體僅に半より上を拜するのみ。）廣智諾して、佛像を背負奉り、東に還り、武州に到る。（今の木下川の地これなり。）時に偶然として一の老翁に逢へり。（其名を唱翁と呼ぶ、姓氏詳ならず、今白髭明神とす。）翁欣然として云く、我靈像の到るを待つ事久し、よろしく我草庵に安ずべしと云々。智喜んで彼像を翁に附し、又此地に伽藍を建てん事を告ぐ、翁云く時縁いまだ熟せず、汝且還り去れ。依て廣智も此事を思ひ止り、郷里に歸る。爾後翁村民に語げて云く、後善知識ありて、必ずこゝに來り、練若を營まん、我今西州に行く事あり、若歸り來る事遲からんには、此語を傳へよと。云畢り、空を凌ぎて西

慶寛曰。我以此山附汝。勵志營構。爲鎭護之靈區。顯密之敎場。汝其勗乎。遂歸去。自此寛盡心於造營。至貞觀二年三月。本堂並釋迦堂。彌陀堂。講堂。鐘樓造營畢成。如其志焉。貞觀十二庚寅年。寛出佛像。徧視道俗。有一盲人。積年目冥。直視忽然明淨。近國遠境奔起堂所。日有數萬。佛像高出。見者不同。或見綠色。見赤色。見五色雜光。或見小佛像。或見大佛像。或菩薩聖僧。或有全不見者。問其本末。爲一生來多造重罪。有善友人敎使徹到懺悔。或燒頭煉指刺血灑地。殷重至誠。遂得見之。種種不同。不可備錄乎。朝廷聞其瑞應。賜田數百畝。永充寺供焉。其後源信僧都。自刻二脇士及十二神將。遙獻佛前。今之二菩薩十二神是也。寛表十二大願。置十二之衆徒。合一十二院。名曰淨光寺。實是鎭護國家之道場也。而舊無叙紀。時遷世變。慮其忘本。敢綴其實以告來哲。

嘉曆二年夏六月十五日

師向瑞雲告青龍曰。吾有一言。神龍聞之。吾欲建寺於此。神龍能加護之。莫令不祥。自今以神龍爲護伽藍神。青龍不動。垂頭而聞言。已龍形隱。覺大師爲吉徵。卽名山以青龍。至今時々有龍燈奇瑞者。其此謂乎。其夜宿草庵。漸至淸旦。里人數輩。捧珍膳而至。問其故。對曰。今夜夢或人告曰。貴人寓草庵。子等盍餉焉。故我等獻供耳。覺大師告村人曰。我欲建寺於此。汝等合力營之。此地伐木芟荆。新爲靈場。則不亦宜乎。村人等言。是我之願也。師能企造營。我等誓努力。村人亦語唱翁之事曰。翁聖者也。翁欲去告衆曰。後時有善知識。來而建寺於此。聖語不虛。師其人也。於此合郡官吏及富民等。傾財戮力。于時庵中有尺餘靈木。時時放光。覺大師思必靈材。自刻不動明王像。今堂西不動院之像是也。此時覺大師。或時在淺草寺。或時當寺居。既而告村人曰。堂宇未成。雖然吾志在弘通。所期未果。不得久停。明日當去。他日再來耳。又告弟子

我欲一見老翁之居處。所以然者。我奉持佛像者。正是生身佛也。豈輕附之耶。於是乎翁與智及從者。東入荒原。行數里。至則下總國郡今之地也。四望瞻眺。唯見茂草曠野。曾無人家。唯有一草庵。于時此地震動。紫雲降垂。瑞花紛亂。奇香薰郁。智喜而附像於翁。而智問曰。我此地思建伽藍如何。答曰。時緣未熟。汝且還去。於是智止息而還。爾後翁語村民曰。過日吾已得安靈像。自今汝等若能至心歸請。必有感應也。我有西州之行。未果。汝等暫合心護此。此地亦好建練若。後時有善知識。必來此營練若。吾若遲歸。傳吾語。語畢淩空而西去。村里道俗。目送天際。追共深信稽首。自是靈感溢傳。被現益者多矣。其後慈覺大師。東方行化之時。暫留淺草寺。一日有白髮翁來曰。東北有靈地。吾安置靈像。彼像傳敎大師所造也。言已形隱。慈覺大師便出臨東北。忽然起瑞雲。青龍現雲中。覺大師潛出寺尋青龍。到庵所拜佛像。而青龍猶現在。覺大

念彫刻一佛像當化益東國以故再刻藥師佛像。今青龍山之本尊是也。大師彫刻之日。佛像已成。但未琢彫像腰。其夜大師夢所刻佛像告曰。如汝所念。我欲利益東國之衆生。明旦有便我當行也。大師俄覺。時四更也。便起拜像。感歎恭敬。大師曰。像已靈異。不煩復彫。乃止。因之自以錦綉纏像腰。見今不拜像腰者蓋由之也。而大師不知便。到天明。此時下野國大慈寺。有釋廣智者。來在叡山。至是日欲還野州告別耳。大師默然而知佛意。附於廣智而語夢事。智感喜而問曰。然則生身佛也。不知安何處耶。大師對曰。信知佛意非凡所測。只東州自有靈應之地也。汝夫隨佛意。智曰諾。謹隨佛意。因負東還到武州。偶然逢一老翁。其名唱翁。不知其姓。字是何常唱佛名。居在葛飾郡木下川野。年可九十。鬚髮白如雪。容貌麤素。而氣象超凡。相見欣然傾慰。唱翁曰。我待像者久矣。汝所負佛像。當安我草庵。智思謂。此翁容儀必非常人。故對曰。願

東照大權現宮神影　往昔慈眼大師曰く、神祖は御本地藥師如來なり、當寺も又如來靈應の地たり、我幸に奉侍する所の畫影を寄附すべしとて、親ら點眼供養したてまつり、神像の上に自筆をとり、題して曰く、

歸命滿月海　淨名瑠璃光　法樂救人天

因中十二願

東照大權現　三國傳燈

山門執行探題　天海開眼

かくの如く讃を添へたまひ、其時の住僧宗に附屬あり。今猶傳へて當寺に安置し奉る。毎歳四月十七日、本堂の内に懸けまゐらせ、諸人をして敬拜せしむ。

本尊藥師如來緣起　一卷　其文左の如し。

青龍山藥師佛像緣起

原夫佛像者。優塡王慕佛而刻像初焉。伽藍者。須達布金祇園始焉。爾來佛像伽藍徧滿三千之界。利益無量之生也。肆下總國葛飾郡青龍山淨光寺藥師佛像者。傳教大師所造也。初延曆七年。於叡山創一乘止觀院。自刻等身藥師佛像安置之。今中堂之本尊是也。其後大師思。

木下川藥師堂

古製山葵擦 此地の農民茂右衛門といへるもの、是を持傳ふ、賞すべきものにもあらざれど、たゞ上古質朴の風俗をおもひやるに足れり。依て其圖をこゝに擧ぐるのみ。土人此器を青砥左衛門が工夫に出でたりと云ひ傳ふれども、其可否は論ずるにらず。今も野州邊の農家是を用ふるものあり。其圖左のごとし。

全形圖のごとく、杉をもつて製す。〻の厚きを鋸の歯のごとくにして、夫を横の板へ切りはめ、横板の上より、同じく竹の縁を打付けて、動かぬやうにしたる物なり。或人の説に、菖蒲草に、△△△かくのごとき紋あるを、俗にわさびおろしといふも、此器の形を借りていひ出せしならんと。是しからん歟。又下に圖する物も、其製大方同じうして、形すこしく異なり。

木下川藥師堂

木下川村にあり。土人キネ川と唱ふ、或は杵川とし、又鍋毛川に作る。小田原北條家の所領役帳に、朝倉平次郎といへる人の内此地名あり、文字木毛川に作る。青龍山淨光寺藥王院と號す。天台宗にして、東叡山に屬せり。

本堂 本尊藥師如來 傳教大師の作、脇士日月十二神將の像は、惠心僧都の彫造なり。

白髭明神祠 堂前左の方にあり、廣智逢ひ給ふ所の唱翁をまつる。來由は本尊緣起の條下詳なり。本地不動明王の像は、慈覺大師の作、垂迹の姿は、老翁の木像にして、荒木作り、尤も異相なり。

天照大神宮 神體は雨寶童子にして、本地彌陀如來の像は惠心僧都の作なり。

山王權現宮 神體は一塊の靈石にして、本地は藥師如來なり。むかし兵亂の頃紛失したりとて、今はなしといへり。共に合せて一社とす。此三神は、往古より此地の鎭守なりといへり。

辨財天祠 大門の内右の方、池の中島にあり、護伽藍神と稱す。往古慈覺大師淺草寺の觀音へ參籠の時、瑞雲青龍東方に現じて、この靈地を示しける、因て青龍を鎭れり。神體なき故に、昔當寺の住僧某、傳教大師の作の塑像を安置すといへり。

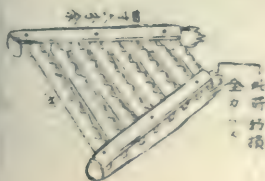
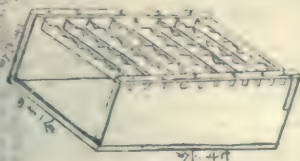
熊野權現祠 同大門の前にあり、昔千葉介常胤、權現の神告を蒙り、子孫長久の禱の爲此地に勸請し、印子「インス」にて彌陀佛及び正觀世音、十一面觀世音等の三尊を鑄冶し奉り、神體となせしが、そのかみ總州兵亂のとき散失したりとなり。遙の後、彌陀の像は此地の土中より掘出したりとて、今本堂に安ず。

青砥左衛門尉藤綱第宅舊跡　青戸村にあり。

土人云く、昔は青砥に作る、後世改めて青戸とすと。永祿二年小田原北條家の所領役帳に、遠山丹波守所領の內に、葛西青戸の號を註せり。今割りて二村とし西青戸、表青戸と唱ふ。

土人城址又御殿跡とも稱す。今なほ四方五六拾歩の所除地にして、老杉矯々たる中に小祠あり。此村農人の中に、郭の誰、陣屋の何某など、字に唱ふるありて、皆其時世より、呼來れるといへり。

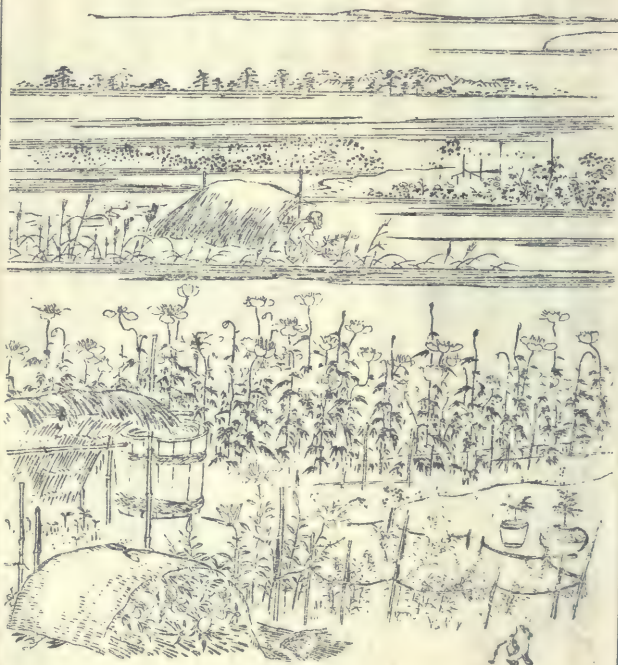
按ずるに、北條九代記、および太平記等の書に、青砥左衛門は伊豆國の住人大場十郎近郷（チカサト）の後裔にして、近郷承久の亂に宇治の手に向ひ、大いに勳功ありければ、其賞として、上總國青砥の莊を賜はり、是より相續して藤綱にいたる、藤綱は藤滿の妾腹に生れて、末子なりと云々。しかるときは、青砥莊は上總國なる歟。されど上總國畔蒜郡臼井の郷中村國香といへる人のあらはせし房總志料といへる書に、上總國青砥莊といふ事東鑑に見ゆれども、其地未だ考へずとありて、定かならず。此地を青戸と唱へ來るも、既に久しうして、藤綱がやしき跡と稱する地など、現然と殘りてあれば、其是非はしらずといへども、しばらくいひ傳ふるにまかせて是を記し加ふ。

澁江
西光寺
清重稻荷

超越山西光寺　澁江村にあり。（小田原北條家の古文書に、山中内匠介所領に、澁江の地名を註し加へたり。）往古は淨土宗の寺院にして、葛西三郎淸重（從五位下壹岐守豐島權頭淸光の子なり。）開基たりしが、今天台宗に改む。本尊は親鸞上人親筆の阿彌陀如來の畫像を安ず。當寺の開基淸重は、鎌倉代々勤仕の士にて、文治五年、奧州泰衡平治の後、同年九月、彼地の奉行職に任ぜられ、實朝卿、鶴岡八幡宮拜賀の頃も、隨兵に加へ給ふ。代代此地に住す。親鸞上人、東國遊化の時、此地に至り、淸重の宅に投宿あり。其時上人の弘法に歸依し、弟子の禮を備け、名を西光坊と號す。又居宅の地を轉じて、寺院を營建し、直に西光院と號く。本尊の脇壇に、淸重彫造する所の聖德太子の木像を安置せり。

按ずるに、東鑑に、治承四年庚子十一月十日戊午、常陸國佐竹太郎義政、同冠者秀義を征伐して凱陣し、鎌倉に歸り給ふ條下に、武藏國丸子莊を以て葛西三郎淸重に賜ふ、今夜彼宅に御止宿あり、淸重妻女をして御膳を備へしむ、但し其實を申さず、御給仕の爲、他所より靑女を招くの由言上すとあるも、此地にての事なるべし。

淸重稻荷祠　西光寺の西の畑の中にあり。松杉生ひしげりたる古叢にして、此所は葛西三郎淸重の墳墓の地といふ。今稻荷に勸請す。（往し年の洪水に、此塚崩れて、土中より石櫃あらはれ出でければ、土人蓋を開きみしに、蓋の裡に梵字蓮花、および淸重の名をも彫付けてありしとなり。其時櫃の中より丈三尺五寸あまりの彌陀の木像出でたりとなり。其胸中に鐵佛あり、丈二寸八分ばかりの坐像なり、今西光寺に收む、其餘武具のたぐひも出でたりといへり。）

年己酉秋七月、右大將賴朝卿、奥州泰衡征伐として發向あるにより、同十八日、伊豆國より、專光坊の阿闍梨を召して、潛に泰衡征伐の立願の旨を告げられ、同十九日、途出あり。其勢僅に一千餘騎なり。東鑑に、十九日丁丑、二品奥州發向の條下に、供奉の輩一百四十四人の名を註せり。夫より途中、近國他國の軍兵、招かずして走せ加はる。其時此地をよぎり給ふ序、潛に當社に參詣ありて、源家繁昌武運長久の祈念あり。今の四木迄の道路は、昔の奥州街道なりと云ふ。又手自榎の策を、逆に地に指し、誓つて云く、此度の軍利あらば、枝根を生じて榮ゆべしとなり。其榎は枯たりとて、今は存せず。竟に奥州を治めて凱陣ありければ、其後鶴岡若宮八幡宮を勸請す。此地は葛西三郎清重の領地たるにより、清重に命じて社頭を經營せしめ、又神田等を寄附せらる。其後年代遠く隔りければ、瘴霧は軒を侵し、淫雨は扉を洗ひ、春草年々に生じ、秋の蔦月々に茂り、瑞籬は崩れ、神階朽ちて、破壞におよびしを、天正の後、台命により、伊奈備前守再興ありしより、重ねて朱の玉籬光を彰はしけるが、夫も又昔となり、今は古松老杉矯々として、寥々たる社頭となれり。

法華經一部一巻　其丈高く二寸ばかりありて、巻たる圍わづかに指渡し八九分に過ぎず、紺紙にして、金泥をもて謹書せる物なり。書體甚だ奇古なり。寺僧の説に、賴朝卿の奉納なりといひつたふ。筆者は文覺なりといへども、是非をしらず。

按ずるに、鐘ケ淵と云くる地、同じ川上岩淵の五德殿といへる所にもありしとぞ。往昔、普門院は隅田河三俣の城中にありしを、元和二年住持榮眞地をトして寺を今の龜戸村に移せり、其頃あやまつて華鯨を水中に投ずと。土俗傳へて橋場法源寺の鐘とするものは誤に似たり。

牛田藥師堂 木母寺より三四丁北の方、牛田村にあり。眞言宗にして、千葉山西光院と號く。德治二年丁未、當國の領主千葉氏の草創、開山を覺音法印といふ。本尊瑠璃光如來は、弘法大師の作にして、千葉介常胤崇尊の靈像なりと云傳へて、靈驗著し。石出氏吉深、および其子常英等殊に尊信し、しば〳〵靈驗を得たりといふ。相傳ふ、千葉介常胤の遠裔に、同五郞胤朝といへる者あり。下總國香取郡石出といへる地に居住し、石出日向守と唱ふ。此牛田村は胤朝別業の地なり。永和三年入道して宏明と號し、こゝに隱栖す。其末流淡雪入道吉深に至りて、此牛田村に遁れ住み、竟に莊園の地を轉じて梵宇とし、西光院と號くといふ。吉深始小田原北條家に仕ふ、後泰も御當家の召に應じて食祿三百石を賜ひ、斷獄令の官士に命ぜらる。其性質仁厚く才大にして、もとより國朝の學を好み、和歌をよくす、延寶中牛田村に隱栖し、常軒と號く、和歌あり、云く、

事たらぬ身とはおもはじ柴の戸に月もありけり花もありけり　常軒

江戸鹿子といへる冊子、および江戸圖鑑等に、歌學者牛嶋常軒とあり。又連歌師の中にも註し加へたり。この人源氏物語の注解七十餘巻をあらはす、名づけて覡原抄といふ。元祿二年己巳春三月、享年七十五にして卒す、葬を淺草の善慶寺にいとなむ。同四年辛未、其子師深慈父の功を顧みて其行實を記し、當寺の境内に石碑を建て、後世に其德をあらはせり。

若宮八幡宮 若宮村にあり。別當は眞言宗にして、善福寺と號す。社傳に云ふ、往古文治五

其三
関屋天満宮

大木桜
光俊
其二

牛田
藥師堂
關屋里
隅田川上流
其

鐘の潭
卅鳥の池
綾瀬川
隅田川両岸

我ためはむすびもおかぬ庵崎の隅田河原に宿やからまし　尙長

建保名所百首

今宵また誰が宿からんいほさきのすみだ河原の秋の月影　順德院

關屋里 牛田の邊をいふ。澄月歌枕には、武藏國に入れたり。

庵崎のすみだ河原に日はくれぬ關屋の里に宿やからまし

この歌は、家集にいふ、康元元年九月、鹿嶋の社にまうでけるに、隅田川のわたりにて、此渡の上の方に、河の端につきて里のあるをたづねければ、關屋の里とまうす、前には海船もおほく泊りたりと云々。

聖護院の宮關東御下向の時、此地に逍遙し給ひて、

かへるさの道に關屋の里もあれな隅田河原のあかぬながめに　道晃親王

鐘ケ淵 同所隅田河、荒川、綾瀨川の三俣の所をさして名づく。小田原北條家の所領役帳に、千葉殿とある所領の中に、下足立、三俣といへる地名を加へたり。按ずるに、此地の事なるべし。傳へ云ふ、昔普門院といへる寺の鯨鐘、此潭に沈沒せりとも。又橋場長昌寺の鐘なりともいひて、今兩寺に存する所の新鑄の鐘の銘にも、此事を載げたり。何か是ならん。

此趣謡曲の隅田川にいへる所と、木母寺縁起の意に相似たり。また先に記せし回國雜記等の書にも古塚とあり。回國雜記は文明十八年の記行にして、寛政の今よりは凡三百十餘年を隔てたる昔なり。其頃さへ古塚と唱へたりしなれば、其傳說のさだかならぬもむべなり。

内川　木母寺の後の方の小川をいふ。或人の說に、往古荒川、綾瀬川千股に流れし時の古址なりといへり。

御前栽畑　同所内川を隔てて、北の方の出洲をいへり。作松の木立ありて、頗る美景なり。

丹頂池　同所堤の下にあり。池の中に小島を築く。往古台命によりて、此池の中島に、丹頂の鶴を放ち飼しめ給ひしとなり。故に名とせりとぞ。

庵崎　木母寺の北の方とも、又は請地村秋葉權現の邊なりともいへり。澄月歌枕に、武藏國に加へ、夫木抄、藻鹽草等に、下總國に入たり。同名駿河にもあり。紫の一本といへる册子に、小梅村の出崎を庵崎と云ふ人あり、是も慥ならずと。云々。又同書に、昔本所の地入海にて、洲崎殊に夥しくありし故に、五百崎に作りしといふ。然れども未考。

新後拾遺

を輿にかきのせて、大嶺の釋迦の嶽といふ所へぞかきもて行きにけり。されば門主大きに歎きたまひ、隈なくたづねもとめたまふ。しかありて律師の事しれたりければ、まづとて三條京極なりける父の大臣の許へ押寄せ、ひとつをも殘さず燒きはらふ。三井寺の衆徒、是にても猶いきどほり散ぜずといへども、山門へ押寄せんずる事はかなふべからず、しよせんこのついでをもつて、當寺に城郭をかまへ、三昧耶戒壇を建てば、山門の衆徒定めて寄らんずらんと、其かまへをなして待受けたりければ、山門よりも二十萬七千餘人にて亂入り、火をかけて燒拂ひぬ。其後梅若は龍神の助によりて都へ歸り來にけれど、花園も燒野の原となりて、問ふべき人もなし。三井寺に行きて門主の御事をも尋ねまうさんとて、ゆきて見たまへば、こゝも又殘らず燒拂はれて、かはりはてにければ、我故なりし災なればとあさましくて、石山にたどり行き、わらはして律師の許へふみつかはしつ、其ひまに瀬田の橋の下に身を投げて空しくなれりける。律師も童も、もろともに兒の身を投げぬる事を聞きて心あきれけれど、いそぎつゝやがてかしこに行きて尋ねけるに、くこの瀬と云ふ所にてなきがらを求め出しければ、律師は天にあふぎてなきかなしみしが、かくてしもあるべきならねば、其夜鳥邊野のけぶりとなしつ、遺骨を首にかけて、山林斗藪しけるが、後には西山岩倉に庵室をむすびてぞ、つとめ行ひける。童も髮をおろして、高野山にぞとぢこもりける。云々。又謠曲櫻川といふもこれに似たり。其畧に云ふ、後朱雀院の御宇、長暦年中筑紫潟に櫻子といへる美少年ありしが、人商人にかどはかされ、常陸國礒部明神の社僧神宮寺にみやづかへしてありけり。其母はかくともしらで、思ひ子の行衛を尋ねさまよひ、終に狂亂し、同じ彌生の頃、ゆくりなく常陸國櫻川に至り、岸花爛漫として藍水に漂ふさまを見て、此水中に我子ありと、流るゝ花をむすびあげ、なきつくどきつしければ、里人等其故を問ひ、おもひ合する事あればとて、彼狂女を神宮寺へ伴ひ行き、櫻子に逢せければ、うれしさのあまり、物ぐるひは忽にもとにふくし、絕えて久しき母子の對面、ともに淚もせきあへず、住僧もとより慈悲深かりければ、直さま櫻子に暇をとらせ、母子ともにつくしへかへされけり。(此事は東國戰記にみえたり)

按ずるに、梅若丸の事蹟は、先に擧げたる如く、秋夜長物語、及び謠曲の櫻川等に、彿相似たり。

梅花無盡藏詩註曰

隅田在㆓武藏下總兩國間㆒。路傍小塚有㆑柳。

又同書曰

河邊有㆓柳樹㆒。蓋吉田之子梅若丸墓所也。其母北白河人。云々。

人集りて佛名を稱へ、兒のなき跡をとむらひ侍りけるに、其日梅若丸の母君、同縁起に花御前とす。美濃國野上の長者の女なりとあり。或は云ふ、花子とも。後薙髮して妙亀尼となづく。第六卷淺茅が原の條下とあはせみるべし。兒の行くゑを尋ね侘び、みづから物狂き樣して、此隅田川に吟ひ來り、青柳の蔭に人の群居て稱名せるをあやしみ、舟人に其故を問聞て、其我子の塚なる事をしり、悲歎の涙にくれけるが、其夜は里人と共に稱名してありしに、其塚のかげより、梅若丸の姿髣髴として幻の容を現し、言葉をかはすかと思へば、春の夜の明易く、曙の霞と共に消えうせぬ。母君は夜あけて後、忠圓阿闍梨に見え、ありし事どもを告げて、此地に草堂を營み、阿闍梨をこゝに居らしめ、常行念佛の道場となして、兒の亡跡をぞ弔ひける。以上木母寺縁起の要を摘む。

秋夜長物語といへる草紙の趣、よく前の木母寺縁起に似たり。其畧に云く、後堀河院の御宇北嶺東塔の衆徒に、勸學院の宰相律師けいかいといふ道學兼備の師あり。(後西山の瞻西上人といふ)たま〳〵釋門に入りながら、名聞利養にのみかゝづらひて、出離の勤怠りぬるを淺ましとおもひ、此事成就せんいのりのため、石山に參籠したり。七日まんずる夜の夢に美少年をみて後心うかれ、ふたゝび石山にまうでぬる道にて、春雨の降りかゝりければ、聖護院の御坊の庭の門に佇みたりし時、夢にみしにたがはぬ美少年の、花折もてるを見出でたり。こはこの御坊に仕へて、三條京極の花園左大臣の子に梅若と云ひけるなり。けいかいおもひこがれ、終にかしこにつかふる童してかたらひより、一夜ばかりの契をむすびけるが、其後は戀慕の心いやまさりつゝ、伏ししづみてありけるをきゝ傳へ、梅若は律師のもとを尋ねんとし、わらはとともに坊をさまよひ出でたりしかど、行衞もしらであゆみなやみつ、童あまりのいたはしさに、あはれ天狗ばけものなりともわれらをとりて、ひえの山へのぼせよかしといひて、唐崎の松の木かげにやすらひたりしに、年いとたけたる山伏來りつ、兒と童

此和歌は、曼殊院關東へ下向ありし時、此地に遊び給ひし頃の詠なりといふ。眞蹟の短冊、今なほ木母寺に藏せり、名書旅人とのみあり。

縁起に云く、梅若丸は洛陽北白川吉田少將惟房卿の子なり。同じ縁起に惟房卿嗣なきを憂へ、日吉の御神に祈願ありて後儲られたりし兒なれば、春待得たる梅が枝に咲出でたりし一花のこゝちすればとて、梅若丸とはなづくるなりとぞ。五歲にして父に後れ、七歲の年、比叡の月林寺に入りて習學せり。又其頃、東門院といへるにも、松若丸といふ兒ありて、日頃才の程を挑み爭ひけれども、梅若丸にはおよばざりけり。さるを彼坊の法師原、口惜きことにおもひ、はては鬪爭の事出來にければ、梅若丸は潛に身を遁れて、北白川の家に歸らんとし、吟うて大津の浦に至る。頃は二月廿日あまりの夜なり。然るに陸奥の信夫藤太といへる人商人に出あひ、藤太が爲に欺れて、遠き東の方に下り、からうじて此隅田川に至る。時に貞元元年丙子三月十五日なり。路の程より病に罹り、此日終に此所に於て身まかりぬ。いまはの際に、和歌を詠ず。

　尋ねきてとはゞこたへよ都鳥すみだ河原の露と消ぬと。

此時出羽國羽黑の山に、下總坊忠圓阿闍梨とて、貴き聖ありけるが、適こゝに會し、土人と共に謀りて、兒の亡骸を、一堆の塚に築き、柳一株を植ゑて印とす。翌年の彌生十五日、里

梅若丸塚 木母寺の境内にあり。塚上に小祠あり。梅若丸の靈を祠りて。山王權現とす。（縁起に、梅若丸は山王權現の化現なりと云ふ。）後に柳を植ゑて、是を印の柳と號く。（昔の柳は枯れて、今若木を殖ゑそへたり。）例年三月十五日、忌日たる故に、大念佛興行あり。此日都下の貴賤群參せり。

回國雜記

かくてすみだ河の邊にいたりて、皆々歌よみて披講などして、いにしへの塚の姿、あはれさ今のごとくにおほえて、

古塚のかげゆく道のすみだ河ききわたりてもぬるる袖かな　道興准后

（中頃一條關白康道卿、關東下向のころ、此地に逍遙あり。）

來てみればうゑし柳のしるしのみ春風渡る隅田河原に　康道公

うき事を思ひ出でてや古塚に都のたよりまつ風の聲　近衞信尹公

（此詠は木母寺に藏する處の短冊の和歌なり。名書山城住人とあり。）

しるしにとうゑし柳も朽ちはててあはればかりはのこる古塚　良尚親王

增續韵府といへる書に、夷堅志を引て云く、

北朝。山濤字致遠赴レ召。宋神宗問曰。卿自二山路一來。自二驛路一來。濤曰。自二山路一來。上曰。木公木母如何。濤曰。木公方傲レ歲。木母正含レ春

注曰。木公松也。木母梅也。稱レ旨除二中書一云々。

木母寺緣起の跋に、湖海新聞を引いて梅を木母とする事を擧げたり。湖海新聞に出る文、上の夷堅志の意に同じ。又青木氏が著せる草廬雜談にも此事を載げたり。

古今集の歌に

雪ふれば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきてをらまし　　紀友則

千載集

春の夜は吹きまふ風のうつり香に木毎に梅とおもひけるかな　　崇德院御製

續古今集

年の内の雪を木毎の花とみて春を遲しと來ぬる鶯　　將家

かく連ねたるも、梅といふ文字をわかちたりし秀句なり。

隅田川東岸

木母寺
梅若塚
水神宮
若宮八幡
隅田川東岸

客、是を賞愛せり。其色白く嘴と足と赤くして、形狀の甚幽雅たるゆゑに、かくも命ぜしならん歟。

梅柳山木母寺　隅田村堤のもとにあり。隅田院と號す。天台宗にして、東叡山に屬す。本尊は五智如來なり。中にも阿彌陀如來の像は、聖德太子の作なりと云傳ふ。貞元年間、忠圓阿闍梨當寺を草創す。天正十八年台命あり、依て梅柳山と號す。昔は梅若寺と呼びたりしを、慶長十二年、近衞關白信尹公、武藏國に下り給ひし時、隅田河逍遙のゆくてに、當寺へ立寄らせられ、寺號を改むべきはいかにとありしに、寺僧應諾す。依て木母寺の號を賜ひぬ。其時、翰墨を濡ぎ給ひて、木母寺と書されし眞蹟、今猶傳へて當寺第一の什寶とす。事蹟合考に云く、大虛庵光悅の筆の木母寺とある額もこれありと記せり。慶安以後、官府より寺料若干を附せられ、朱章を賜ふ。又寛文の始、大樹此地に御遊獵の砌、當寺を御建立ありて、新殿など造らせ給ひぬ。

按ずるに、木母は梅の分字ならん。されど梅は毎に從ひ母にあらず。母にしたふものは本朝の俗字にして、止賀〔トガ〕と訓ず。西齋詩話に、幸得梅山信賞日本茶と作りしは、山城國なる栂尾に茶を賞美せしなり。栂は中華にはなき文字なれば、梅の誤字にやなどおもひはかりて、かく梅山とはせしなるべし。又護鐵集に云く、東山の僧雪村、諱は友梅と云ひしが、栂尾にまうで、この山の名は我諱の文字なりと云々。是も頗る據とすべき歟。爾雅に梅は枏なりと。また史記に、江南枏梓を出すとあるも梅の事にして、丹と母と字形頗る似たれば、丹を誤りて母に作るものならん。然れども木母をもつて梅とする事、又據所あり。因て左に擧ぐ。

ければ、是なむみやこどり、といふをきゝて、

名にしおはばいざことゝはむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、舟こぞりてなきにけり。

冥搜翁に都鳥の事を問ふ人ありて云ふ、古今集には、川の邊にあそびけりとありて、ことわり明けし、伊勢物語には、水のうへにあそびてといへば、足はみえじやと。翁こたへていふ、此鳥は鷗にて、むれつゝあそぶ故に、飛び立つも、邊に在るもあるべければ、この問は顔なし、これはおもめなるをしらせんとてや、詞を添へつらん云々。

廻國雜記

かくて隅田川のほとりにいたりて、中略猶ゆき〳〵て川上にいたりはべりて、都鳥尋ねみむと、人々さそひけるほどに、まかりてよめる。

ことゝはむ鳥だにみえよ隅田河都戀しとおもふ夕に　道興准后

おもふ人なき身なれどもすみだ河名もむつまじき都鳥かな　同

都鳥は所々にあれども、在五中將の詠によりて、專此隅田河の景物とす。故に世々の詩人吟

隅田河のみやこどりを賞愛せし事、古今相同じ。又丙辰記行に、都鳥は角田河のものなれば、好事の人とりて家に飼ひてはべるをみるにまことに嘴と脚と赤き鴫の大きさなり、この鳥蛤を好みてよく食ひけるなりと云々。
按ずるに、都鳥は鷗の一名にして、白鷗なる事決せり。羽の灰色なるもあれど、脊も腹も白きに、兩羽のつゞき少し黑きもの多し。或人云ふ、此物に大小の二種ありて、大なるは鴨の如く、小さなるは鳩の如しと。又或人云ふ、關東の海濱にありて、形大なるもの、其聲猫に似たり、故に俗呼んで濱猫といふ、則ち食料とす、この河に居るものは小鷗なり、常は海上にありて、風荒たる時は、波の靜かなるを求め來りて、こゝに泛び遊べりとぞ。其餘所々にあれども、其地によりて種々の方言ありて名を異にせり。

伊勢物語

なほゆき／＼て、武藏國としもふさの國とのなかに、いとおほきなる河あり、それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれゐて、おもひやれば、限なくとほくも來にけるかなとわびあへるに、渡守、はや舟にのれ、日も暮れなむといふに、のりて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京におもふ人なきにしもあらず。然るをりしも、白き鳥の、嘴と脚と赤き、鴫の大さなる、水の上にあそびつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人えしらず、渡守に問ひ

た菫菜、碎米菜盛りの頃は、地上に花氈を敷くが如く、一時の壯觀たり。

隅田宿 何れの地をいふにや、今しるべからす。往古の奧州街道の驛舍なるべし。東鑑に、治承四年庚子十月二日、賴朝卿、太井、隅田の兩河を渡らるゝといふ條下に、今日武衞の御乳母、故八田武者宗綱が息女、（小山下野大掾政光が妻なり、寒河の尼となづく、）鍾愛の末子を相具して、隅田宿に參向す。則ち御前に召して、往事を談らしめ給ふと。云々。

按ずるに、今木母寺より東北の方にある所の河流をさして、土人古隅田川と唱ふ。隅田宿といふもまたこの邊ならん歟。

都鳥 舊本伊勢物語に京鳥。藻鹽草城鳥に作る。眞淵翁云く、古本に鴭（ミヤコドリ）とあるは、草書より誤れるならんと。八雲御抄、藻鹽草等に、都鳥隅田河ならでも京近き河にもありとしるされたり。されば鳴海潟、越の海、志賀浦、飾磨（シカマ）および難波堀江、高津宮、輪田御崎等によみあはせはべり。又和泉式部が家集にも、和泉に下りはべりけるに都鳥のはのけに鳴きけれとあり。又古今著聞集に、院の御隨身秦の賴方、みやこどりを或殿上人に奉らせたるを、成季にあづけられてはべり、食物などもしらで、よろづの蟲をくはせはべるも所せくおぼえて、小田河美作丞平がもとへやりて飼はせはべりしを、建長六年十二月二十日、前相國の富小路の亭に行幸ありし次の日、相國みやこどりをめして叡覽に備へけるとき、おとゞ女房にかはりて、

すみだ河すむとしききしみやこどりけふは雲井のうへにみるかな

前三河守卜部兼直もおなじ和歌を上る、

なごりなき御代におひみるすみだ河すみける鳥の名をたづねつつ

隅田川堤春景

隅田川渡
隅田川東岸

井隅田兩河。精兵及三萬餘騎。赴武藏國。豐嶋權守淸光。葛西三郎淸重等最前參上。又足立右馬允遠元。兼日依受命爲御迎參向。云々。

北條九代記に、文治五年七月十九日、賴朝卿奥州泰衡追伐の首途し給ふと云ふ條下に、千葉介常胤、八田右衛門尉知家は、東海道の大將として、常陸、下總、兩國の勢を卒して、宇太、行方を經て、岩崎より隅田川の湊にて渡り逢ふ。下略

須田河原

隅田河原におなじ。

夫木集

はるぐとすだの河原を朝行けばかすめるほどや渡りなるらん　正三位季經

隅田河堤

深堀橋にはじまり、熊谷に至る、行程凡そ拾六里、是を熊谷堤と云ふ。天正二年、小田原北條氏、これを築きたりといへり。御當家にいたり、官府の命ありて、三圍稻荷の邊より、木母寺の際迄、堤の左右へ桃、櫻、柳の三樹を殖ゑさせられければ、二月の末より、彌生の末まで、紅紫翠白枝を交へ、さながら錦繡を晒すが如く、幽艶賞するに堪へたり。ま

すみだ河袖こそぬるれ限なく遠きむかしの浪のなごりに　戸田茂睡

此余諸卿家の詠草および諸名家の文藻等あまたあれども、枚擧にいとまあらざればこゝにもらせり。

前太平記に云く、前上總介平忠常、長元元年の春より、下總國にありて、謀叛を企て、竊に便宜の兵を招きければ、同年八月、京都より忠常追討の大將として、左衞門佐平直方、右兵衞佐中原成道等、朝撰に應じ、二萬三千餘騎にて發向す。忠常其身は千葉の城に楯籠り、舍弟陸奧權介忠頼を大將とし、其勢二萬餘騎を卒して、すみだがはの南に陣を取る。同十五日、官軍成道の舍弟伊勢介成俊、直方の子息阿多見四郎聖範、共に勢を合せて先登し、大に戰ふ故に、先陣の忠頼敗走す。されど忠常が殘兵一萬五千餘騎に駈立られ、官軍の後陣なりける直方も、成道の勢の落來るに推立られ、心ならず引返し、敗軍の兵卒を集めんとて、隅田河原に陣を取ると。云々。

東鑑曰

治承四年庚子十月二日辛巳、武衞相ニ乘于常胤廣常等之舟檝一。濟ニ太

また戯（たはむれ）に

來てみるにむさしの國の江戸からは北と東のすみだ河なり　同

詠草の末に慶長十二年とありて、花押をしるされたり。

隅田河こゝにけふこし都鳥ありしためしもとひてこそしれ　冷泉爲久卿

花鳥に霞むや千里すみだ河船とめてみる遠近のはな　同

初花もけふこそみつれめづらしきすみだ河原の春をとひきて　同

ゆたかなる世々をかさねてすみだ河廣き流の波もさわがず　葉室頼胤卿

聞きしにも越えてこそみれすみだ河汀の波も花ににほひて　同

筑波根の嶺吹きおろす春風にすみだ河原の花ぞほころぶ　冷泉爲村卿

此和歌はいづれも關東下向のとき、こゝに逍遥ありし頃の詠なり。

隅田河都のつとにまねぶとも言の葉たらじあかぬながめは　有栖川幸仁親王

此和歌もこの地に逍遥の頃の詠なるよし、むらさきの一本といへる書にみえたり。

當時業平遺愛地　　風流千歳至今傳

黄葉集

住田川にまかりけるに、木母寺の住持、あまた人の書きおける短冊の歌どもを取出し見せけるついでに、歌よみてかきつくべきよしまうしければ、

我もまた手にとる筆のすみだ河そめてあだなる名や流すべき　烏丸光廣卿

木母寺に藏する所の短冊の名書には、烏有子とあり。

名にしおふそのいにしへの都鳥今はとふにもありやなしやと　近衛信尹卿

同く短冊の名書は、山城住人とあり。

都鳥何こととはむふるさともわするばかりのけふの舟路に　照高院御門跡

同く懐紙のごとくなる奇き様にて、花押ばかりをしるされたり。

こたへせば我出でてこし都鳥とりあつめても事とはましを　近衛信尹卿

観音浅草といふところとなむ。たちよりて結縁すべしなどいへば、

秋ならぬ梢の花も浅草の露流れそふすみだ河かな　宗牧

梅花無盡藏

江上春望　註曰。道灌靜勝公。招福鹿兩山諸尊宿竝少年。浮船數艘於隅田河。詩歌鼓吹。一時之壯觀也。

十里行舟浪自花　春遊不覺在天涯
隅田鷗亦應都鳥　鼓吹晩來聲入霞

註曰。隅田在武藏下總兩國之間。路傍小塚有柳。道灌公爲攻下總之千葉。搆長橋三條。云々

隅田川即事　曼珠院二品良尙法親王

夏天波靜角田川　棹子蕩漿泛盡船

などして、中略やう〱歸るさに成りはべれば、夕の月所がらおもしろくて、舟をさしとめて、

秋の水すみだ河原にさすらひて舟こぞりても月をみるかな　道興准后

次の日淺草を立ちて、新羽といへる所に赴きはべる。下略

武藏野記行

やう〱すみだ河にもつきぬ。河面をみれば、まことに白き鳥の、嘴とあしとあかき鳥のむれゐて、魚を食ふありさま、むかしおもひいでて、

都鳥すみだ河原に舟はあれどただその人は名のみありはら　北條氏康

むかひは安房上總まのあたりにみわたさる。下略

東國記行

角田河も見え渡るに、森の樣なる梢あり。とへば關東順禮

北國記行

きさらぎのはじめ、鳥越の翁艤よそひして隅田河にうかびぬ、東岸は下總、西岸はむさし野につゞけり。利根、入間の二河落あへる所に、かの古きわたりあり。東のなぎさに幽村あり、西のなぎさに孤村あり。水面悠々として、兩岸にひとしく晩霞曲江に流れ、歸帆野草を走るかとおぼゆ。筑波蒼穹の東にあたり、富士碧落の西にありて、絶頂はたへに消え、裾野に夕日をおび朧月空にかゝり、扁雲行きつくして四域に山なし。

浪のうへの昔をとへば隅田河霞や白き鳥のなみだに　　堯恵

囘國雜記

かくて隅田河のほとりにいたりて、みな〳〵歌よみて披講

すみだ川ふるさと思ふ夕ぐれに泪をそふるみやこどりかな　俊成卿

同

限りなく遠く來にけりすみだ河こととふ鳥の名をしたひつつ　御製

新續古今

此世にはよしこととはじ隅田河すみえぬ方の鳥の名もうし　藤原隆祐

夫木抄

こととはむすみだ河原の時鳥昔の鳥のあとになくなり　後九條内大臣

家集

むさし野ははや行き過ぎて隅田河遠きわたりにみやこ戀ひつつ　爲家卿

新葉集羇旅

すみだ河のほとりにてよみはべりける

事とひていざさはこゝにすみだ河鳥の名聞くもみやこなりけり　文貞公

くおぼつかなき事もはべるべし。辨基法師が、亦打山夕越行〔マツチヤマユフコエユキ〕てと詠ぜしを、非蛙抄駿河とし、契沖阿闍梨は紀伊の國とす。同名大和にもあり。考ふるに、辨基が歌、うたがふらくは駿河の中へまぎれ入りたりしならん歟。萬葉集もとより勅撰のものにあらず、西山公の釋萬葉集にも、此書は勅撰の體にあらざるよしを論じ給へり。契沖阿闍梨の代匠記にも、隅田川の事をのべられたり。又同じ師の書き置かれたるものの中に、萬葉集の中、全同の和歌凡そ四十八首におよべりしは、いまだ草案のまゝにて、清書にも至らざりし故なるべしとあり。家持の歌は、家の集のまゝに入られたるをみても、私撰なる事を推知すべし。されど論ふ事を要とするにあらねば、たゞ其意をあぐるのみ。

古今　羇旅

名にしおはゞいざことゝはむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと　在原業平

新勅撰　羇旅

まつちやま夕越暮れて庵崎のすみだ河原にひとりかもねむ　辨基法師

同

我がおもふ人にみせばやもろともに角田河原のゆふぐれの雲　俊成卿

玉葉

事とへどこたへぬ月の隅田河都の友とみるかひもなし　後二條院權大納言典内侍

新拾遺

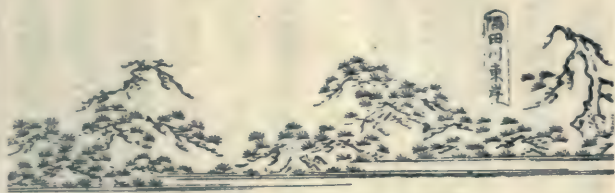
によりて、近江國志賀郡打下より、此地に勸請し給ふとなり。天正十九年に至り、神領を附し給ふ。

隅田河　萬葉集角太に作り、舊本伊勢物語墨田に作る。八雲御抄、東鑑等に、隅田とす。澄月歌枕、夫木抄、古今集并蛙抄等に、當國及び下總の國界とす。今は武藏國に屬せり。或說に、むかしはすだ川といひけると。又さらしなの日記にあすだ河とす。すみだ河諸國に同名多し。其事は次にいだせり。

源は信州、甲州、及び上野等の國々の山谷より發し、武州秩父郡の諸流に合して、是を中津川といふ。此間をにへ川、あかひら川、浦山川など名づく。榛澤、男衾二郡の界を東流し、大里郡の中、熊谷に至り分流す。是を荒川といふ。一流は横見、比企、入間、新坐、此地に至りて入間川も落會へり。足立等の五郡に亙り、豐島、葛飾の兩郡の中を流れて、千住に至る。末は淺草川といふ。今是をさして隅田河と稱す。以上專ら世人いひ傳ふる所の說にしたがふ。すべて十一郡を經て、周流すること凡そ廿四五里なり。或人云ふ、隅田河、古へは千駄に流る、今中川と綾瀨川との間に横たはりて、古隅田河と唱ふるあり、須田村の北の方にして、其間へだたれり、今は埋れて小流となれども、土人專ら古隅田河(フルスミダガハ)と呼べり。里老云ふ、むかしは中川と逆(カハマタ)にをりて、今の淺草川へ流れ合うて海に會せしとなり。依て考ふるに、地勢は古今大に違ふ事ありて、一定ならざるものなり。既に利根川なども大河にして、古へより同じ氣なるべしと思ふに、又古利根川といふものあれば、是も後世に至りて水脈かはりしなるべし。然るときは、隅田河の水流も、また古へに違ふ事もありなん。

按ずるに、菅原孝標(タカヒサ)女の更科の記に、武藏と相模の中にありて、あすだ川といふ、在五中將のいざこととはむとよみけるわたりなり、中將の集には角田河とあり(眞淵翁いふ、中將の集とは業平家の集をいふかと云々。)所にてわたりぬれば、相模の國になりぬと云々。しかあれども、武藏と相模の境には狩坂(シナサカ)あるのへに、しなの坂と唱へて、むかしより河の渡ありし事をきかず。此更科の記は、婦女子の紀行にして、もとより詳なる事を得べからず。まして田夫などのをしへたりしまゝを記したるなれば、か

白髭明神社

隅田川東岸

三年の秋、鎌倉の蓮華寺をこの寺島に移し、自ら開山たり。佐々目大僧正頼助と號せり。按ずるに先に寧範を開山とすとあるは、鎌倉にありての事をいふなるべし。此寺嶋に至りては、頼助開山たりしなるべし。諸家系圖に、經時の子に願助といふ名を載せて、傍に佐々木僧と註せり。疑ふらくは、佐々木といふべきを誤れるなるべし。また頼助は願助のことをいふならん歟。なほかんがふべし。元亨三年、北條家滅亡の後も、猶尊氏將軍及び官領基氏等、崇敬厚く、田園等を附し、御教書を賜ふ。其後、文明の頃、下總の千葉、兩家と別れし時、互に爭戰止む時なく、兵火の災厄にして、當寺も大に荒廢せり。然るに天文年間、小田原北條家の領地となりし頃、遠山丹波守奉行として、寺領等を寄附せり。天正の後、四海泰平に治りしより、更めて寺産を下し賜ふといへり。

按ずるに、鎌倉光明寺の開山記主禪師傳に云く、寛元元年五月三日、前武州大守平經時、鎌倉の佐介谷において淨刹を建立し、蓮華寺となづけ、良忠を導師として供養を演べらる。後に經時靈夢に感ずる所ありて、光明寺とあらたむると云々。又鎌倉大日記に云く建長三年、經時の爲に、佐介において蓮華寺建立、住持良忠とあり。されど寛元に建立せし蓮華寺は經時の生前なり、又建長に建立ありし蓮華寺は經時の歿後にして、其間七年を隔てたり。依て考ふるに、其號によるときは一寺の如くなれども、自ら別なるべし。然る時は、鎌倉光明寺の開山傳に載せて、寛元元年經時生前に建立すとあるものは、後に光明寺とあらため、鎌倉の内の材木坐へうつしたる是なり。又鎌倉大日記にいはゆる經時卒去の後菩提の爲に建立とあるものは、則ち當寺の權輿なるべし。

白髭明神社 隅田河堤の下にあり。祭神は猿田彦命なり。祭禮は九月十五日に執行せり。別當は眞言宗にして、西藏院と號く。相傳ふ、天曆五年辛亥、慈惠大師關東下向の頃、靈示

と云ふ。北條經時の念持佛にて、往古は相州鎌倉佐々目谷にありしを、弘安三年の秋、北條顯助、寺院ならびに本尊、共に此地へ引移し、同年八月二日、入佛供養を營みし故、今に至る迄、此日を以て緣日とす。又是より先、寛元二年の夏、國中大に疫疾流行し、人民死する者少からず。經時頻に是を歎き、本尊に告げて、諸人の病苦を消除せんとて、懇に祈願す。或夜本尊經時に靈示ありて、祕符を賜ふ。卽ち此祕符によりて、其頃病を退け、命を全うする者すくなからずとなり。（今に至り、當寺より件の祕符を出せり。）

相傳ふ、寛元四年丙午三月下旬、北條經時、疾に臨む。其時舍弟時賴を側へ招き、示して云く、我疾難治なり、死後に至らば、一字の梵刹を創建し、年頃念ずる處の聖德太子の像を安置すべし、といひ終て、同四月朔日、享年三十八歳にして逝去あり。（東鑑に云ふ、寛元四年丙午閏四月一日、今日入道正五位下行武藏守平朝臣經時卒す、法名は安樂、年三十三とあり、證とすべし。）依て時賴遺命を奉じて、鎌倉佐介谷に一字を闢き、蓮華寺と號く。（經時の法號を、蓮華寺殿前武州安樂大禪定門と號す。）卽ち辨法印審範を以て開山とす。（寺記に、審範は賴朝の外甥文深寺法眼寛智が孫なりと云ふ、されど鎌倉大日記には開山良忠とありて、一ならず、猶次に詳なり。）又其後、經時の子賴助、此寺嶋を領せしが、出離の志頻にして、忽に剃髪し、弘安

寺島
太子堂
蓮花寺

貞享五年歲在著雍執徐林鐘上澣穀旦

支那國傳臨濟正宗世四世高泉潡敬撰

秋葉大權現社　同所三丁あまり東の方請地村にあり。（龜戸村吾嬬權現の社記に、請地上古は浮地と稱したりとあり。）遠州秋葉權現を勸請し、稻荷の相殿とす。（千代世稻荷と云ふ。）當社の權輿しるべからず。或は云ふ、正應年間の勸請なりとも。別當は三寶寺末寺にて、千葉山滿願寺と號す。神泉の松と稱するは、社前にありて、松の椌より清泉涌出するをいふ、諸の病に驗ありといへり。（祭禮は每年十一月廿八日に執行あり。）境內林泉幽邃にして、四時遊觀の地なり。門前酒肆、食店多く。各生洲を構へて、鯉魚を蓄ふ。

淸瀧山蓮華寺　寺嶋村にあり。（寺記に云く、昔此地は海原なり、後世瀬干潟となりし頃、當寺を創建ありし故に、寺嶋の稱ありといへり。小田原北條家の所領役帳に、行方〔ナメカタ〕與次郎葛西寺嶋の地を領すとあり。）當寺は眞言宗にして、醍醐の三寶院に屬す。本尊阿彌陀如來の像は、惠心僧都の作といふ。

太子堂　本堂の右にあり。本尊聖德太子の像は、十六歲の眞影にして、太子自ら彫造ありし

裏門
別當

請地
秋葉權現宮
千代世稲荷社

漢門（かんもん） 總門をいふ、額は同じ軒にかけたり、開山鐵牛の筆なり。

牛法山

聯（れん） 同じ左右の柱に掲くる、筆者上に同じ。

牛頭山弘福禪寺大鐘銘竝序

瑞聖鐵牛和尙。住弘福之明年、修葺寺宇。將大完。井伊氏伯耆守直武公。與玉心院太夫人壽林元榮大姉。發心施金。爲造巨鐘。以利幽顯。寓書徵余銘。爲之銘曰。

牛首之阜兮有大法將。整飭淋宮兮曷殊天匠。幸値賢守兮母子同心。
乃召鳧氏兮乃簡赤金。範斯巨器兮永鎭禪林。曉昏考擊兮以利幽顯。
曰福曰壽兮夫豈淺鮮。用祈世主兮萬歲千春。億兆樂業兮四海歸仁。
龕斯衍慶兮子孫振振。以空爲口兮密斐爲毫。擬書厥勣兮莫殫一毛。

須崎より
請地秋葉の
近傍までの間
酒肉店多く
各生洲をかまへ
鯉魚を畜ふ
酒客おほく
これに宴飲を
中にも葛西
太郎といへるは
葛西三郎
清重の末裔
なりとて伝ふれ
とも是非を知らん
昔麦飯をひさき
計と云ふこそ
麦斗と唱へたり
しる人まれになりぬ

庵崎

元禄二年仲秋
初く隅田川
記行
牛じまにまゐり
仏におがみして
禅堂にまゐり
けれは机の有よ
鶏鳴をいけるく
眼おののめれす

禅堂に
あさくほ
いけて
あられ
くれ
秋風

遊牛頭寺　南郭

門外長堤墨水流
江東寶樹倚牛頭
金龍開閣離家室
玉女陵波何處遊
藏經舟指潮岸繫
忘機鳥下晚洲浮
到來心地應空闊
那更風烟起客愁

弘福禅寺

木庵や六尺四人唐めくそ　其角

ならせ給ひしより、此井に長命水の號を賜はり、寺の號をも改むべき旨、台命あり。爾來長命寺と稱す。（昔は常泉寺と云ひしなり。）殊更當寺は雪の名所にして、前に隅田河の流をうけて、風色たらずといふことなし。

牛頭山弘福禪寺 牛御前宮の東に隣る。此邊を須崎といふ。（もと洲崎に作る。）黄檗派の禪室にして、洛陽萬福寺を摸す。本尊は唐佛の釋迦如來、左右は迦葉、阿難なり。開山鐵牛和尙、延寶紀元癸丑創造す。毎歳七月十五日、大施餓鬼修行有り。

佛殿 額は二重家根に掲くる隱元の筆。

大雄殿

大成德 本尊の上に掲くる、同筆。

聯 本尊の左右の柱に掲くる、木庵の筆なり。

聯 同じ左右の柱に並べ掲くる、高泉の筆なり。

聯 同じ前の柱に掲くる、鐵牛の筆也

辰の事ならん歟。景秀は、社記に云ふ大道寺景秀なり。

當社は、往古鎌倉右府將軍賴朝卿、崇敬厚く、養和元年辛丑、宮社を經營あり。こゝに於て千葉介常胤、其頃當國の主たるにより、許多の田園を寄附し奉り、尊信尤も厚かりしとなり。然るに永祿に至り、北條氏直、老臣大道寺景秀に命じ、先規の例に任せ、神領寄附あり。則ち社前の水田是なり。

寶壽山長命寺　遍照院と號す。天台宗東叡山に屬せり。本尊は等身の釋迦如來、脇士は文殊、普賢、般若、十六善神等の像を安ず。牛島辨財天　同じ堂内に安ず、傳教大師の作なり。　長命水　同じ堂の後の方にあり、一に般若水と云ふ。

延壽椎　堂前にあり、寺の名に因りて名づくるとなり。　椰樹　堂の左の方垣ぞひにあり、元祿五年壬申、江戸御菓子司大久保主水某相州鎌倉にあそび、圓が谷の善光寺にして、此若木の長に三寸計に生出たりしを得て、當寺にうつし植ゑたるよし、樹下の碑文に見えたり。今は丈二丈計有り。　自在庵舊址　堂の右、竹藪の中にあり。俳諧師水國こゝに庵室をむすびて住みたりといへり。今其地に芭蕉翁の句を彫りたる碑を建てあり。

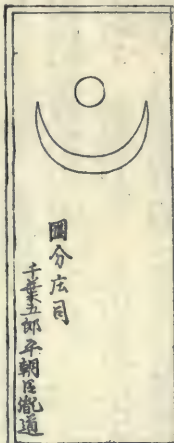
いざさらば雪見にころぶところまで　ばせを

當寺昔はいさゝかの庵室なりしが、寛永年間、大樹御遊獵の砌、少く御不豫にあらせられしかば、此寺内に休はせたまひ、庭前の井の水をもて、御藥を服し給ひしに、須臾にして常に

貞觀十七丁未天三月日

法華千部　明王院

この碑は、往し年當社境内の土中より穿ち得たりとて、今本殿の中に收む。青石にして、其質いたつて堅し。上下闕損して全からず。碑面に立像の釋迦如來の尊容を刻し、碑陰は直槐〔メヅラ〕にして、數字を鐫すといへども、法華貞觀等の文字は、剝缺して鮮明ならず。

千葉五郎胤道旗（ちばごらうたねみちのはた）　一旒　別當最勝寺に藏す。東鑑に、治承四年庚子九月十九日、武衛上總權介廣常が參入をまたず、下總國へむかはしめたまふ、依て千葉介常胤、子息を相具して、下總の國府に參會すといへる條下に、國府五郎胤道の名を加へたり。また准后親房の記に、壽永三年二月六日、鎌倉より福原へむかふ勢の中に、常胤が弟國府五郎胤道、同弟東六郎胤頼等の名あり。胤道は常胤の同胞にして、母は秩父太郎重弘の女なり。

長三尺一寸三分
幅一尺九分
房幅九分

同添狀壹通（おなじくそへじやう）　其文に、當社は往古先祖千葉家再興の宮社たるに依て是を收るよしを記して、慶長十八年九月十五日、國分宗兵衛正勝敬白とあり。

梶原景季書（かぢはらかげすゑのしよ）　石橋山合戰につき、分捕の面々、書翰の通り見參に備へ卒るよし記し、午三月廿三日景末とありて、花押をかきたり。眞贋決しがたし。

小田原北條家神領寄附狀（をだはらほうでうけしんりやうきふのじやう）　壹通　其文に、須崎堤外の畠、合せて八十箇所、前々よりも神領の由聞屆くると記せし奥に、戊辰霜月十五日景秀とありて、下に花押を書きてあり。按ずるに、戊辰は永祿十一年戊

秋九月、慈覺大師、東國弘法の頃、素盞烏尊、位冠の老翁と化現し、此地に跡を垂れ、永く國家を守護せんと告げ給ふ。仍て大師一社に奉じ、上足の良本阿闍梨を留て是を守らしむ。當社の本地佛大日如來の像は、良本師彫刻と云ふ。又五十七代陽成院の御宇、清和帝第七の皇子、當國に遷されさせたまひ、天慶元年丁酉九月十五日、此地に於て薨じ給ふ。依て開山良本阿闍梨、こゝに葬り奉り、牛御前の相殿に合祭なし奉るといへり。其後靈告ありて云く、素盞烏尊第二の御子にて、假に清和帝の皇子と生を替へさせ給ふと云々。

或人云ふ、當社を牛御前と稱しまゐらするは、この地いにしへ牛嶋の出崎にてありしゆゑ、牛嶋の出崎といふべきを、畧して牛御前と唱へたりしならんを、後世誤りて崎を前に書きあらため、またそれを御前〔ゴゼン〕と轉稱せしにやと云へり。

按ずるに、攝州輪田御崎、筑前鐘御崎、其餘相州の三崎、大江戸の月岬〔ツキノミサキ〕等、すべて海に臨める地なり。今當社の邊を須崎村と名づくるも、むかし海邊の出洲にして、其頃は文字も洲崎に作りたりしとおぼしく、いにしへ此あたり蒼海に濱し、やゝ年を歴て陸地となりし事は、次の寺嶋蓮華寺の條下につまびらかなり。其條下をあはせ考ふる時は、牛の御崎とする說も、據あるに似たり。しかる時は、御崎の假字の美を御とし、崎の文字を前に書きあらため、再びサキの訓を音に轉じて、ゼンとは呼びしならん、されど神號に御前と稱するもの、又人のうへにも用ひたりし事、往々其例あり。ことごとく擧ぐるにいとまあらず、故にこれを畧す。

法華經千部供養碑　今內陣に收めてあり。長さ三尺三寸ばかり、闊は壹尺六寸あまり、厚さ二寸程あり。

碑陰銘曰

奉造立釋迦像一軀

の作にして、同大師の勸請なりといへり。文和年間、三井寺の源慶僧都再興す。慶長の頃迄は、今の地より南の方にありしを、後此地に移せり。當社の内陣に、英一蝶の畫ける牛若丸と辨慶が半身の圖を掲けたり。

五元集

牛島みめぐりの神前にて雨乞するものにかはりて、

夕立や田をみめぐりの神ならば　寶晉齋　其角

あくる日雨ふる。

社僧云ふ、元祿六年の夏大に旱魃す、しかるに同じ六月の廿八日村民あつまりて神前にむかひ、請雨の祈願す、其日其角も當社に參詣せしに伴ひし人の中に、白雲といへるありて、其角に請雨の發句をすべきよしすゝめければ、農民にかはりて一句を連ねて、當社の神前にたてまつりしに、感應やありけん、その日膏雨たちまちに注ぎけるとなり。其眞〔サウ〕は今も當社に傳へてあり。

牛御前王子權現社　同所北の方にあり。別當は最勝寺と號す。牛島の總鎭守にして、祭禮は隔年九月十三日北本所石原新町の旅所へ神幸ありて、同十五日に歸輿す。祭神素盞烏尊、（牛御前と稱す。）清和天皇第七皇子、（王子權現と稱す。）共に二坐なり。相傳ふ、清和天皇の御宇、貞觀二年庚辰

隅田川東岸

五元集
牛御前
是やこれ
雨をす人
下ちみ
其角

牛御前宮
長命寺
隅田川東岸
隅田河

五元集

早稲酒やきつねよひ出す姥かもと

其角

三囲稲荷社
隅田川東岸

筑波山

大坂
淡々

夜下墨水
金龍山畔江月浮
江揺月湧金龍流
扁舟不住天如水
両岸秋風下二州
南郭

大川橋
吾妻橋とも称す
隅田川両岸

神宮寺

中郷
最勝寺
神明宮
太子堂
圓福寺

王の像は、良辨僧都の作なり。當寺は牛御前の別當寺にして、貞觀二年庚辰、慈覺大師草創、良本阿闍梨開山たり。寛永年間、大樹此邊御遊獵の頃、屢當寺へ入御あらせられしにより、其頃は、假の御殿など營構なし置かれたりとなり。今も御殿跡と稱する地に、山王權現を勸請す。

牛島神明宮 同所に並ぶ。相傳ふ、貞觀年間の鎭座なりと。別當を神宮寺と稱して、最勝寺より兼帶す。 江戸名所記云ふ、安德帝の壽永年間、本所の鄕民夢みらく、伊勢大神宮虚空にかけり、大光明の内に、微妙の御聲にて、我此土安穩天人常充滿と云ふ法華經壽量品の文を唱へ、我はこれ伊勢の大神宮なりとのたまふとみて、夢覺たり。鄕中の人民、互に語りあはするに、すこしも夢の趣たがふ事なし。依て奇異とし、宮處をかまへ、伊勢の御神を勸請し奉るよしみえたり。因に云ふ、牛島は、北條家の分限帳にも、江戸牛島四ケ村とありて、富永彌四郎の所領の中なり。今も本所中の鄕の邊より須崎までの惣名とせり。江戸の古圖に、回向院の邊に牛島と記してあり。

太子堂 同所元町にあり。天台宗如意輪寺に安置す。本尊聖德太子の像は、十六歳にならせ給ふ時、自ら造り給ふとなり。當寺は淳和天皇の嘉祥年間、慈覺大師、東國遊化の頃の創建にして、帝百畝の水田を寄附し給ふ。天文の頃、此地祝融氏の災にかゝりしときも、太子の靈像は、自ら火焰を遁れ出で給ひて、恙なかりしよし、江戸名所談にみえたり。

三圍稻荷社 小梅村田の中にあり。故に田中稻荷とも云ふ。別當は天台宗延命寺と號す。神像は弘法大師

に移す。其時故ありて、本尊薬師佛を當寺に安置なし奉るといへり。

照法山本久寺　北本所表町にあり。日蓮宗にして、平賀本土寺に屬す。天正三年乙亥の創立にして、開山は清眼院日有上人と號す。當寺に安置する所の宗祖大士の像は、日朗師御首を彫刻し、日法師全體を造り添へられしといふ。體中三寸に六寸の首題の札を收めたり。日朗、および日法等の眞跡なりといへり。此御影始め谷中感應寺に安置す。元祿四年、彼寺改宗の時、檀家に八牧彌宗と云へる有信の人ありしが、此影像、ならびに三光天子、大黑天等を其家にうつして崇敬ありしを、後當寺に安置し奉るとなり。境内安置の七面大明神は、花洛村雲の尼御所瑞龍寺殿仕女數馬女感得の靈像にして、故ありて當寺に安置し奉るとなり。

正覺山妙源寺　同所北本所番場町にあり。日蓮宗にして、下野佐野妙顯寺に屬す。建武年間の草創にして、中老僧天目上人開山たりといふ。總門の額、正覺山の三大字は、平林惇信の筆跡にして、消日居と記してあり。

牛寶山最勝寺　明王院と號す。同所表町にあり。天台宗にして、東叡山に屬す。本尊不動明

大六天祠　同北に隣る。大川の端、普賢寺別當たり。當社も文明五年癸巳の勧請なりと云傳ふ。

多田藥師堂　同所大川の端にあり。玉島山明星院東江寺と號す。（天台宗東叡山に屬す。）惣門に掲くる所の玉島山の額は、韓人雪月堂李三錫の筆なり。本尊藥師佛の像は、恵心僧都の作にして、多田滿仲公の念持佛なりといへり。（左右の脇壇に、十二神將の像を置きたり。）相傳ふ、村上帝の御宇、天德二年、攝州多田鄕に、一宇の伽藍を造營ありて、沙羅連山石峰寺と號し、此本尊を安置す。其後文永の頃、兵火に罹りて、諸堂悉く回祿す。依て一山の大衆、これを悲しみ、此本尊を石函に收めて、山中に埋め奉りぬ。夫より後、星霜を經て、慶長元年、鄕民等、沙羅山中において、此石函を穿ち出せり。蓋に沙羅連山石峰寺藥師の銘あり。鄕民等、奇異の思ひをなし、直に一宇を營んでこれを安す。同八年、其庵主宗立と云ふ者に、本尊告げ給ふ事ありて、京師五條の因幡堂に、暫く安置し、又五條の橋詰、東の方、若宮八幡宮の邊に堂舍を建てて、石峯寺と號す。寶永の頃、彼寺は、黄檗の千呆和尚、深草

中之郷
さらし井
世の中ハ蝶ゝとまれかくもあれ
西山
宗因

秋葉社ハ毎年
十月十六日祭礼
ありて賑へり

たゝのやくし
多田藥師堂

當寺往古は今の御城内平河にありて、本住院と號せしとなり。北條家の所領役帳に、本住坊寺領に三田本惣領分の地を附すとあり。則ち本住坊は内住院の事を云ふなるべし。法恩寺と改めしは後世の事と見えたり。遙に天正の後、柳原の邊へ移され、其後谷中淸水坂の地へ轉ぜられ、元祿の初、今の地へひかれたりといへり。境内に平河淸水と稱する稻荷の小祠あり。是乃ち平河より淸水坂へうつりたりし證にして、ふたつの地名をあはせてかくは稱するなり。

業平天神社　中の鄕、南藏院といへる天台宗の寺境にあり。傳へいふ、在原業平朝臣の靈を鎭むると。云々、江戸名所記に、業平すでに都にのぼらんとし、舟に乘ず。しかるに其乘ずる所の舟、このあたりの浦にて覆り溺死す。乃ち里民塚に築きこめたりし故に、塚のかたち舟のごとくなり。其在所を今も業平村と云ふと。又江戸鹿子といへる冊子にも、成平に作り、相撲とす。紫の一本にも、業衡に作り、武夫とするの類ひ猶多しといへども、いづれも證とするにたらず。求涼亭云く、此祠昔は今小梅の水府公御やしきの地にありしとなり。横川堀割の頃、今の地に移さるゝとなり。又南向亭の說に、中の鄕は業平假住の地なれば、中將の鄕といふべきを、誤りて中の鄕と云ふとあれども、附會なるべし。

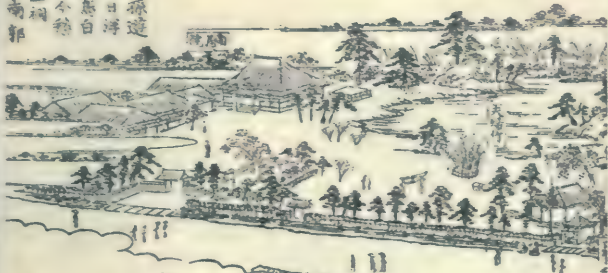
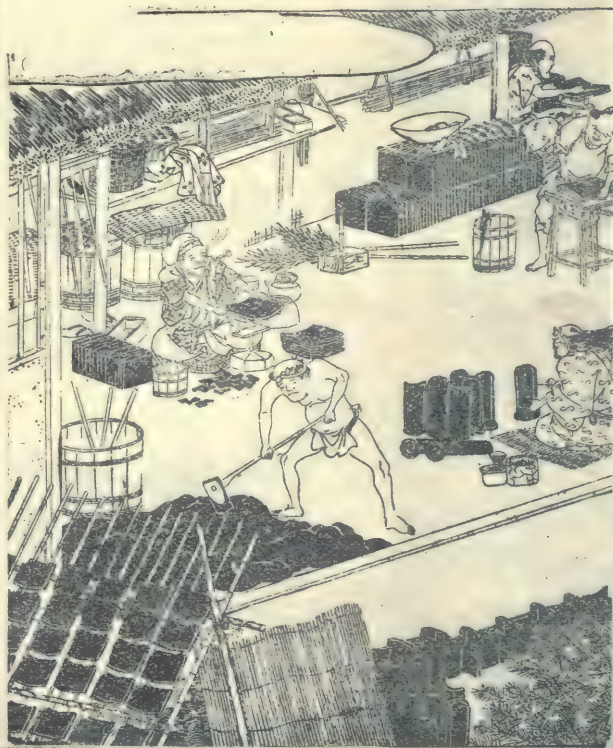
按ずるに、當社の傳說紛々として詳ならず。南向亭の茶話に、河越の三吉野の里は、在五中將の詠に、よるとなくなるみよしのの里とありし地なればにや、後三吉野天神の相殿に、業平の靈と菅神とを合せまつれり、されば此邊も隅田川の流近く、はた彼の伊勢物語に因みて、こゝにも業平の靈を齋きまつり、菅神をも勸請せし故に、業平天神とは稱しけるならん歟とあり。此說の如く、伊勢物語を作りたるものとしらで、後世に附會せしものならん。

中鄕八幡宮　同所南の方、荒井町にあり。南番場町、天台宗泉龍寺奉祀す。相傳ふ、文明七年乙未の鎭坐なりといへり。

業平天神祠

此處王孫遊
煙波暮日浮
自看洲鳥白
京國至今愁
右在五祠
南郭

中郷
第六天
八幡宮

瓦師
中之郷の辺
瓦師の家
多く瓦を
業と
するもの
多し

押上
法恩寺
霊山寺

知恩院尊空法親皇御廟　本堂の西にあり、尊空親皇は深三小名木川通り五本松に御閑居あり。其故はしばらくこゝに寓す。御影堂は地中照滿院にあり。

淨土傳燈系圖曰

尊空天蓮社帝譽號照滿。伏見守邦親王子。入于靈巖寺。剃染嗣法住洛知恩院。元祿元年十一月七日寂。

觀音堂　本堂の前右の方にあり、本尊は慈覺大師の作にして、桂昌一位尼公御念持佛なりしといへり。

平河山法恩寺　柳島出村町にあり。日蓮宗にして、花洛本國寺の觸頭、江戸三箇寺の一員たり。本堂には宗祖上人の像を安ず。日法上人の作なり。相傳ふ、當寺は太田大和守資高、道灌の孫なり。法華靈場記に、資高は江戸谷中法恩寺日悦尊靈なりと云々。先考六郎左衛門尉資康入道法恩齋　日恩寺と號す、十三回忌追悼の爲、三田村の内を寄附し、日住上人を開祖とす。則ち大永四年甲申、武州江戸下平河に精舍を營建し一家の靈牌を居うると云々。

三十番神堂　本堂の前左の方にあり。關東古戰錄といへるものに云ふ、傍に三十番神の堂をしつらひ、密談所にかまへ置きたりと。又北條五代記、小田原實記等の書に、資高北條家を背き、里見義弘に力をあはせ、永く豐嶋郡の地を知行せんとて、兄弟のともがら、番神堂の前にて神水を吞み、此事思ひ定めるうへは、再かへすべからずと誓約ありしよし記せり。其頃は今の御城内平河の地にありしなり。

日巧是なり。今なは夢想の疱瘡の守札、當寺より出せり。

廣布石 當寺本堂に安置す。今卵塔の中に其礎を置きたり。實物は日蓮上人親筆の法華首題を鐫りたる石塔なり。傳へ云ふ、往古此靈石亀戸村の地にありしと。亀戸村昔は鎌倉への海道たり、建長五年日蓮上人下總國より鎌倉へ至り給ふ頃、彼所を過ぎたまひ、此石面に法華の首題を書き賜ひ、大に廣宣流布の願を誓ひ給ふ。依て廣布石となづく。其後千葉家に相傳せし故、千葉石とも稱せり。然るに日巧上人は、俗性千葉氏なりし故に、出家得度の後、當寺を創立し、此靈石をもこゝに安置ありて、巧師も又自ら此石面に三十番神の尊號をも彫り添へられけるとなり。

常在山靈山寺 二尊教院と號す。同所の南、法恩寺の北に隣る。淨家十八檀林の隨一なり。本尊阿彌陀如來の像は、慈覺大師の作、釋迦如來の像は、唐佛なり。此故に二尊教院といふ。開山は念蓮社專譽上人大超和尚と號す。中古寺院既に荒廢し、檀林の統脈絶えんとせしを、最蓮社親譽俊應和尚、深く此事を慨き、屢官府に訴へて、竟に貞享二年、檀林再興の命を蒙りて、往昔の淨域に復す。されども功を後住に讓りて、武州熊谷寺に隱る。故に光蓮社明譽遊安廓榮和尚を中興開山とす。廓榮和尚は、一宗の高德碩學にして、往生要集、指麾抄を著し、大に世に行はる。當寺昔は湯島妻戀坂にありしが、明曆火災の後、淺草に移り、また元祿年間、今の地にうつる。淺草にありし頃の地は、今の誓願寺中安養寺の所なり。

せしむ。其時同年閏七月一日なり。貞綱海濱に至り、彼旗を押立つるに、颶風俄に起り、逆浪天を浸し、賊船漂蕩し、或は巖崖に觸れて多く壞れ、蠻軍溺死して、魚腹に葬らるゝもの、其數を知らず。元帥大に敗北す。擄にする者、凡そ三萬人、悉く是を梟首す。其餘干閒、莫靑、吳萬五等を赦して、國に還らしむ。是此事を元主にしらしめんが爲なり。蒙古の敗卒、還る事を得る者、僅に此三人のみ。大學衍義補に云ふ元の世祖の至元十八年日本を擊つ、兵十餘萬海嶋に死す、還る事を得る者僅に三十人とあるを、異稱日本傳に、三十人の十の字は衍なりと云々。元史に十萬の兵、還る事を得る者三人のみとありて、三人の名を擧げたり。曰く干閒、曰く莫靑、曰く吳萬五等なり。以上元史、日本傳、東國通鑑、續資治通鑑綱目、大學衍義補、五倫書、帝王編年集成、太平記、北條九代記、當寺緣起等の要を摘む。依て凱陣の後、勸賞として永く此旗を貞綱に賜ふ。貞綱來由を書して、身延山に納む。然るを當寺開山日境上人、身延より携へ來りて、永く當寺の什寶たらしむるとなり。

寶聚山大法寺 同三丁ばかり西にあり。日蓮宗にして、同所法恩寺に屬す。當寺は、大永六年丙戌創立の梵字にして、開山は、法恩寺第八世大權院日巧上人なり。其頃は法恩寺と共に、今の御郭内平川の地にありしを、後谷中に移され、又元祿年間、今の地に轉ぜしむるとなり。

三十番神堂 本堂の左にあり、番神の像は日巧上人の作なり。日巧尊師、六歲の時疱瘡を病み、既に死せり。父母悲に絕えざる所に、三十番神の靈示により、良藥を得て、忽に蘇生す。則ち廣布石並に番神の加護なりとて、後其子を出家せしむ。

武州池上村

右衛門太夫宗仲判

蒙古退治旗曼茶羅來由　人皇九十代後宇多帝御宇、弘安三年庚辰春二月、元の至元十七年に當る。鎌倉において元使杜世忠を殺す。元史日本傳に、元の世祖の至元一年（日本文永元年に當る）高麗人趙彝等日本國に通ずべしと言を以て、使を遣すべき者を擇ぶ。同三年八月兵部侍郎黑的禮部侍郎殷弘等に命じ、日本に使す、とありて、日本の弘安四年迄、元使日本へ書を奉じ來る事しば〳〵なりといへども、これに應ぜず。元王憤りて、阿刺罕、五倫書卷二十一阿剌罕に作る。阿刺罕途にして病に係りて卒す。こゝに於て阿塔海を以て是に代らしむ。范文虎、及び忻都、洪茶丘等の四將に、師十萬を率ゐしめて、日本を擊んとす。東國通鑑卷の三十八高麗記に云ふ茶丘、忻都、蒙國漢四萬の軍を率ゐて合浦を發し、范文虎蠻軍十萬を率ゐて江南を發し、倶に一岐嶋に會すと、太平記三百萬騎とし、緣起二十四萬人とす。同四年辛巳夏五月、元の至元十八年に當る。蒙古の賊船、東國通鑑戰艦三千五百艘、又太平記七萬餘艘とす。緣起四千餘艘として一ならず。督し來つて、鎭西に寇し、壹岐、對馬の二嶋、及び筑前、肥前に入る。元史日本傳、六月海に入り、七月平壺嶋に至り、五龍山にうつる。八月一日風船を破るとあり。異稱日本傳に、平壺また平戸なり、戸壺音通す、平戸こゝには比羅度と云ふ。三才圖會飛蘭島に作る、五龍山は鷹嶋なり、此嶋は筑前の國にある所なり。天下の人民、戰慄せざるはなし。こゝに於て、鎌倉には、征夷大將軍惟康親王、蒙古退治の爲、自ら九州に向はんとし、まづ宇都宮貞綱をして、先陣の大將たらしむ。また日蓮上人に命じて、日月の旗の圓中に、大曼茶羅を書かしめ、其旗を貞綱に與へ、西海に發向

其二

鎌倉将軍
惟康親王
蒙古夷賊
退治の図

兩面之大旗來由記

弘安四年辛巳五月二十一日。從大元國蒙古。賊船四千餘艘。人數二十四萬餘責來。七月於九州防戰。其時這八大龍王之御旗圓中。日蓮聖人爲祈禱之大曼荼羅令書。此御旗先立。向親王九州給時、某爲武之大將至九州。則日本靈神擁護。有神風。吹彼賊船。其人數等不殘破。異國江追拂給。日出度旗成故。我家是預給畢。

十二月二十一日　宇津宮貞綱判

這兩面之大旗者。惟康親王所持之御旗也。弘安四年五月二十一日。從大元國蒙古來船四千艘。人數二十四萬人也。于時親王。此旗四方八大龍王。四角四天王。中圓相內十界大曼荼羅。日蓮聖人仰而令書。是爲持九州向。穰蒙古災給御旗是也。

正應元年十月十三日

七面堂（しちめんだう） 境内にあり、本山身延同體の靈像なりと云ふ。三澤氏所蔵の本尊にして、當寺第一世の住持仙能院日宗尊師、二百日加行して、池の傍に神殿を建立すと云ふ。

日の丸旗曼荼羅（ひのまるはたまんだら） 一幅

每歳七月十六日よりかれし廿二日まで虫拂として七面堂に掲て諸人に拜さしむ日の丸の曼陀羅ハ身延山にあり

竪六尺五寸

幅五尺五寸

押上
最教寺
當寺ハ蒙古
退治の繪曼
荼羅あり

帝の七年に、百濟寺を營んで、安置奉りしより、慶長七年壬寅に至る迄の間、南都大安寺及び花洛蓮花王院、高雄の神護寺、あるひは豆州田方の般若王寺、相州鎌倉の法華堂、武州小菅の最明寺、江州滋賀菅原寺、攝州金胎寺等へ移し奉り、竟に寶曆十二年壬午十月、武州荏原郡の淸谷寺より移し、長く當寺に安置し奉るといへり。

當寺の後園、萩を多く栽ゑて、中秋の頃開花の時節は壯觀たり。故に世俗萩寺と字せり。

妙見大菩薩　同じ川端、橋を越えて向ふ角にあり。日蓮宗法性寺に安ず。本尊の來由詳ならず。近世靈驗著しとて、詣人常に絕えず。堂前に、影向松と號くる靈樹あり。本尊初めて此樹上に降臨ありしといふ。故に星降松とも、千年松とも呼べり。元和の頃、大樹此地に至らせ給ひし頃、更めて鏡の松と號を賜ひしと云傳ふ。

天松山最敎寺　同所三丁ばかりを隔てゝ西の方にあり。日蓮宗にして、本尊に釋迦如來の像を安ず。寬永年間、延山二十七世通心院日境上人開基す。當寺に鎌倉將軍惟康親王、蒙古鎭制の爲に書かしむる所の、日蓮上人眞蹟の曼荼羅の旗あり。

柳嶋妙見堂

龍眼寺

庭中萩を多く栽て中秋の一奇観たり故に俗呼て萩寺と称せり萬葉集芽子に作り和名抄鹿鳴草に作る續日本後紀に仁明帝嘉祥元年八月清涼殿に内宴を賜ふ芳宜華の讌とあるをありて皇朝古より萩を

入り給ひぬ。暴風卽ち止みて、王船岸に著く事を得給ふ。（雜風に逢ひたまふ海上を馳水〔ハシリミヅ〕と云ふ、今走水〔ハシリミヅ〕に作る。）其後弟橘媛の御裳、此邊の海上に浮びければ、尊群臣に命じて、此所に收め、壇を築かしめ、瑞籬を廻して御廟となし給ふ。（尊骸の寄りける地に御廟を築きたてまつる。上總國君不去〔キサラズ〕の吾妻明神是なり又其御櫛の寄りけるを取揚げて御陵を造るは、今の相州梅澤の吾妻明神なりと云ふ。）

當社古へは荒陵のみなりしを、承久元年、北條泰時の幕下鈴木隼人正、神尾采女、井出大學等の諸士、小祠を創營し、神領三百石を附したりしとなり。其後永祿の頃も、小田原北條家の臣遠山丹波守、當社を再興せしといへり。

按ずるに、小田原北條家の所領役帳にも、遠山丹波守所領の中に葛西小村井の地名を注し加ふ、小村井は龜戸村に接して、則ち此社の北の人村をいふ。昔は社地の邊も丹波守の領地にてやありけん、故に當社を修理せしならん歟。

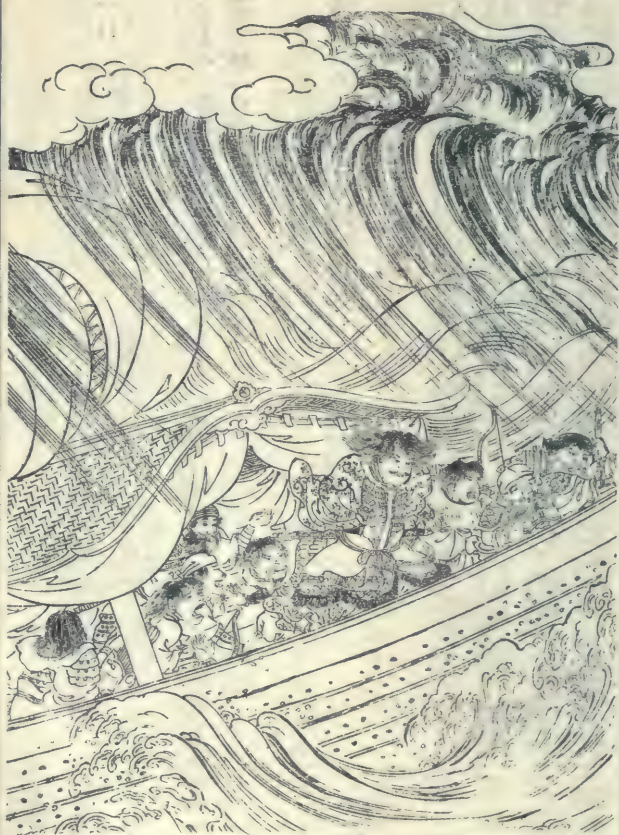
殖髮聖德太子堂　同所龜戸天滿宮の裏門の通り、川端に傍ひて、慈雲山龍眼寺といへる天台宗の寺境に安置す。聖德太子の御影は、太子自親彫造なし給ふとて、御長二尺五寸あり。（其靈像の頂に、太子と妃との[illegible]〔ミグシ〕を植させたまふとなり。故に世に殖髮太子と稱す。）當寺藏太子緣起に云ふ、推古天皇十一年癸亥、太子御齡三十二歲、同年十一月廿八日、檜隈宮において、靈木を得て、自親影像を作り、斑鳩の夢殿に納めたまふ。（太子傳曆等に、此年影像を造る事を載せず。）其後代々の帝王大寺をなし、世々の君子堂に移す。仍て天智

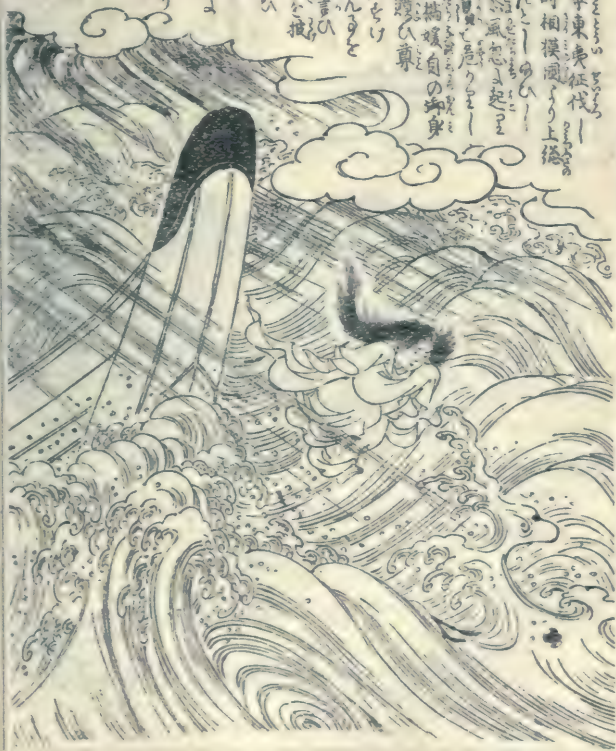
神寶古鈴一口　長さ八寸ばかりあり、銅色愛すべし。

是に同じきもの、常陸の鹿嶋正等寺にもあり。又息男縣麿が家にも藏せり。其形狀大同小異なる故に、圖を臨し加ふのみ。

鹿嶋正等寺藏

藤原縣麿藏

社記に曰く、人皇十二代景行天皇の御宇四十年、皇子日本武尊、東夷を征伐し給ふ時、相摸國より、上總國に往かんとし、王船に乘りたまふ。海中に至り給ふ頃、暴風忽起り、王船漂蕩て渡るべからず。時に妾弟橘媛曰く、今風起き、浪泌くして、王船沒まんと欲す。是必ず海神の心なり、願は妾が身を以て王の命を贖ひて海に入んと言訖て、瀾を披て

日本武尊東夷征伐し
たまふ時相模國より上総
國に往んとしたまひし
其海上にて暴風忽ちに起り
王船漂蕩て危かりし
妾弟橘媛自の御身
の命をたすけ
海神に誓ひ
て入たまひ
日本紀に
見えたり

吾嬬森
吾嬬權現
連理樟

足如茂林。臨而應狩。日本武尊。信其言。入野中而覓獸。賊有殺王之情。放火燒其野。王知被欺。則以燧出火之向燒而得免。

一云。王所佩劒叢雲。自抽之薙攘王之傍草。因是得免。故號其劒曰草薙也。叢雲此云武羅玖毛。

王曰。殆被欺。則悉焚其賊衆而滅之。故號其處曰燒津。亦進相摸。欲往上總。望海高言曰。是小海耳。可立踏渡。乃至于海中。暴風忽起。王船漂蕩而不可渡。時有從王之妾。曰弟橘媛。穗積氏忍山宿禰之女也。啓王曰。今風起浪泌。王船欲沒。是必海神心也。願以妾之身贖王之命。而入海。言訖乃披瀾入之。暴風即止。船得著岸。故時人號其海曰馳水。下略

相生樟（あひおひのくすのき）　本社の前右の方にあり。世に連理と稱するものにして、一根二幹なり。わづかに地を離るゝ事四尺ばかりにして二股にわかる。社記に、往古日本武尊、弟橘媛の神靈を鎭めまつらせ、御食（ミオシ）し給ひし時、樟の御箸をもて、末代平天下ならんには、此箸二本共に榮ゆべしと宣ひ、御手づから御廟の東の地にさゝせ給ひしに、後枝葉を生じ、今に至りて榮茂す。又其傍に同じ樟の葉あり。是も一根二幹なり。

西歸山常光寺　同所一丁あまり巽の方にあり。曹洞派の禪刹にして、橋場の總泉寺に屬す。開山は行基大士。中興は勝庵最大和尙と號す。本尊阿彌陀如來の像は即ち行基大士の作なり。（江戸六阿彌陀第六番目なり。）來迎松は、佛殿の前に存せり。（中古火災の時、當寺の本尊、火焔を出て此樹上にうつりたまふといへり。）龍燈松は、同じ左の方にあり。（時として、此樹上へ龍燈揚るよしいへり。）毎歳二月、八月の彼岸中、參詣多し。

龜命山慈光院　同所十間川を隔てて向にあり。當寺も洞家の禪林にして、同じく總泉寺に屬す。永正十一年甲戌、葛西出雲守某の令室慈光院殿草創する所の寺院たり。開山は嵐巖和尙、本尊觀世音菩薩の像は、此地より東の方の土中より出現ありしといふ。又境内に安置せる辨財天の像は、智證大師の作にして、葛西出雲守某の尊信ありし靈像なりといへり。

吾嬬權現社　同所十間川の端にあり。此地を吾嬬森、又浮洲森とも號く。別當は寶蓮寺なり。

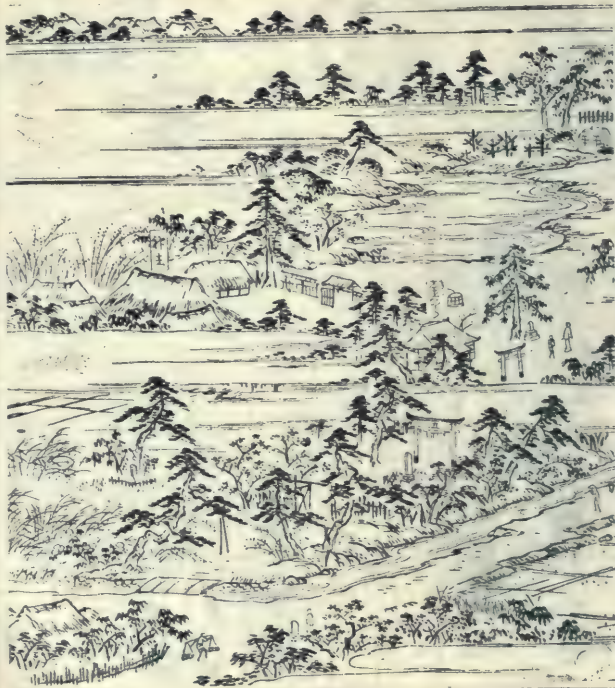
本社　祭神　弟橘媛命　一坐

日本書紀神代卷曰

日本武尊。初至駿河。其處賊陽從之。欺曰。是野也麋鹿甚多。氣如朝霧。

賽
本堂建立

亀戸邑の常光寺ハ江戸
六阿弥陀同の第六番目
なり春秋二度の彼岸
中都鄙の老若参詣
群集

香取大神宮（かとりだいじんぐう）

入神明宮
大平槙

せんと欲し、頻に此靈像を乞求む。僧遊雲も終に其意に應じ、この尊像を玄學に附與す。玄學直に一字の香堂を營んで此靈像を安ず。當寺これなり。故に世人盜難除不動尊と稱しまゐらせり。

香取大神宮　同所二丁許乾の方にあり。此地も昔は大平塚に等しく海にして、一の嶋なり。鶴の浮べるに似たりとて、舊名を亀津嶋と唱へたりといふ。

本社　祭神經津主命（下總一宮の神同躰）　相殿（武甕槌命 鹿嶋大神宮　猿田彦命 大杉大明神）三坐。

當社は、龜戸村草創よりの勸請にして、此邊第一の古跡なりといへり。或説に、當社は大職冠鎌足公の勸請なりといふ。例祭は、毎年六月十四日、十五日に修行す。旅所は、吾妻森より二三十歩東の方、田の中にあり。往古祭禮を行はんとせし頃は、此邊なべて海面なりしかば、舂を流し、其止る地を以て、旅所に定むべしと誓ひたりしに、其舂かしこに止りしとなり。故に今も昔の例により、僅の間ながらも、十間川に至りて、神輿を船に移し、旅所へ神幸なしまゐらす。

東林山寶蓮寺　華藏院と號す。眞言宗にして、寺島の蓮華寺に屬す。本尊虛空藏菩薩は、行基大士の作なり。江戸三虛空藏の一員なり。小石川白山西福寺、品川養願寺等なり。當寺は吾嬬權現の別當寺なり。相傳ふ、嘉元元年癸卯、俊鍐法印、草創する所の精舍にして、始は相州小田原にありしとなり。鎌倉北條家の時、此地に移すといふ。

弥月の花盛
はいふ容色
残の雪に
勝る餘香の
芬々として四方に
馥ある花の
後実をむすべるを
採収て日に
乾し塩漬
となし常にこれ
を貯へ味ひ
酸にして甘美
なれバこゝに
賞翫する人
あれバそ
こに依て
土産とせ

梅屋敷
白雲の
龍を
はゞむ
や
梅の
花
嵐雪

り、命を全うせし報賽のため、此地に此御神を勧請なし奉り、宮居を營みしといふ。往古は此地船多く泊る所なる故に、入「イリ」と唱へしをもて、今も古きを失はずして、此地字に呼ぶといふ。網干榎と云ふは、社の傍にありて神木とす。昔此邊ひとつゞきの海なりし頃、漁者の網を懸干したる故に、しか號くるといふ。今も此あたりの地を穿てば、土中より漁網に具する所の碇「イハ」と名づくるもの出づるとなり。依て海邊なりし證とするよし、古人云ひならはせり。此榎の一名を大平榎となづく、社地をも大平塚と稱せり。

明王山東覺寺 同所南の方にあり。眞言宗にして、寺嶋の蓮華寺に屬す。本尊は、彌陀、觀音、勢至の三尊なり。當寺は、享祿四年辛卯、草創する所の寺院にして、開山を玄覺法印と號す。

不動堂 當寺に安置す。良辨僧都の影像にして、相州大山寺の本尊と同體なりといへり。

緣起に曰く、當寺往古草庵たりし頃、開山玄覺法印こゝに住せらる。然るに享祿四年辛卯、或時負笈の優婆塞來りて投宿を乞求む。法印許諾し、其夜同床に安臥しぬ。翌朝法印疾く起きて佛間に入らんとするに、傍に一人の壯夫の怗然として佇むあり。法印怪み其故を問ふといへども、壯夫は聾啞の如く、さらに答ふる所なし。其時投宿の優婆塞これを聞き、立出でて示して云く、これ我笈の中に安ずる所の不動尊罰したまふ所ならんと云ひて、即ち笈の前にひざまづき、漸祈念せしに、不測に彼壯夫身躰の自由なる事をおぼえ、こゝにおいて語を發する事を得て大に歡喜し、且盜賊なる事を示し、其罪を謝して、永く良心にひるがへさん事約し去りぬ。依つて法印これを奇とし其本尊の由緣を問ふ、優婆塞こたへ云く、むかし良辨僧都、相州大山を開基したまふ頃、我始祖其翁なる子安村に住せしが、其時僧都を供奉しまゐらせ、前路を開通し、僧都をして山頂に至らしむ、これ相州大山寺の興基なり、其後僧都隨從の勞を謝して、此本尊を我始祖に附屬なしたまひ、告げて云く、人界の大患は盜難劍難のふたつに過ぎたるはなし、此靈像を護持せば、永く汝が子孫、及び見聞結緣の輩も、又其難を遁れしめんと云々、しかありしより我家に相傳せし事、今に至りて二十五代なり、囘國の間も、路中危難を遁れし事屢多かりしも、この靈像の應護による所なりと語りければ、法印深く感歎し、この靈像を永く此地にとゞめ、一字を建立し、普く衆生を結緣

る。感涙肝に銘じ、夫より晝夜不退に一千坐の觀音供を修しければ、國中頓に疫疾の患を遁れけるとぞ。故に世俗身代觀世音と唱へ奉るとなり。

臥龍梅　同所淸香庵にあり。俗間梅屋敷と稱す。其花一品にして、重辨潔白なり。薫香至て深く、形狀宛も龍の蟠り臥すが如し。園中四方數拾丈が間に蔓りて、梢高からず。枝毎に半は地中に入り、地中を出でて、枝莖を生じ、何を幹ともわきてしりがたし。しかも屈曲ありて、自ら其勢を彰す。仍て臥龍の號ありといへり。梅譜に、臥梅、梅龍などいへるにかなへり。

梅譜曰

去都城二十里。有臥梅。偃蹇十餘丈。相傳唐物也。謂之梅龍。好事者載酒遊之。云云

神明宮　同所にあり。宮居は一堆の塚上にあり。相傳ふ、上古此地は、一の小嶋にして、其繞は海面なりしと。其頃渡海の船、風浪の難に逢ひけるに、伊勢兩皇大神宮の加護によ

毎歳正月十四日
これを奥行と
此境の童子多く
あつまりて菱垣
造りなしたる
小さき船に五彩の
帯扇を建松竹梅
とも雑飾し其中
に大宝舟といへる文字
を染たる幟を建
たるを荷擔ひ青よ
唄ひ連て此辺を
持歩行なり其夜
童子集會して祝ひ
戯るゝを
恒例とせり

亀戸邑
道祖神祭

普門院
ふもんゐん
御腰掛松

御腰懸松　堂前にあり、昔大樹御放鷹の砌、御腰をかけさせられしとなり。故にこの名あり。　**慈眼水**　同所にあり、加持水に用ふ。普門慈眼の意をとりて名とす。

身代觀世音菩薩　當寺に安置す。傳教大師の作にして、聖觀音なり。

緣起に云ふ、大永二年壬丑、千葉介中務大夫自胤、(實胤の孫にて季胤の二男なり。)三俣の城中に一宇の梵刹を開き、此靈像を安置し、長賢上人をして始祖たらしむ。(今の普門院これなり。三俣といへるは、隅田川、綾瀬川、荒川の落合ひ、三俣になる所をいへり。昔千葉家在城の地なり。其頃普門院の號と稱しけるとなり。然れども、後兵火にかゝり、堂塔ことごとく灰燼せり。此際にいたり、洪鐘一口隅田川に沈沒す。其地を名づけて鐘ケ淵と呼ぶ。元和二年(或云六年)住持榮眞法印、公命によりて三俣の地を轉じて、寺院を今の龜戸の邑に移すといふ。猶當寺緣起、および當寺新鐘の銘に詳なり。)往古千葉自胤の臣佐田善次盛光、(後薙髮して觀讚と號せり。)虛名の罪により、誅に伏す時、日頃念ずる所の此靈像の加護にて、其白刃段々に壞し、危難を遁れたり。(此靈感により、自胤三俣の城中に當寺を創し、長賢上人を導師とし且開祖とす。)又天文三年、國中大に疫疾流行し、死に至る者少なからず。されど此靈像を念ずる輩は、悉く病平愈し、將病に臨まざる者は、病者と床を等しうすといへども、敢て染延の患なし。其後住持長榮上人、睡眠の中、一老翁の來るあり。吾は是施無畏大士なり、多くの人に代り、疫病を受く、故に病苦一身に逼れり。上人願くは我法一千坐を修して、予が救世の加彼力となるべしと。夢覺めて後、益敬重を加へ、本尊を拜し奉るに、佛體に汗みちて蓮臺に泣

これに基す。當社の祭式は、すべて宰府の例に准ふが故に、一社の法式あり、尤も古雅にして他に異なること多し。

社記に云ふ、開祖信祐、（菅原善外の苗裔なり。）始め筑前大宰府にありし頃、正保三年丙戌、一夜菅神の靈示を蒙る。其夢中、「十立て榮ふる梅の稚枝かな、」といへる發句を得たり。依て其後、飛梅を以て新に神像を造り、是を護持して江戸に下り、彼天滿宮を今の龜戸村に勸請す。（初め勸請の地は今の宮居より東南の方、耕田の中にあり。元宮と稱して、かしこくも菅神の叢祠あり。）其後寛文紀元辛丑、台命を蒙り、同年壬寅、始めて今の地を賜ふ。同三年癸卯、宮居を營み、心字の池、樓門等、すべて社頭の光景、宰府の俤を摸せり。依て同十一年辛亥、後水尾帝震翰を灑ぎ、菅神の尊號を下し給ふ。又元祿十年丁丑、一社の神事、法式等、宰府本宮の例に准ずべきむね、同帝の勅許を蒙る。爾來神威顯赫として、靈瑞昭著なり。當社至寶と稱するものは、菅神佩せらるゝところの天國の寶劒なり。

福聚山普門院　善應寺と號す。同所一丁ばかり東の方に有り。眞言宗にして、今大日如來を本尊とす。（慶安二年己丑、住持沙門榮賢博給の擧あるをもつて、公命を得て寺產若干を賜り、永く香燭の料に充てしむとなん。）

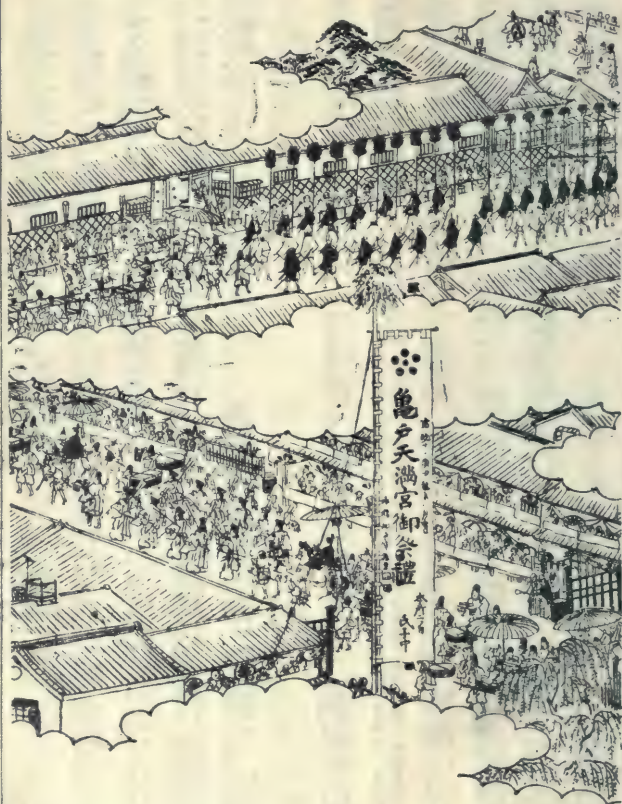
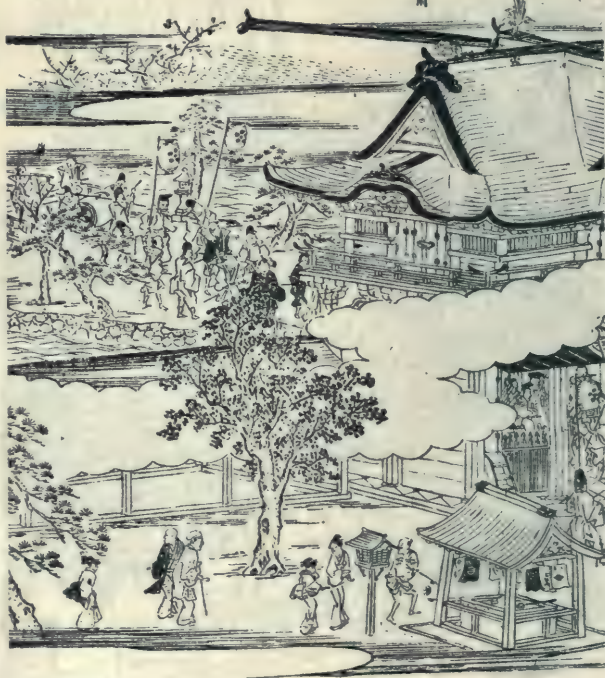
紅梅殿（こうばいでん） 本社の前右の方にあり、筑前太宰府より栽つす所の飛梅の稚木なり。 **老松殿**（おいまつでん） 同左の方に竝ぶ、花洛北野の一夜松をうつし植ゑたり。 **回廊**（くわいらう） **楼門**（せいもん） 回廊の正面の門をいふ、左右に随身の木像を置く。

御嶽社（みたけのやしろ） 本社の右にあり、寳山の座主法性坊尊意僧正の靈を勸請す。菅神の師たるによりて是をまつるといふ。卯の日を以て縁日とす。ことさら正月初の卯の日は參詣群集せり。 **花園社**（はなぞののやしろ） 御手洗（ミタラシ）の池の右にあり、菅神の北の方、竝に御子十四前を相殿とす。 **頓宮明神**（ごんぐうみやうじん） 同所にあり、昔菅神筑紫へ左遷の時、同國觀世音寺にて、夕陽に至りけれど御宿もさだまらず、然るに賤の家を求めさせ給ふに、あるじの翁[illegible]左遷の人にてましませば御宿はかなふまじきよし、情なく申しければ、其家の老女は情ある者にて、扉の上に新しき蓆を敷きて請じたてまつり、麹の飯を松の葉に盛りて捧げたりしに、志は松の葉に包むとのたまひしとある謠を表したり。頓宮とは其老嫗をさしていへり。老夫は扉を以て鋳す。いづれも後に青赤の二鬼佇みてあり。 **兵洲濱神祠**（ひやうすべのじんし） 同所にあり、菅神逢ひたまふ所の河童をあがめたりといへり。水中守護の神とす。 **連歌家**（れんがや） 池の西にあり、此處において連歌を興行す。延寶五年丁巳二月十二日、大樹この邊御放鷹の時、此連歌家に立ち寄らせ給ひしとて、享保の頃も、官府より修理を加へられたりといへり。

裏白連歌會（うらじろれんがゑ） 正月二日連歌家において興行す。 **若菜神供**（わかなのしんぐ） 同七日今朝若葉の餅をたてまつれり。すべて元日より此日に至るまで、毎朝宮司社人等神供を奉る。 **菜種神事**（なたねのしんじ） 二月廿五日菅神の御忌によりて、二十四日通夜連歌興行、二十五日午時に至り、神前において社人等梅の枝を持ち、梅花の神詠二十八首を披講す。又夜に入りて、宮司社人松明を照し、榊と幣とを神體とし、本社より心字の池をめぐり、橋を越えて楼門より入り社前に松明を積んで是を焚く。この祭事は宰府の形をうつす所なりといへり。 **雷神祭**（らいじんまつり） 四月朔日より七日に至るまでこれを修行す。 **神御衣**（かんみそ） 四月晦日と九月晦日の夜、御衣をたてまつる。 **名越祓**（なごしのはらへ） 六月二十五日堅川の西大河口に至りて、船中これを修行す。 **七夕和歌連歌會**（しつせきわかれんがゑ） 七月七日これを興行す。 **祭禮**（さいれい） 隔年八月二十四日に修行す。當日堅川通北松代町の御旅所へ神幸、同日還輿あり。後水尾帝の勅許によりて、神輿供奉の行粧、すべて宰府の例式に准へて、尤も壯觀たり。別當大鳥居氏乘車す。生子の町々よりも、練物車樂（ダンジリ）等を出して、甚にぎはへり。翌る二十五日に至りて、神詠披講社頭において行ふ。

月見連歌會（つきみれんがゑ） 九月十三日に興行す。 **火焼神事**（ひたきのしんじ） 十一月廿五日に修行す。 **年越神事**（としこしのしんじ） 十二月晦日通夜修行せり。 **追儺神事**（つゐなのしんじ） 節分の夜修行す。其餘一季の中神事多しといへどもこ

亀戸天満宮祭礼
神輿渡御行列之圖

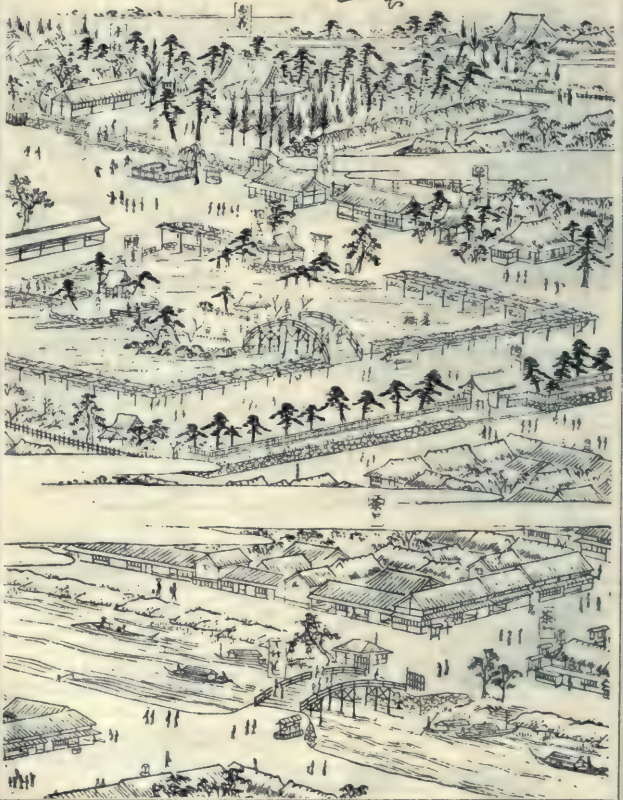
其角

五元集
元禄十四年
二月二十五日
聖廟八百歳
御年忌於
亀戸御社詩
歌連俳会興
行一坐
梅松や
二月二十五日
菜種神事

當寺は黄檗派江戸最大の禪園にして、佛閣の巍々たる事、日域にかくれなし。元祿年間、寺領山號等を賜り、享保九年甲辰十二月、大樹始めて當寺へ入らせられ、其後同十五年正月、晩課御聽聞、翌年十二月、方丈に於て陞坐、住持象先是を勤む。同十九年甲寅、三千畝の地を添へ賜ひ、同二十年乙卯、境内に新殿を營せられ、夫より後、此地に御放鷹のころは、かならず當寺へ立寄せ給ふ事となれり。月毎の朔日には觀音懺法を修行し、十五日には、大般若經轉讀あり。七月に至れば、毎夕施餓鬼を修し、十六日、廿一日、廿五日、晦日は、殊に道俗群參す。象先師より已來、當寺の住持は、風雨寒暑を厭はず、日々に大江戸の市中を行乞するをもつて勤行とせり。

宰府天滿宮　龜戸村にあり。故に龜戸天滿宮とも唱ふ。別當を天原山東安樂寺聖廟院と號す。司務兼宮司、大鳥居氏奉祀せり。當社別當は柳營御連歌の列に加へられ、毎歳正月十一日營中に至り御連歌百韻興行す。御旅所は當社の南、竪川通北松代町四丁目にあり。筑前國榎寺の摸なり。藥師堂あり、八月廿四日祭禮の時、神輿を此處に遷しまゐらす。

本社　祭神天滿大自在天神　相殿　天穂日命　土師宿禰　三坐

其二

亀戸宰府天満宮

と稱し、自ら三代の席に坐せらる。隱元禪師、歸化の後は、持齋一食にして、深く貧者をあはれみ、佛像經卷と、古き袈裟の外には、聊も身に貯ふる事なし。日々の勤行には、般若理趣分五卷と、華嚴經行願品百五十卷とを讀誦し、觀音の尊號を書寫する事、其數積で山の如し。又大般若經一部六百卷、一字百禮にして是を書寫す。其先出家得道の時、攝の瑞龍寺に入りて、法道成就の誓願を發し、三年の間、雙手の指を切り、八十卷の華嚴經を血書す。其後當寺殿堂の營大半成るといへども、宗門の坐禪、夏冬の結制行れざるを闕典なりとす。依て後住榮朝師、命を受けて、元文二年丁巳の冬、洞濟兩首坐を立てゝ、五千指の僧を集め、江湖の大會を行ふ。此時、大樹こゝに至らせたまひ、坐禪の行相をみそなはす。則ち江湖の僧財として、米五百俵をたまふ。夫より後、般若の全文を眞讀して、御札を獻ず。竟に寛延三年己丑六月五日、七十三歳にして涅槃の大定に入る。貴賤香花を捧げんとつどひ來る事三日三夜、炎暑甚しといへども、遺骸聊か變ずる色なく、荼毗して全身舍利となる。其舌根は寶塔に收めて、今なほ中興堂に存せり。

雲禪功烈函盖乾坤

元祿九年丙子四月穀旦　　牛頭鐵牛機謹誌

桃の土手　元文紀元丙辰、當寺の境外南の方の土手にこれを栽えしめ給ふとなり。

櫻樹　境内にあり、元文五年庚申、櫻樹九十餘株をたまはりて是を植うるといへり。

開山堂　方丈の東にあり、此地は享保十八年の頃、鐵眼禪師當寺を退去の後、隱栖の地なりといへり。鐵眼師および象先和尚、ならびに松雲老人等の像を置く。故に三代堂とも唱ふ。開山鐵眼禪師の行實は、攝州瑞龍寺の碑文に詳なり。

中興象先和尚は、黃檗四世の法孫にして、鐵眼禪師の法脈たり。當時松雲禪師化寂の後は、假堂も破壞し、佛像も雨露の爲に侵されたりしを、深く患とし、正德三年癸巳、本師鐵眼和尚の命を受け、始めて大江戸に來り、當寺に住す。享保二年丁酉正月より、十有餘年の間、心肝を碎き、寒暑風雪の厭なく、日々に府下の街市に入りて行乞し、旣にして勸進の功を募り、受くる所の一握一投の米錢を積で、其料に充て、同十年乙巳に至り、今存する所の佛殿僧房悉く建立成就せり。依て同十四年己酉二月、開堂惣供養の大法會を行ひ、また盂蘭盆の大施餓鬼會を開く。當寺開山は象先和尚たる事、其理顯然たりといへども、故ありて鐵眼禪師を開山とし、自らの師寶州和尚を二代とし、又松雲禪師創業の大功あるを以、一代開基

請老僧拈香。凡百官士庶長幼皂白。皆趨赴勝會。而隨喜之。豈非希世之盛事乎哉。松雲者。乃予法弟鐵眼和尚之從。且爲人淳朴。寛量大度。百事競來。絕無疲倦之色。若不如是。焉得全這般大志願也。其功其德縱使經于千古。亦何遷乎。玆牧野氏從四位下備州大守成貞公室氏法諱高祥院殿靈巖慈大姉。捨金鑄大銅鐘。成之日請老僧始撞之。且乞銘。因爲銘曰。

武陵海上新創禪園　欲鑄蒲牢鳧氏丕屯
大冶鑄就響震鯨鯤　大千是口山河倒呑
一音纔動警覺曉昏　修洪規範解塵勞煩
觀音大士如入此門　圓通無礙卻忘聞根
幽明莫滯功德難論　由聲生悟直證本源
存沒俱利消融百寃　國平氓泰斯子斯孫

天恩山五百大阿羅漢禪寺鐘銘并引

武藏國天恩山五百大阿羅漢寺者。元祿年中沙門松雲創建也。辛未春。松雲從京師來。謂老僧云。弟子自幼好彫像。今發志願。欲刻五百應眞。爲衆生之福田。然福菲緣微。仰冀和尚慈悲運大方便。俯賜冥庇。老僧嘆曰。此願甚難得。成與不成。必不在福緣多少。全在願心實與不實耳。厥志誠實。則福緣在衆生。莫慮之矣。老僧應爲子發軫也。遂捨衣資彫第一尊。又勸緣瑞聖極法第彫一尊。至癸酉孟春。成五十尊。請老僧點眼供養。有震動飄雪之瑞。此日經始丈六拈華之像。甲戌三月。國母桂昌院大夫人。得賜金彫營十尊也。自爾展轉勸化。三五年之間。其願殆乎成。實不可思議哉。功既聞上。乙亥秋七月。遂至賜地。八月黄檗高泉和尚。偶在官府。請點眼供養丈六拈華之像。丙子夏四月就。新開大阿羅漢寺。啓建旬日之法會。頂禮三千之聖號。普請四衆大伸供養。亦

額 向拝の内に掲ぐる、當寺雪村和尚の筆なり。

右繞三帀堂

額 天王殿の軒に掲ぐる、當寺寶州和尚の筆なり。

天恩山

禪堂 同所右の方の後にあり。

額 同じ堂の軒に掲ぐる、黄檗木庵の筆。

選佛場

鐘樓 庫裡の前にあり、元祿九年牧野備後侯成貞の令室高祥院殿これを建立せらる。銘は弘福寺の鐵牛和尚撰する所なり。

額 同堂の二階の軒に掲ぐる、當寺象先和尚の筆なり。

圓通閣

天王殿 同所右に竝ぶ。内には鐵山寺の布袋和尚、護法、關帝、および韋駄天、毘沙門、増長等の三天、ならびに緊那羅王の木像を安置せり。各々松雲禪師の作にして、享保十六年の造立なり。

禁石 羅漢堂のまへにあり。

刹竿旗 同所左右にたつる。享保十三年三月より建て初むるといへり。

攝待所 同所にならぶ。

額 軒に掲ぐる、細井九皐の筆なり。

喫茶去

藤棚 御腰掛の傍にあり、元文四年己未是を栽ゑしめたまふといへり。

優波離尊者　羅睺羅尊者

十六阿羅漢

賓度羅跋囉墮闍尊者　迦諾迦伐蹉尊者　迦諾迦跋黎墮闍尊者　蘇頻陀尊者　諾矩羅尊者
跋陀羅尊者　迦理迦尊者　伐闍羅弗多羅尊者　戍博迦尊者　半諾迦尊者　羅怙羅尊者
那伽犀那尊者　因揭陀尊者　伐那婆斯尊者
阿氏多尊者　注荼半託迦尊者

以上十六竟

三匝堂（さゞゐだう）　總門の内左の方天王殿にならぶ。本尊は白衣觀音、魚籃觀音、および彌陀、勢至、地藏尊を本尊とす。上の緣は西國、中の緣は坂東、下の緣は秩父、以上百番の札所觀音の靈像を摸擬して、有緣の觀音、また華嚴會上五十三の善知識の像を安置す。當寺中興象先和尙工夫を凝し、無上の法式は右繞三匝を最勝第一とするといへる意をとりて、寛保元年辛酉是を造立せられたり。右繞三匝にして、おぼえず三階の高樓に登る事を得はべり。俗間榮螺堂と唱へ、後世三匝堂を造るの規範とす。其機巧稱するに堪へたり。

常隱行尊者　菩薩慈尊者　拔衆苦尊者
尋聲應尊者
第四百九十一
數却定尊者　注法水尊者　得定通尊者
慧廣增尊者　六根盡尊者　拔度羅尊者
思薩埵尊者　注茶迦尊者　鉢利羅尊者
願事衆尊者
以上第五百竟
十大弟子
大迦葉尊者　舍利弗尊者
阿那律尊者　須菩提尊者　目揵連尊者
阿難陀尊者　富樓那尊者　迦旃延尊者

師子頬尊者　大賢光尊者　摩訶羅尊者
音調敏尊者　師子臆尊者　壞魔軍尊者
分別身尊者　淨解脫尊者　質直行尊者
智仁慈尊者

第四百七十一

具足儀尊者　如意雜尊者　大熾妙尊者
却賓那尊者　昔焔光尊者　高遠行尊者
得佛智尊者　寂靜行尊者　悟眞常尊者
被寃賊尊者

第四百八十一

滅惡趣尊者　性海通尊者　法通尊者
慾不息尊者　攝衆心尊者　導大衆尊者

精進辨尊者

第四百四十一

樂說果尊者　觀無邊尊者　師子翻尊者
破邪見尊者　無憂德尊者　行無邊尊者
慧金剛尊者　義成就尊者　善住義尊者
信證尊尊者

第四百五十一

行敬端尊者　德普洽尊者　師子作尊者
行忍慈尊者　無相空尊者　勇精進尊者
勝淸淨尊者　有性空尊者　淨那羅尊者
法自在尊者

第四百六十一

最上尊者　金剛尊者　驕慢意尊者
最無比尊者　超絶倫尊者　月菩提尊者
持世界尊者

第四百二十一

定花至尊者　無邊身尊者　最勝幢尊者
棄惡法尊者　無礙行尊者　普莊嚴尊者
無盡慈尊者　常悲愍尊者　大塵障尊者
光焰明尊者

第四百三十一

智眼明尊者　堅固行尊者　澍雲雨尊者
不動羅尊者　普光明尊者　心觀淨尊者
那羅德尊者　師子尊尊者　法上尊尊者

第三百九十一

天眼尊尊者　無盡智尊者　徧具足尊者

寶蓋尊尊者　神通化尊者　思善識尊者

喜信靜尊者　摩訶南尊者　無量光尊者

金光慧尊者

第四百一

伏龍施尊者　幻化空尊者　金剛明尊者

花淨尊者　拘那意尊者　賢首尊者

利亘羅尊者　調定藏尊者　無垢爾尊者

天音聲尊者

第四百十一

大威光尊者　自在主尊者　明世界尊者

蘇頻陀尊者　柔德首尊者　金剛藏尊者
瞿伽梨尊者

第三百七十一

日照明尊者　無垢藏尊者　除疑網尊者
無量明尊者　除柔憂尊者　無垢德尊者
光明網尊者　善修行尊者　坐淸涼尊者
無憂眼尊者

第三百八十一

去蓋障尊者　自明尊者　和倫調尊者
淨除垢尊者　去諸業尊者　慈仁尊者
無盡慈尊者　颯陀怒尊者　那羅達尊者
行願持尊者

識自生尊者　讚歎願尊者　定拂羅尊者

聲引衆尊者　離淨語尊者　鳩舍尊者

鬱多羅尊者　福業除尊者　羅餘習尊者

大藥尊者

第三百五十一

勝解空尊者　修無德尊者　喜無著尊者

月蓋尊者　栴檀羅尊者　心定論尊者

菴羅滿尊者　項生尊者　薩和壇尊者

眞福德尊者

第三百六十一

須那刹尊者　喜見尊者　韋藍王尊者

提婆長尊者　成大利尊者　法首尊者

金富樂尊者

第三百二十一

頓悟尊者

燈導首尊者　周陀婆尊者　住世間尊者

須達那尊者　甘露法尊者　自在王尊者

士應眞尊者　超法雨尊者　德妙法尊者

第三百三十一

堅固心尊者　聲譽應尊者　應赴供尊者

塵劫空尊者　光明燈尊者　執寶炬尊者

功德相尊者　忍生心尊者　阿氏多尊者

白香象尊者

第三百四十一

服龍王尊者　闍夜多尊者　秦摩利尊者

義法勝尊者　施婆羅尊者　闍提魔尊者

王住道尊者

第三百一

無垢行尊者　可波羅尊者　聲皈依尊者

禪定果尊者　不退法尊者　僧伽耶尊者

達磨眞尊者　持善法尊者　受勝果尊者

心勝修尊者

第三百十一

會法藏尊者　常歡喜尊者　威儀多尊者

頭陀僧尊者　議洗腸尊者　德淨悟尊者

無垢藏尊者　降伏魔尊者　阿僧伽尊者

第二百七十一

利婆多尊者　普賢行尊者　持三昧尊者

威德聲尊者　利婆多尊者　名無盡尊者

阿那悉尊者　普勝山尊者　辨財王尊者

行化國尊者

第二百八十一

聲龍種尊者　誓南山尊者　富伽耶尊者

行傳法尊者　香金手尊者　摩挐羅尊者

光普現尊者　慧依王尊者　降魔軍尊者

首燄光尊者

第二百九十一

持大醫尊者　藏律行尊者　德自在尊者

彌遮仙尊者　尼駄伽尊者　首正念尊者
淨菩提尊者

第二百五十一

梵音天尊者　因地果尊者　覺性解尊者
精進山尊者　無量光尊者　不動意尊者
修善業尊者　阿逸多尊者　孫陀羅尊者
聖峯慧尊者

第二百六十一

曼殊行尊者　阿利多尊者　法輪山尊者
衆和合尊者　法無住尊者　天鼓聲尊者
如意輪尊者　首光焰尊者　無比校尊者
多伽樓尊者

最勝意尊者　須彌燈尊者　沒特伽尊者
彌沙塞尊者　善圓滿尊者　波頭摩尊者
智慧燈尊者　栴檀藏尊者　迦難留尊者
香焰幢尊者

第二百三十一

阿濕早尊者　摩尼寶尊者　福德首尊者
利婆彌尊者　舍遮獨尊者　斷業尊者
歡意智尊者　乾陀羅尊者　莎伽陀尊者
須彌望尊者

第二百四十一

持善法尊者　提多迦尊者　水潮聲尊者
智慧海尊者　衆具德尊者　不思議尊者

淨眼尊者

第二百一

波羅密尊者　俱那含尊者　三昧聲尊者

菩薩聲尊者　吉祥咒尊者　鉢多羅尊者

無邊身尊者　賢劫首尊者　金剛味尊者

乘味尊者

第二百十一

婆私吒尊者　心平等尊者　不可比尊者

樂覆藏尊者　火焰身尊者　頗羅墮尊者

斷煩惱尊者　薄俱羅尊者　利婆多尊者

護妙法尊者

第二百二十一

善意尊者　愛光尊者　花光尊者
善見尊者　善根尊者　德項尊者
妙臂尊者

第百八十一

龍猛尊者　弗沙尊者　德光尊者
散結尊者　淨正尊者　善觀尊者
大力尊者　電光尊者　寶伏尊者
善星尊者

第百九十一

羅旬尊者　慈地尊者　慶友尊者
世友尊者　滿宿尊者　闍陀尊者
月淨尊者　大天尊者　淨藏尊者

第百五十一

法眼尊者　梵勝尊者　光曜尊者
直意尊者　摩帝尊者　慧寬尊者
無勝尊者　曇摩尊者　歡喜尊者
遊戲尊者

第百六十一

道世尊者　明照尊者　普等尊者
慧作尊者　助歡尊者　難勝尊者
善德尊者　寶涯尊者　觀身尊者
花王尊者

第百七十一

德首尊者　喜見尊者　善宿尊者

羅漢堂
護法神宮

正面圖

西羅漢堂西面之圖

西羅漢堂東面之圖

正面圖

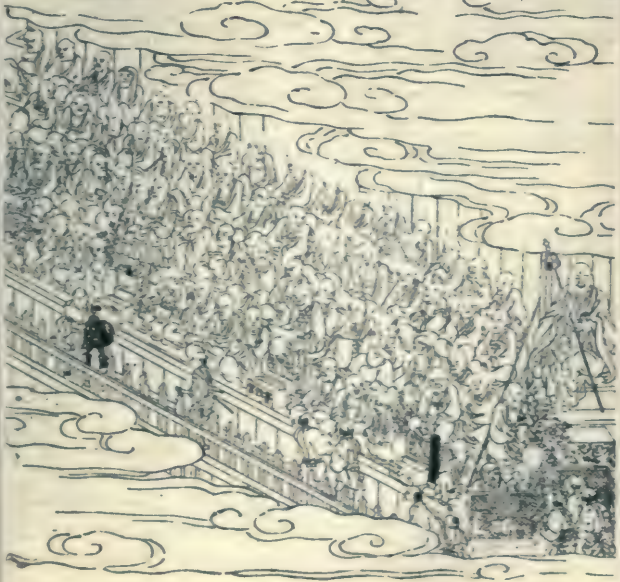
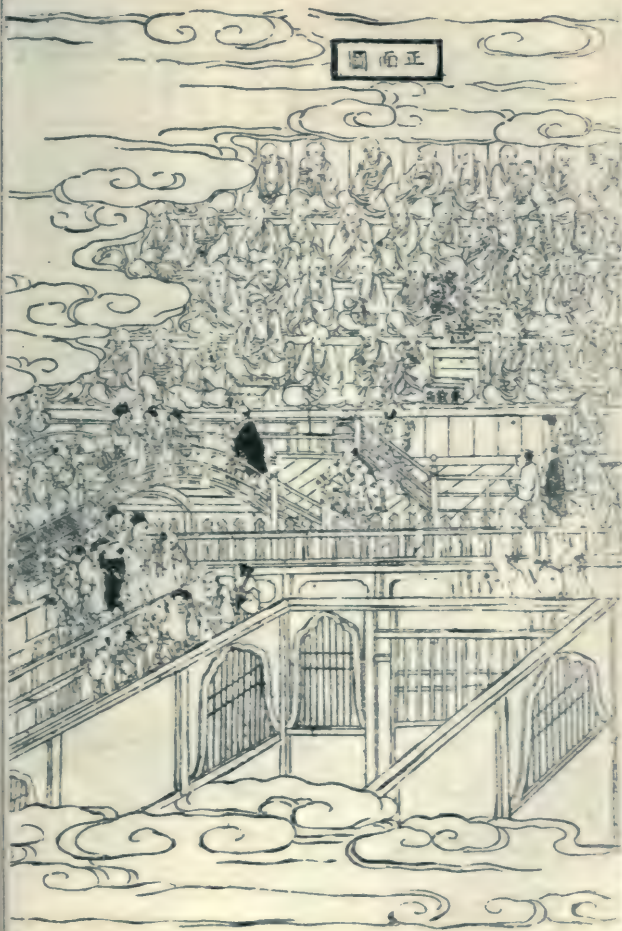
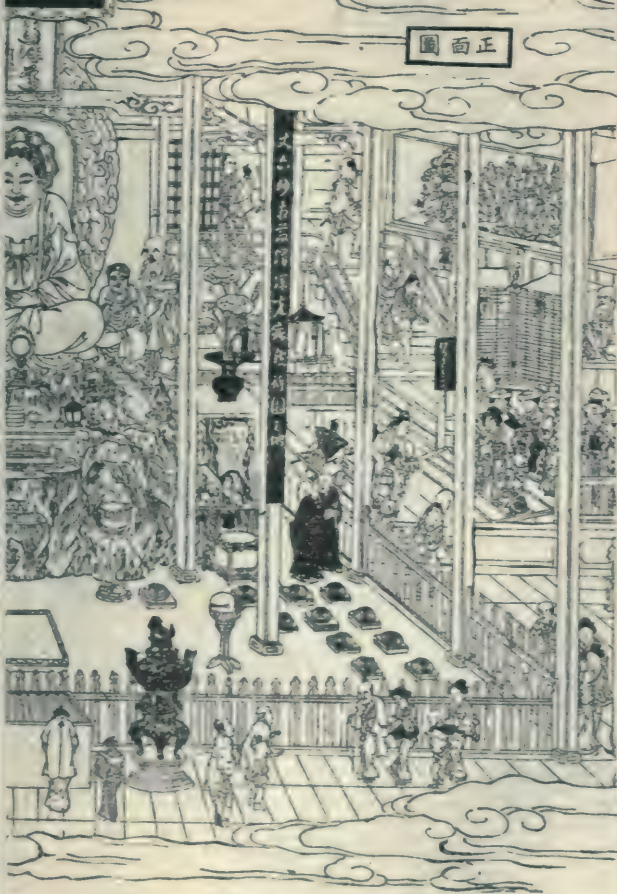
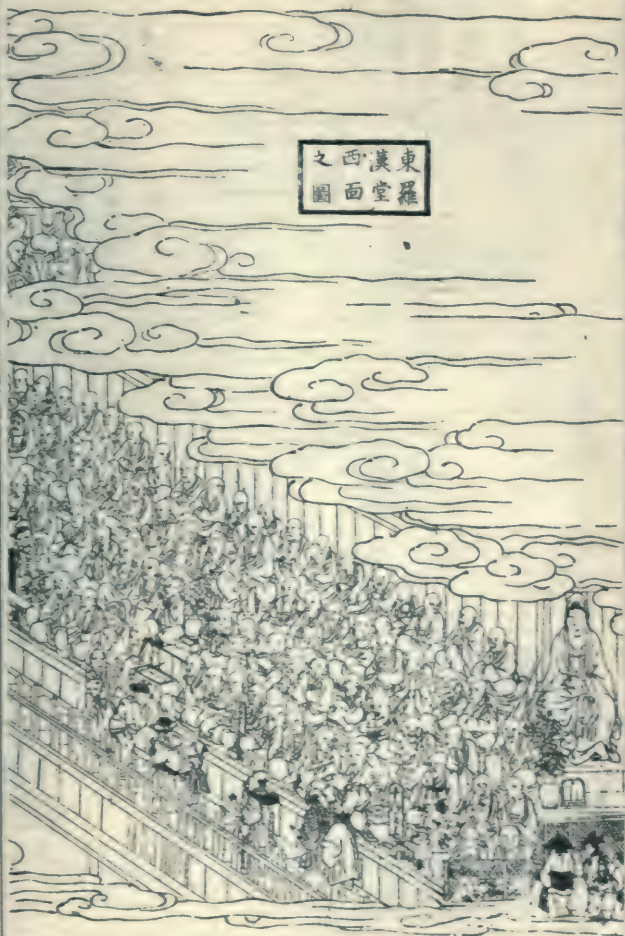
正面圖

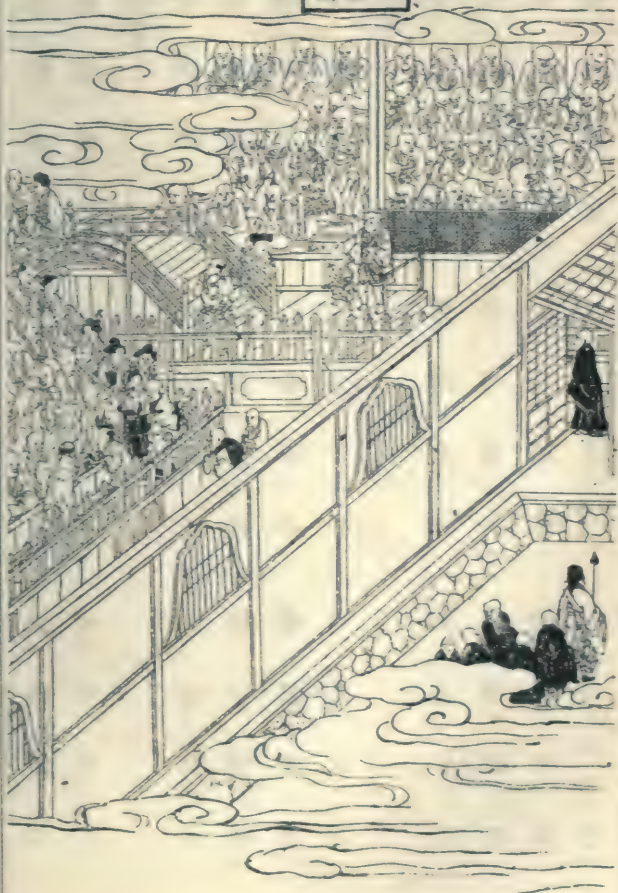
正面中尊之圖

正面圖

正面圖

東羅漢堂西面之圖

五百羅漢堂内相之圖　共五枚

東羅漢堂東面之圖

正面圖

調達尊者　普光尊者　智積尊者
寶幢尊者

第百三十一

善慧尊者　善眼尊者　勇寶尊者
寶見尊者　慧積尊者　慧持尊者
寶勝尊者　道仙尊者　帝綱尊者
明綱尊者

第百四十一

寶光尊者　善調尊者　奮迅尊者
修道尊者　大相尊者　善住尊者
持世尊者　光英尊者　權教尊者
善思尊者

除憂尊者　大忍尊者　無憂自在尊者

妙懼尊者　嚴土尊者　金髻尊者

雷德尊者　雷音尊者　香象尊者

馬頭尊者

第百十一

明首尊者　金首尊者　敬首尊者

衆首尊者　辨德尊者　羼提尊者

悟達尊者　法燈尊者　離垢尊者

境界尊者

第百二十一

馬勝尊者　天尊尊者　無勝尊者

自淨尊者　不動尊者　休息尊者

修行不著尊者

第八十一

畢陵伽蹉尊者　摩利不動尊者　三昧甘露尊者

解空無名尊者　七佛難提尊者　金剛精進尊者

方便法藏尊者　觀行月輪尊者　阿那邠提尊者

拂塵一味尊者

第九十一

摩訶俱絺尊者　辟支轉智尊者　山項龍聚（一ニ象）尊者

羅網思惟尊者　劫賓覆藏尊者　神通億具尊者

具壽俱提尊者　法王菩提尊者　法藏永劫尊者

善注尊者

第百一

金則破魔尊者　願護世間尊者　無憂禪定尊者
無作慧善尊者　十劫慧善尊者　栴檀德香尊者
金山覺意尊者

第六十一

無業宿盡尊者　摩訶利利尊者　無量本行尊者
一念解空尊者　觀身無常尊者　千劫悲願尊者
罹羅那含尊者　解空定空尊者　成就因緣尊者
堅通精進尊者

第七十一

薩陀波崙尊者　乾陀訶利尊者　解空自在尊者
摩訶注那尊者　見人飛騰尊者　不空不有尊者
周利槃特尊者　罹沙比丘尊者　師子比丘尊者

第三十一

破邪神通尊者　堅持三字尊者　阿㝹樓駄尊者

鳩摩羅多尊者　毒龍皈依尊者　同聲稽首尊者

毘羅眣子尊者　伐蘇密多尊者　闍提首那尊者

僧法耶舍尊者

第四十一

悲密世間尊者　獻花提記尊者　眼光定力尊者

伽耶舍那尊者　莎底苾蒭尊者　婆闍提婆尊者

解空無垢尊者　伏陀密多尊者　富那夜舍尊者

伽耶天眼尊者

第五十一

不著世間尊者　解空第一尊者　羅度無盡尊者

栴檀藏王尊者　施幢無垢尊者　憍梵般提尊者
因陀得慧尊者

第十一

迦那行那尊者　婆蘇槃豆尊者　法界四樂尊者
優樓頻螺尊者　佛陀密多尊者　那提迦葉尊者
那延羅目尊者　佛陀難提尊者　末田底迦尊者
難陀多化尊者

第二十一

優波毱多尊者　僧迦耶舍尊者　敎說常住尊者
商那和修尊者　達磨婆羅尊者　迦耶伽葉尊者
定果德業尊者　莊嚴無憂尊者　憶持因緣尊者
迦那提婆尊者

の嘆あらしむ。同八年乙亥夏五月、（鐘の銘に七月とす。）公聽に達し、本境一千五百畝を賜ひ、又天恩山羅漢寺の號を賜ふ。依て假に堂宇を造立して、佛像を遷せり。同年八月、黄檗高泉和尚、偶東行あり、迎へて點眼の導師とす。又先師鐵眼和尚をして、開山祖とす。是其原を貴むの故とぞ。又其時黄檗山の末寺となる。松雲禪師、其頃既に伽藍建立の企ありといへども、時縁至らずして、寶永七年庚寅、一旦疾に罹り、月を越えて起きず、終に同年秋七月十一日、奄然として化す。時に歳六十有三なり。（法臘四十二年。）

第一

阿若憍陳如尊者　阿泥樓頭尊者　有賢無垢尊者

須跋陀羅尊者　迦留陀夷尊者　聞聲得果尊者

其二

五百羅漢寺
三匝堂

文九年己酉、十二歳攝の瑞龍精舍に入りて、鐵眼禪師に隨ひ、薙髪して僧となる。後游方の懐あるにより、師の許を辭して、海西に飄歴し、豐前國羅漢寺に至り、唐土天台山の逆流、竝に賢順といへる二僧、一夜に造立せしといへる五百聖者の石像を瞻禮し、恭敬日々に厚く、其後潛に五百羅漢の像を手彫せんとするの意あり。歸省の日、鐵眼禪師、果して其命あるを以て、遂に貞享年間、江戸に來り、元祿辛未、始めて淺草寺の境内壽松院に就て假屋を儲け、衆人をすゝめ、羅漢の木像を彫刻す。弘福寺の鐵牛和尙、衣資を喜捨し、一尊を刻ましむるといへども、時至らずして、施ある事微く、こゝに歳月を歷たり。然るに同壬申の年、大倉前一十六員の道俗、結盟補佐す。癸酉孟春に至り、五十尊成る。甲戌三月、忝なくも御國母桂昌一位尼公、金を賜り、佛像造立の資となし給ふ。此時十尊を彫營す。しかありしより緣化響の應ずるが如く、施財日々に多く、竟に一十餘霜を經て、完く本尊丈六の釋迦佛、及び阿羅漢等、すべて五百三十有餘體の佛像、縹緲として現ず。其梵相の奇古、坐立の威儀、儼然として生るが如く、其妙手常人のおよばざる所あり。瞻禮する者をして、靈山一會未散

天恩山五百大阿羅漢禪寺　本所五ツ目、竪川より南にあり。黄檗派の禪林にして、河東第一の名藍たり。開山は鐵眼禪師、中興は象先和尚、又松雲禪師を以て、開基の大祖と稱す。

佛殿　本尊釋迦牟尼佛拈華像 長一丈六尺、下に巨石を疊みて座を設く。 脇士文殊、普賢 各高さ八尺 阿難、迦葉 各高さ九尺 左右の階壇に列れる所の五百阿羅漢の像は、各等身にして、共に松雲禪師彫刻する處なり。

額　本尊の上に掲くる、黄檗隱元老人の筆なり。

聯　同堂内左右の柱に掲くる、象先の筆なり。

額　同堂内の正面に掲くる、黄檗即非の筆なり。

額　佛殿二重家根の軒に掲くる、隱元和尚の筆なり。

五百羅漢造立之來由

松雲禪師は、京兆の人、寛雄にして、すこしく正信を具す。 或人云く、松雲禪師始めは商工にして、俗稱を九兵衞と呼びたりしとなり。 寛

月の友
芭蕉

小名木川
五本松
深川の末
川上と
この

猿江
摩利支天祠
霊験炳然として
諸人常に絶えず
来由は拾遺江戸
名所図会にあり

猿江泉養寺の池中に
生ずるところの蓮花は
重辨紅花にして花形
牡丹に髣髴たり故に
奇観とす寛政
九年の晩夏
はじめて
この花を
栽しより
今に至り
年々に
花あり

回向院開帳参（ゑかうゐんかいちやうまゐり）

奉納所

不見烟中寺
但聞烟外鐘
江城秋色遠
落日隠高峯
白石

回向院

事を推知し、新に佛體を彫刻して、小祠を營み、當寺の護法神とあがめたりといへり。

馬頭觀世音 本堂の前左の方にあり、明暦中、幕下御慈愛の名馬斃したるを、深くあはれませたまひ、當寺に葬り弔ふべき旨台命ありしにより、開山上人馬頭觀音にあがめけるといへり。

圓光大師堂 同じならびにあり、圓光大師、播州室津の遊女某の乞ふにまかせて作りたまふ、時に船子出船を急ぎ告げければ、御首ばかりをあたへらる。其後彼遊女土をつかねて全身を造りそへたりとなり。遊女は尼となり。念佛三昧にして、終に七十五歳にして大往生を遂げたりしと。

蓮池 信譽上人、常に蓮實をもて念珠に代へて稱名す。其蓮實の積る事三十五石におよべりとなり。今この池に生ずる蓮は、この種より生ずるところなりといへり。

樟 是も信譽上人手づから植ゑられしとて、同じ池のかたはらにあり。

阿彌陀如來銅像 本堂の正面にあり。坐像一丈六尺あり。

相傳ふ、明暦三年丁酉の春、（正月十八日 同十九日）大江戸大火に仍りて燒死する者、凡そ十萬八千餘人也。時に台命ありて、此地を卜し、方六十許歩の地に、件の燒死の骸を埋藏し、上に一堆の塚を築き、號けて漏澤園と唱ふ。乃ち亡魂追福の爲、增上寺第二十三世貴屋大和尚をして、一宇の梵刹を創基せしめらる。當寺是なり。（昔は諸宗山無縁寺といふとぞ。明暦大火の事實は、むさしあぶみといへる冊子に見ゆ。）諸宗の僧を集め、一七日の間、塚の前に於て、千部の經を讀誦せしめ、大法會修行あり。されども住持なかりしかば、其頃小石川智香寺の信譽自心上人、道光世に隱れなかりしかば、當寺に移住せしめ、第二世にて開山と稱したまふ。依て上人、彼塚上に堂宇を建營し、長に幽魂の冥福を助けんが爲、不斷念佛の道場とせられたり。（因に云ふ、信譽上人佛像を造るに妙を得て、惠心僧都の彫刻に髣髴たり。當院に安ずる所の佛像は、悉く此上人の彫造なりといへり。）

其事を所請せしに、果して靈驗あるを以て、竟に鍼術に妙を得たり。故に世に稱して杉山流といふ。延寶の頃、台命を蒙り、營中に召され賤近す。元祿のはじめ、今の地一丁四方を賜ひ、醫者の總錄となさしめられけるとなり。また京師にても清家庵の地をたまふ。ここにおいて一派の規矩備はれり。毎年二月十六日、六月十九日には、醫者寶前に集會して、琵琶を彈じ平曲を奏す。京師積塔會にならうて行ふ所なり。

國豐山回向院　兩國橋の東詰にあり。昔は此邊も牛島の中にして、大西と稱したる由、事跡合考といへる册子に見ゆ。當寺は稱念上人の遺風にして、捨世一派の佛域たり。明曆三年丁酉の春、大火の時、燒死の輩の冥魂追福のため、毎歲七月七日、大施餓鬼法會を修行す。又同八日、佛餉施入の檀主、現當兩益の法事あり。總門の額に國豐山とあるは、緣山定月和尚の筆なり。

本堂　本尊阿彌陀如來、坐像壹丈許あり。元祿十六年の冬、當寺回祿の災にかゝりて、むかしの本尊金銅の阿彌陀佛鎔けたるゆゑに、當寺第四世[illegible]上人[illegible]和尚、ふたゝび今の本尊を造立す。堂前に存する所の銅像の尊形をもて本尊とす。この堂、むかしは今の方丈の地にありしを、天和二年回祿の後、當寺第三世賢譽和尚、今の地にうつされたりといふ。

備中千體阿彌陀如來　後堂に安置す。俗稱して裏の院といふ。本尊長一尺一寸、惠心僧都の作にして、異本尊と同體なりといふ。緣山二十三世の貫首[illegible]上人念持佛にして、明曆の大火に燒死溺死せる所の十萬八千餘人の亡者を回向あるべき旨命ぜられ、其頃官府より僧の佛容を許容せしめたまひしかば、この靈像を本尊となして回向ありしとなり。故に燒死溺死の亡魂得脫の如來とも稱したり。

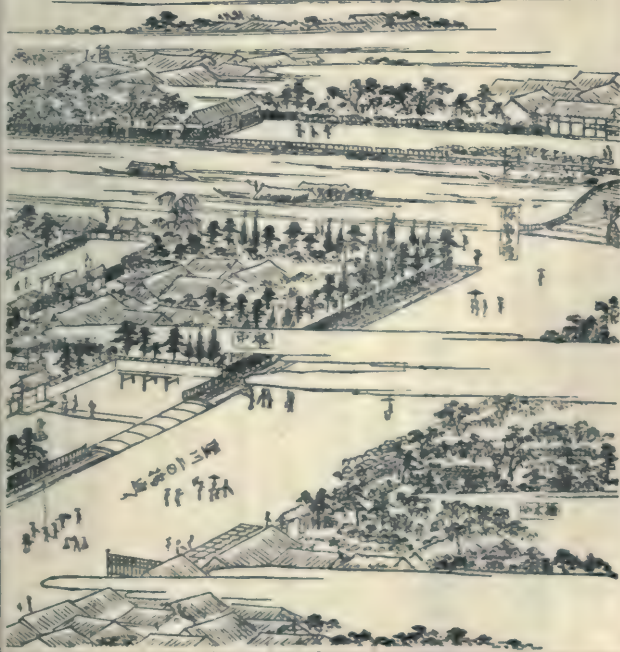
三佛堂　本堂の右にあり、彌陀、釋迦、大日等の三尊を安置す。この堂は牢死刑死の者の幽魂追福の爲、萬治年間官府より建立なしたまひ、堂前の石塔婆に其旨趣を彫り付けられてあり。當寺より、日々に大江戸の市街を順行し、佛餉を乞ふ所の僧徒十六口、常にこの堂中に居れり。

一言觀音　堂の傍にあり、本尊聖觀音惠心僧都の作なり。南都招提寺より遷すといふ。有信の人ありて、至心にこの本尊を念ずれば、其所願一言にして成就する故に、靈應の著きを表していふと也。

辨財天祠　同所にあり、世に藁裹「ワラツト」辨財天と稱す。昔當寺の開山上人、勤行念佛の間、佛堂の前にして、藁裹に辨財天の御首ばかりを入れたるを拾ひ得たり。まさしく弘法大師の作なるべき

辨財天社
深川八幡御旅所

本堂
方丈

本所
彌勒寺

古は廣々たる原野なりしに、此頃攝州の産にて深川八郎右衛門某と稱する人ありて、この地に居住す。然るに慶長元年丙申、大將軍家はじめて此地に至らせたまひ、此八郎右衛門に地名を問はせたまひしかど、舊より此八郎右衛門の外に住む人もなき荒廢の地なれば、地名もなきよし答へ奉りしに、然らば汝此地を開創し、苗字深川の文字を地名に唱へまうすべき旨、嚴命ありしより、深川の地名おこるといふ。この八郎右衛門の子孫數世、此地に住して里正たりしが、寶曆の頃、故ありて其家斷絶せり。されど泉養寺は八郎右衛門が香花院「ボダイショ」なる故に、今もなほ深川氏累世の墳墓存せり。同所砂村新田の東に、八郎右衛門新田と稱ふる耕地あるも、此人開發せし故の名なり。今土俗あざなして其地を四十丁村とよべり。

因に云ふ、この泉養寺の池に、重瓣紅花の蓮あり、花形牡丹に髣髴たり。故に開花の時を待ちてこゝにあそぶ人少なからず、寛政十年の晩夏、初めて此花を生ぜしより今に至り年々しかり。奇觀とすべし。

萬德山彌勒寺 同所二丁あまりを隔てて、彌勒寺橋の北詰にあり。眞言新義の觸頭江戸四箇寺の一室なり。本尊は藥師如來、世に河上藥師と稱せり。傳記失たりとて、其來由を知らず。中興開山を、宥鑁上人と號す。總門の額に、彌勒寺と書せしは、朝鮮國雪月堂の筆跡なり。當寺舊柳原の地にありしを、天和二年、回祿の後、此地へ移されたり。毎月八日十二日を緣日として參詣多し。

深川八幡宮御旅所 大川端、大船倉の前にあり。富賀岡八幡宮祭禮の砌は、神輿此地へ渡らせらる。

辨財天社 同所一の橋の南の詰にあり。祭る所相州江島に同じ。元祿のはじめ、惣撿挍杉山氏勸請す。己巳の日參詣多し。相傳ふ、杉山撿挍は奧州の産にして、信都「ケイイチ」といふ。その志天下に名をなさんことを欲し、三七日の間飲食を斷ちて、相州江嶋に至り、天女窟に參籠し、至心に

花の雲鐘は上野か淺草か　同

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜哉　同

明月や角へさしくる汐がしら　同

明月や池をめぐりて夜もすがら　同

初雪やさいはひ庵にまがりあり　同

いづれも此地にありし比の吟詠なり。

翁は伊賀國上野の産、俗性は松尾氏宗房といふ、通稱は忠右衛門、或は甚七郎ともなづくるとぞ。實に中興の俳仙にして、一家の祖たり。業を拾穗軒季吟叟にうけて、風月の才に長ず。西行宗祇の跡を追慕するの志ありて、身を風雲にまかせ、生涯行遊を旨とし、吉野龍田の花紅葉にうかれ、更科越路の月雪にさまよひ、終に元祿七年十月十二日難波の僑居にして身まかりぬるよし、其角があらはせる芭蕉翁終焉の記にみえたり。

神明宮　同所森下町にあり。猿江の泉養寺、別當たり。（天台宗東叡山に屬す。この寺むかしは社地より南、今の井上家藩邸の地にありしとなり。）毎歳正月と、九月の十三日には、舊式の祭祀あり。是を歩射と號く。相傳ふ、昔此地開創の里正深川八郎右衛門某、宅地に伊勢兩皇大神宮を勸請なし奉り、泉養寺の開山秀順法印をして奉祀せしむるといふ。此地は深川氏宅地の舊蹟なりといへり。（附ていふ、泉養寺記錄に、深川の民立の事實を載す。其略に云く、深川の地、往

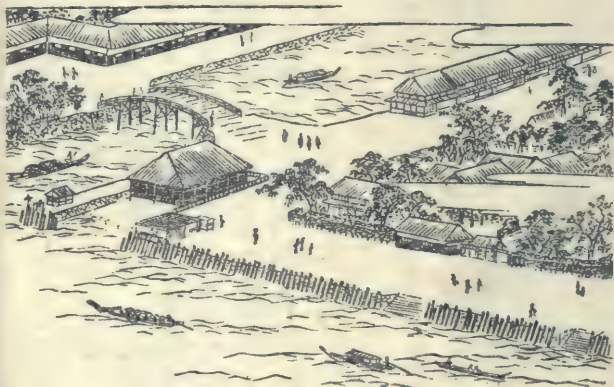
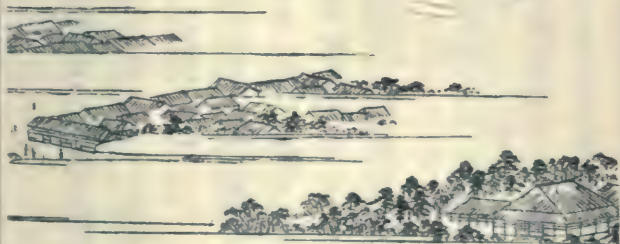
芭蕉庵（ばせをあん）

古池や蛙飛こむ水の音

桃青

年々になんなりぬ。一とせみちのくの行脚おもひ立ちて、芭蕉庵すでに破れんとすれば、かれは籬の隣に地をかへて、あたり近き人々に、霜の覆ひ、風のかこひなどかへす〴〵頼み置きて、はかなき筆のすさみにも書き殘し、松はひとりになりぬべきにやと、遠き旅寢の胸にたゞまり、人々の別れ、芭蕉のなごり、ひとかたならぬ侘しさも、終に三年の春秋を過して、再び芭蕉に涙をそゝぐ、今年五月の半花橘のにほひもさすがに遠からざれば、人々の契りも昔にかはらず、猶此あたりえたちさらで、舊き庵もやゝちかう、三間の茅屋つき〴〵しう、杉の柱いと淸げに削りなし、竹の枝折戸やすらかに、芦垣あつうしわたし、南に向ひ池に臨んで水樓となす。地は富士に對して柴門景をすゝめてなゝめなり。浙江の潮三股の淀にたゝへて、月を見るたよりよろしければ、初月の夕より、雲をいとひ、雨をくるしむ、名月のよそほひにとて、まづ芭蕉をうつす。其葉ひろくして琴をおほふにたれり。或はなかば吹折れて鳳鳥の尾を痛ましめ、靑扇やぶれて風を悲しむ。たま〳〵花咲くも花やかならず。莖太けれども斧にあたらず。かの山中不材の類木にたぐへて、その性よし。僧懷素は是に筆をはしらしめ、張横渠は新葉を見て修學の力とせしとなり。予そのふたつをとらず。たゞこのかげに遊びて、風雨に破れやすきを愛す。

古池や蛙とびこむ水のおと　　ばせを

深川
霊雲院

なり。（同巻本所靈山寺の條下を合せ見るべし。）

天王山靈雲院　清澄町、大川の端、萬年橋の南詰にあり。禪宗にして、武州越生の龍穩寺に屬す。本尊は聖觀世音、開山は放光明東明和尙と號く。寶曆七年丁巳、台命あり。依て創建する所の蘭若なり。（開基の年歷久しきにあらざるをもて、世俗深川の新寺と稱ふ。）

芭蕉庵舊址　同じ橋の北詰、松平遠州侯の庭中にありて、古池の形今なほ存せりといふ。延寶の末、桃青翁、伊賀國より、始めて大江戸に來り、杉風が家に入り、後剃髮して素宣と改む。又杉風子より、芭蕉庵の號を讓請け、夫より後、此地に庵を結び、泊船堂と號す。（杉風子俗稱を鯉屋藤左衛門といふ。江戸小田原町の魚牙子たりし頃の籞〔イケス〕やしきなり。後此業をもせざりしかば、生洲〔イケス〕に魚もなく、おのづから水面に水草覆ひしにより、古池の如くになりしゆゑに、古池の口ずさみありしといへり。）

芭蕉を移す辭

菊は東籬にさかえ、竹は北窓の君となる。牡丹は紅白の是非ありて世塵にけがさる。荷葉は平地にたへず、水清からざれば花咲かず。いづれの年にや、栖を此境にうつす時、芭蕉一もとを植う。風土芭蕉の心にやかなひけん、數株莖をそなへ、その葉茂りかさなりて庭をせばめ、萱が軒端もかくるゝばかりなり。人呼んで草庵の名とす。舊友門人ともに愛して、芽をかき根をわかちて、所々におくる事

後文祿二年癸巳、道三河岸へ移され、又柳原へ地を替へさせられたりしが、終に天和三年に至りて、今の地にうつる。（むかし御堀邊にありし頃は、正月三元日の間は、はゞかりて鉦鼓を鳴さざりしとぞ、其舊例にしたがひ、今も正月三元日の間は鉦鼓を鳴さずといへり。）

龍德山雲光院 光嚴敎寺と號す。同所西に隣る。淨土宗江戸四箇寺の一にして、本尊阿彌陀如來の像は、京師東山獅子谷忍澂上人の作といふ。開山は還蓮社往譽上人潮呑和尚と號す。（觀智國師の法嗣にして、黑谷淸心庵に寂せり。）本願は阿茶局なり。（甲州武田家の臣、飯田筑後守の孫、同久左衛門某の女にして、後に駿州今川氏義元の士神尾孫兵衛久宗の室となり、同刑部少輔守世の母なり。）局は大將軍家昵近の侍女にして、元和六年庚午、女御入内の時、供奉の功により、從一位に叙せらる。當寺創開の砌も、黃金二千枚、および堂材を下し賜ふ。（雲光院は局の法號也、雲光院殿從一位尼公松譽周栄大姉と號す。むかし柳原堤の南にありし頃は、當寺を光與寺と號せり。天和二年回祿の災にかゝる、依ておなじく三年今の地に移れり。）雲光院の三大字の額は、後水尾帝の勅を奉して、良恕法親皇筆を染められしといふ。（昔は本堂に掲る、今は開山堂に收めてあり。）

五本松 同所小名木川通り、大島にあり。（或人云ふ、舊名女木三谷「チナギサヤ」なりと。古き江戸の圖に、うなぎ澤とも書けり。江戸雀小名木川に作る。又此地に鍋匠「ナベツクリ」の家ある故に、俗間あざなして鍋屋堀とよべり。）九鬼家の構の中より、道路を越えて、水面を覆ふ所の古松をいふ。（昔は此川筋に同じ程の古松五株までありしとなり。他は枯れて、たゞ此松樹のみ今なほ蒼々たり。）また此川を隔てて南岸の地は、知恩院宮尊空法親皇御幽棲の舊跡

地藏尊石像　（當寺境内に安置す。始めは卵塔の中にありて、人の印の石なりしが、享保のはじめ、靈驗ありとて大いに群集せしとなり。今一字の香堂を建て、これを安置す。寄願するに、なほ靈應いちじるしといへり。）

一蝶寺　同所東の方、海邊新田藪の内にあり。京師妙心寺派の禪宗、蒼龍山宜雲寺と號す。元祿七年甲戌、創建の梵園にして、卓禪和尚開山たり。英一蝶翁、曾て當寺に寓居す。其頃の遊とて、佛殿、僧房等の屛障、悉く翁の畫なり。故に世俗一蝶寺と字す。（一蝶の傳は第三巻に見えたり。）

日照山法禪寺　同所南の小路にあり。淨土宗にして、京師知恩院に屬す。本尊阿彌陀如來の像は、佛工安阿彌の作なり。（世に海中出現の靈像と稱す。）左右二十五菩薩の像は、雲中に羅列して、常に行者を護念し給ふ所の體粧を摸擬す。（奥院と稱するも、また極樂上品上生の體相ありて、莊嚴すこぶる美を盡せり。故に世俗極樂寺と字す。）開山は長蓮社英譽心阿上人と號す。（慶長七年九月廿二日に化寂す。）濃州惠那郡粕塚の住人、俗性は伊賀氏にして、三郎五郎則俊と號く。（伊賀左衞門佐則吉の三男なり、後伊賀守に改む。）弘治元年乙卯、粕塚に一城を築き、江田の城と號け、かしこに居住す。（齋藤山城守の旗下たりしが、永祿三年織田家に從ふ、終に信長の爲に亡ぼさる。）後出家して、駿州に至り、中島と云ふ地に閑居をかまへ、多良庵と號け、雲碩と改めて、淨業を修行しけるに、（多良庵今了善院と云ふ。）天正十八年、關東御打入の頃、道德殊勝の聞えあるを以て、大江戸に召され、品川において寺境を賜ふ。（今品川にも法禪寺あり。）其

て、五百の義龍恒に蟠る。然るに珂山和尚の世、（當寺第二世松蓮社大譽頑誉と號す。泉州堺の人なり。）明暦丁酉の回祿に罹り、悉く灰燼となるの後、今の地に移さるゝといへり。其頃は、今の地も海濱にして、輙く寺院構營もなりがたかりしを、珂碩和尚（珂山和尚の弟子にして、奥澤九品佛の開基也。）十方に勸進して、地を築固め、諸堂を建立せられしとなり。

當知山本誓寺　重願院と號す。同通りの向側にあり、淨土宗江戸四箇寺の一員たり。（京都知恩院に屬せり。）唐佛の阿彌陀如來を本尊とす。相傳ふ、此本尊は相州小田原の漁者（其名を詳にせず。）漁網を沈して、彼地の海中に得て、後靈示に任せ、當寺に安じ奉るといへり。當寺往古は小田原にありて、傳蓮社曜譽僩冏和尚（西明師は北總飯沼弘經寺の第三世也。）創建し、藤枝氏開基の淨舍なりしが、文祿四年丁未、嚴命に依て、寺を大江戸に移す。（其舊地は今の御郭内、日比谷御門の邊なり。）貞蓮社大譽上人文賀和尚、中興の開祖となる。（傳燈系圖に念譽とあり。俗姓は田中氏、相州小田原の人なり。無双の碩學にして、門下に名僧あまたありといへり。）其後馬喰町の邊にて地を賜ひし頃、水戸中納言賴房卿の御母堂英勝院殿、當寺を修造なし給へり。（當寺もと馬喰町にありし頃までは、朝鮮の三使來聘のみぎりは鴻臚舘たり。天和二年回祿の後、今の地にうつりてよりは、東本願寺を以て朝鮮人の旅舘に定め給へり。）

内に阿部侯侍從忠秋の母堂、加藤主計頭淸正の息女、蓮成院殿日宗大姉の墓あり。

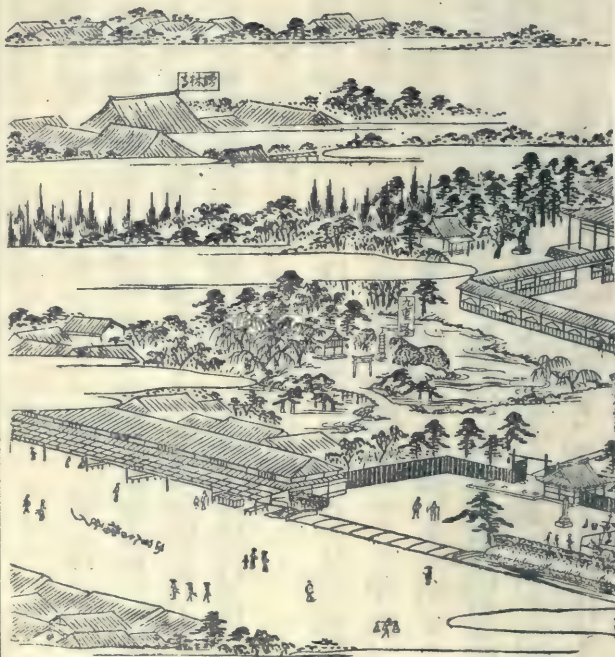
道本山靈巖寺　同じ北に隣る。淨土宗關東十八檀林の一室にして、宏壯の梵刹なり。本尊は阿彌陀如來、開山は靈巖和尚たり。（和尚諱は松風、檀蓮社雄譽と號す。淨土高僧傳に、姓は里見氏、南總小絲の産なり、十三歳同縣靑龍寺の秀岩師の室に入り剃染す、其性明敏にして、寔に檀林の英たり、寛永十八年九月一日化寂す、報壽八十云々。又淨土傳燈系圖に、南總天羽郡佐貫の人、或云ふ駿州府中の産、姓は今川氏、沼津淨運院開山の法嗣なりと。和尚開創の精舍數箇寺あり、枚擧にいとまあらず。依て是を略す。）台旨によりて、寺産を附せらる。寮舍僧坊、甍を連ねて魏然たり。正元坊が造立せし銅像の地藏尊は、大江戸六地藏の一員にして、總門の内、正面に對ふ。每歳四月朔日より、同十日まで、阿彌陀經千部讀誦修行あるがゆゑに、道俗群詣せり。相傳ふ、寛永年間、當寺開山靈巖和尚、或日大江戸の東渚を顧みて、侍者に謂て云く、我大藍を此地に建てん。侍者の云く、江潮浪高く、鉢盂底空し、爭で巨楹碩梁を架せん。師笑つて云く、俟て、夫日あらん。於是、師化疏を筆し、諸檀家を勸勵す。一簣每に十念して、脈譜を結縁するが故に、四輩競ひ靡き、廣汀日あらずして陸地となる。（今靈巖嶋と稱するは其舊地也。）其地早く成て梵刹を開創し、靈巖寺と號す。こゝに於て、學資五十石を賜ふ。爾しより法幢盛に起り

深川にとしくれて

川の音藪の起臥としくれぬ　　同

法苑山淨心寺　同じ通り正覺寺橋より北の方、右側にあり。日蓮宗甲斐國身延山に屬す。乃ち身延山の弘通所と稱せり。萬治元年戊戌創建の寺院にして、開山は通遠院日義上人と號す。中興は覺成院日念上人たり。本尊に釋迦如來の像を安ず。（この本尊は延山の日暁師より日念上人授與ありて、當寺にうつしたてまつるとなり。）

祖師堂（本堂の左にならぶ、日蓮上人の像を安ず。）　七面堂（同じ堂前にありて、當寺の鎭守とあがむ。此七面尊は身延山奥の院の七面と同作にて、かしこより當寺に遷すといふ。）

相傳ふ、當寺は淨心院殿妙秀大姉の菩提を弔はせ給はんが爲に、御建立ありし精舍なりと。當時淨心尼は小堀正一入道宗甫の妾なり。寛永十八年辛巳、大樹御誕生ありし頃、正一入道の忠心を補ふの一分に備へんと、春日の局に就いて御乳母となり、大樹を育し奉る。故に淨心尼卒するの後も、なほ生前の勤勞を思召し出され、萬治元年戊戌、當寺境内若干の地を封じ賜ひ、又堂舍經營の料として、大に資財を喜捨し給ひ、日義上人をして、當寺開山たらしむ。乃ち淨心尼の遺廟を建て、又香燭の料として、同三年庚子、寺産を附せられたり。（當寺の境

九重塔

海福寺
武田信玄の持てくだりと云石の塔壹基
堂前池の傍にあり
天王殿

なり。鯉屋と唱へ、大江戸の小田原町に住んで、魚售たり。後隱栖して一元と號す。（衰翁、衰杖等の號あり。）常に俳諧を好み、檀林風を慕ひ、のち芭蕉翁を師として、此筵に遊ぶ事凡六十年、翁常に興ぜられて云く、去來は西三十三箇國、杉風は東三十三箇國の俳諧奉行なりと。（かばかりこの道の達人なりしなり。杉風一に芭蕉庵の號ありしが、後桃青翁にゆづれり。其舊地は次の芭蕉庵の條下に詳なり。享保十七年壬子六月十三日八十六歲にして歿せり。西本願寺の中、成勝寺に塔す。）

杉風句集

予閑居採茶庵それがかきねに秋萩をうつしうゑて、〔以下數字原本不明〕

露おきわたしたるゆふべ

白露もこぼれぬ萩のうねりかな　　ばせを

このあはれにひかれて

萩うゑてひとり見ならふ山路かな　　杉風

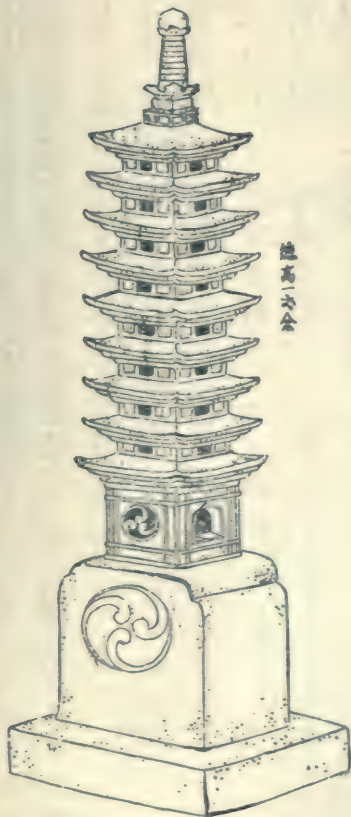
時雨

深川は月も時雨る夜かぜかな　　同

壇主　石川氏正之正茂

治工武州江戸居住　中村喜兵衛藤原正次

九層塔　寺境廻のかたはらにあり、高一丈ばかりの石の塔なり。相傳ふ、武田信玄のものなりと。むかし土屋氏某これを持傳へしが、當寺へうつし建つるといへり。

塔高一丈余

採茶庵舊蹟　同所平野町にあり。俳諧師杉風子の庵室なり。杉風本國は參州にして、杉山氏

當山洪鐘者寛文壬子年。石川政勝本住居士。捐之爲大福田。因請銘乎開山隱老和尚。永令垂不朽也。時天和二年壬戌之冬。劫火俄起。炎燎殿宇巨器等。茲者同氏思失先亡之本願。忻然鳩金。重新造焉。及乎竣工。知事來乞銘。遂再擧此以鐫其上。銘曰。

大化爐内　一火鑄成　中虛而寂　有扣則鳴
洪音嘹喨　醒覺群生　禪林令振　地府業輕
返聞自性　寂寂惺惺　壽源綿衍　福海澄淸
化風永扇　家國昇平　覺王聲敎　大〓難名

開山八十一翁隱元琦謹題

右

天和三年癸亥小陽吉日　臨濟正宗三十三世永壽山海福禪寺住持沙門獨本源和南謹識

永壽山海福寺　同所寺町通り中程の右側にあり。黄檗派の禪林にして、江戸觸頭二箇寺の一員たり。萬治元年戊戌の創建、開山は隱元禪師、中興は獨本和尚なり。本尊釋迦如來、左右に迦葉、阿難、十六阿羅漢等の像を安ず。開山隱元禪師の肖像もあり。

佛殿　額は二重家根に掲くる、開山隱元禪師の筆なり。

大雄寶殿

本尊の上に掲くる額、筆者かみにおなじ。

聯　本尊の左右柱に掲くる、同じ筆なり。

聯　同じ前の柱に掲くる、當寺七世對州和尚の筆なり。

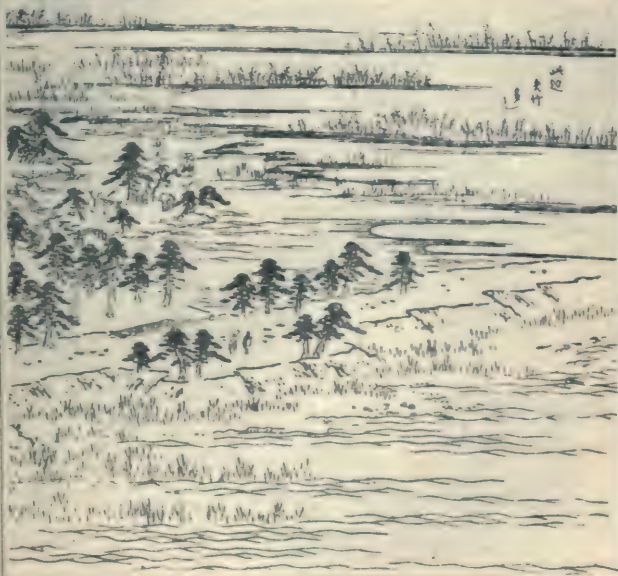
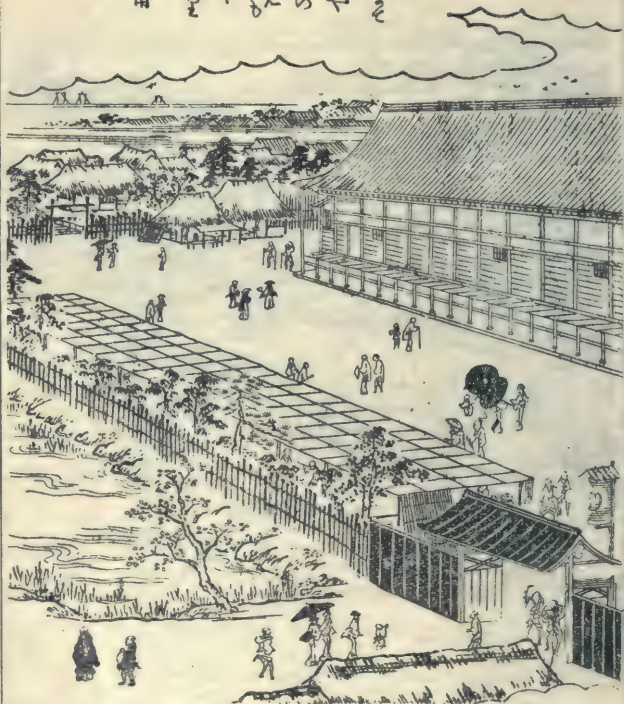
聯　おなじ左右のはしらに掲くる、大鵬の筆。

天王殿　内に關帝の像を安ず、額は二階の軒にかゝる。

天王殿

鐘樓　天王殿の右にあり、大鵬和尚の筆なり。

鐘樓

化鐘（カネ）の銘文は隱元禪師撰する所なり。其文左の如し。

宗瑞

深川木場

砂村
冨岡元八幡宮
洲崎弁天より
十八丁あまり東
の海濱にあり
深川八幡宮の
旧地なりといふ
此辺
大竹
多し

洲崎辨財天社

さんじうさんげんだう
三十三間堂

此地は江都東南の佳境にして風色を四時の勝概に兼る中にも元日の盤のうちは松下の騒人ここにつどひ来りて亭中の樽俎を対し一杯を傾けしては酔興のあまり名ある梅の木のもと秋には尾花も斯とき一夜の笠を掛てまき忘られぬべし

二軒茶屋
雪中遊宴之図

洲崎辨財天社　同所東の方、洲崎にあり。別當を吉祥院と號す。本尊辨財天女の像は、弘法大師の作といふ。相傳ふ、元祿年間、深津氏正隆、台命を奉じ、八幡宮より東の方の海濱を築立てて陸地とす。依て同十三年庚辰、護持院の大僧正隆光、（字榮春河邊氏）此地に天女の宮居を建立すとなり。

此地は海岸にして佳景なり。殊更彌生の潮盡には、都下の貴賤、袖を連ねて眞砂の文蛤を捜り、又は樓船を浮べて、妓婦の絃歌に興を催すもありて、尤も春色を添ふるの一奇觀たり。又冬月千鳥にも名を得たり。

長光山陽嶽寺　深川富岡橋の北詰、横小路にあり。妙心寺派の禪宗にして、本尊觀音大士の像は、惠心僧都の作なりと云ふ。向井氏忠勝開基の精舍にして、文室和尚を開山とす。（陽嶽は向井氏の法號なり。）和尚は相州三崎見桃寺白室和尚の法弟なり。（見桃寺も領主向井氏布金の道場なりといふ。）

出山釋迦如來像　立像三尺ばかりあり、極めて妙作なり。坪内大隅正勝といへる人、當寺文室和尚の需に應じて彫刻せしよし、寺記に見えたり。

二代目英一蝶墳墓　當寺卯塔の中にあり、碑面に機外道輪信士元文二年丁巳閏十一月十二日と記してあり。通稱は長八、名は信勝といふ。

山開 毎年三月廿一日弘法大師の御影供を修行す。此日より同廿八日まで、當社別當永代寺の林泉をひらきて諸人に見物をゆるす。俗に山開ととなへて、大いに群集す。

祭禮 隔年八月十五日に執行す。此日神輿三基、本所一の橋の南、藏舟浦「オフナグラ」の前たる行祠「オタビショ」へ神幸、同日還輿す。この祭禮は寛永二十年癸未八月十五日初めて執行ありけるより連綿たるよし、江戸名所記に見えたり。また慶安四年の秋、天下泰平の御禱の爲、相州鎌倉鶴岡八幡宮の法式を模して當社に流鏑馬「ヤブサメ」をはじむ。左右に假屋棧敷をかまへて是を見物す、貴賤市をなせるよし、同書にみえたり。後世にいたり、淺草の三十三間堂をこゝに遷されたるも、其流鏑馬の餘風によれるならん歟。

當社門前一華表より、内三四町が間は、兩側茶肆酒肉店軒を並べて、常に絃歌の聲絶えず。殊に社頭には、二軒茶屋と稱する貨食屋などありて、遊客絶えず。牡蠣、蜆、花蛤、鰻鱺魚の類を此地の名產とせり。

三十三間堂 同所二丁ばかり東の方にあり。相傳ふ、寛永年間、或人云ふ十九年なりと大江戸の弓師備後といへる者、射術稽古の爲、京師蓮華王院を摸して、三十三間堂を創立せん事をこゝに乞ふ、依て淺草において地を賜ひ、諸家に勸進して、建立の功を募る。こゝに於て同十九年壬午十一月、普請落成す。淺草清水寺の邊を今矢崎と字するは、三十三間堂の舊地なればなり。その地今は町家となれり。俗間堂前と唱ふるも、三十三間堂の前と云ふべき略語也。然るに元祿十一年戊寅九月、回祿の災に罹りて、灰燼せしかば、其後今の地に移させられたりとなり。江戸三十三間堂矢數帳に、慈眼大師の發起なりとあり。又一說に、むかし森刑部直義といへる射術一流の武士これを建立し、江戸射術の達人數家と共に力を盡せし所なりともいへり。

其三

其二
甲山

永代寺山開
毎年三月廿一日より
同廿八日迄のうち
林泉をひらきて

諸相之土肥山焉。蓋此擧也。欽祈國家。旁及自禱云。遽具狀來諏鳳卿以文之。鳳卿聞之。采蘩采蘋可薦於鬼神。忠信由中也。而況於不朽。周之所歸。風之所自。於是乎觀人載上之心矣。神之歆可知也。因敍厥載勒右柱。銘以繫左柱。亦其所需也。

銘云。

繄昔應神　帝惠協天　發跡于豐　男山之遷
威靈顯赫　奕世且千　邈矣東海　齋祠壹公
惟石之柱　甓之祠前　懇祈鼓鼜　私禱相延
敦忠祗肅　神監昭然　幽宮陰隲　福釐永年

元文戊午夏五月

東都中祕書監　源鳳卿子陽甫撰

得水赤井啓拜書

ず、唯茅茨の營をなすのみ。然るに大和國生駒山の開基寶山師、正保三年丙戌、永代寺周光阿闍梨の法弟となり、寛文四年の頃、靈夢を感じ、宮社を經營す。日あらずして落成し、結構備はる。しかありしより以降、神光日々に新にして、河東第一の宮居となれり。當社の額に八幡宮と書したるは、青蓮院宮尊證法親王の眞蹟なり。社內末社多し。依て悉く是を畧す。

當社四隅鎭守　艮隅　蛭子宮（宮川町の川端にあり。）　巽隅、荒神宮（入船町の道の傍にあり。）　坤隅、摩利支天宮（永代寺門前仲町の南にあり。）　乾隅、大勝金剛宮（同所黒江町にあり。）

國女櫻（永代寺林泉のうちにあり、正德年間國女〔ソノメ〕といひて俳諧を好める婦女、これを植たりといへり。歌仙櫻とも名づく。今は枯れてわづかに存せり。その頃三十六株ありしゆゑに、歌仙とは名づけたりしとなり。）

二華表（惣門の前にあり、石をもて製す。左右の柱に銘文を刻す。此文は鳴嶋氏撰する所にして、書は赤井得水なり。其文左のごとし。）

富賀岡八幡神祠石華表銘並序

維著雍敦牂之歲。都下人某某等拾柒名。戮力率錢建富岡八幡祠歬石華表一。凡厥高壹丈伍尺。左右中間稱焉。石以代木備不朽也。厥石取

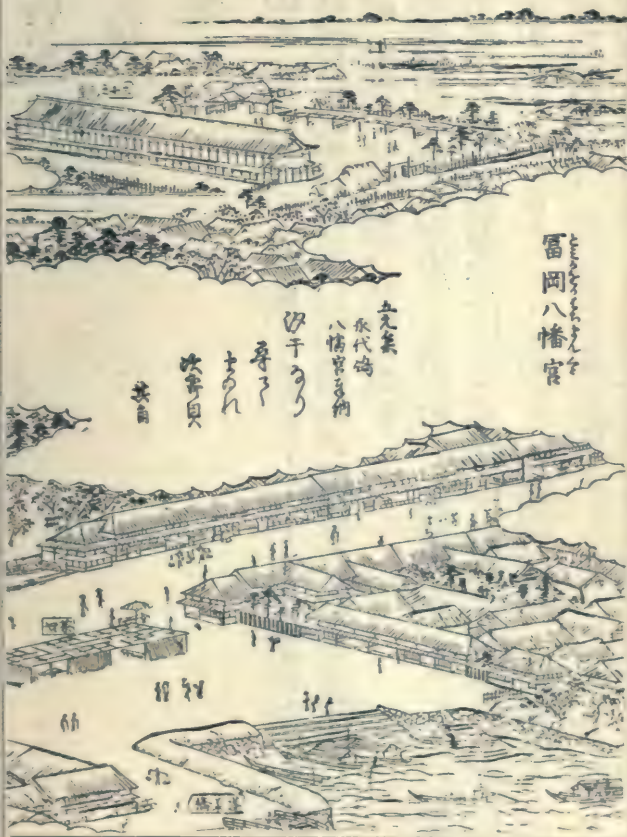
其二

社内拘戸あまたの中にも
二軒茶屋とよふもの
ことに名高し

富岡八幡宮
五元集
永代嶋八幡宮奉納
汐干なり尋てまいれ次郎貝
其角

江戸名所圖會

搖光之部

卷之七

富ヶ岡八幡宮　深川永代嶋にあり。別當は眞言宗にして、大榮山金剛神院永代寺と號す。江戸名所記に、寛永五年の夏、弘法大師の靈示あるにより、高野山の兩門主碩學、其外東國一派の衲僧、此永代嶋に集會し、一夏九旬の間法談あり、別に弘法大師の御影堂を建てて、眞言三密の祕蹟を講ず、それより以後神前に神燈のあがる事ありと云々。

本社　祭神　應神天皇神影は、菅神作　相殿、右天照大神宮 左八幡大明神 三坐

相傳ふ、往古源三位賴政、當社八幡宮の神像を尊信す。其後千葉家、及び足利將軍尊氏公、鎌倉の公方基氏、又官領上杉等の家々に傳へ、太田道灌、崇敬殊に厚かりしが、道灌歿するの後は、神像の所在も定ならざりしに、寛永年間、長盛法印、靈示によりて感得す。今當社より十二丁ばかり東の方砂村の海濱に、元八幡宮と稱する宮居あり。當社の舊地といふ。依て此地に當社を創建すといへども、いまだ華構の餝におよば

江戸名所圖會

搖光之部目錄　〔原本第十八より第二十まで三册〕

江戸名所圖會 四 目錄

江戸名所圖會

四